

---

# 漂流者はハイブリッドな現役将校～オヒトヨシナシニゾコナイ～

金貨の騎士

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

漂流者はハイブリッドな現役将校くオヒトヨシナシニゾコナイく

### 【Nコード】

N0721X

### 【作者名】

金貨の騎士

### 【あらすじ】

海鳴市にやって来た次元漂流者は魔法と質量兵器の両方を使用する異世界の軍人で、しかも……。作者はこれが初挑戦な初投稿です。どうかよろしくおねがいします。

## プロローグ（前書き）

はじめまして、金貨の騎士です。よろしくお願いします。

## プロローグ

### 緊急報告

第374特別調査地区の探査中、突発的次元崩壊が発生。崩壊そのものは元々危惧されていたため特に問題は無く、調査地区の全技術データも回収に成功。

しかし、

その次元崩壊に1名、この部隊の指揮をとっていた《ファイア・レイガード》が巻き込まれ、行方不明となった。

彼の損失は第374地区の全技術データ消滅以上の痛手になるため、目下捜索中である。

ベルファイア連邦政府軍第七師団L大隊副隊長リオル・ヴェルシア  
中佐・記

## 第一話 流れ着いた将校（前書き）

いざ参らん本編に。

## 第一話 流れ着いた将校

―第97管理外世界・地球・海鳴市・18..28―

??? side

・・・えーと、とりあえず落ち着け俺、冷静になれ俺。ゆっくりでいいから自分の事を思い出せ俺。

名前はフィーア・レイガード、二十歳、職業軍人、独身。よし、完璧。とりあえず・・・

――むくり

起きよう。しかし、全身ズキズキするが特に・・・

「・・・頭痛ええ。酒でも飲んだっけ？」

そうだ、さっきまでみんなで居酒屋にでも行って、そのまま路上で眠ってしまったんだ。そうに違いはない。断じて亜空間での任務中に事故って時空をジャンプしたわけn・・・

《フィーア・・・あなたが参加した飲み会は2年前が最後ですよ?》

「なんか俺が寂しい奴みたいな言い方だけど、仕事が忙しかっただけだからな！？リリア！！」

フィーアは左腕に着けている腕時計のようなサポートAI兼通信機のリリアに返事を返した。

「・・・リリア、いったい何が起きたんだ？」

《あなたがだいたい覚えてる通りだと思いますが？》

「構わない、状況を報告せよ。」

幾分口調をまじめにし、そう言った途端にリリアの口調もそれに応じるがごとく変化した。

《報告。民歴56年5月。我々第七師団I大隊は大隊長の指揮のもと、突如亜空間に出現した第374特別調査地区の探査及び技術データの回収の任務を遂行。しかし、その終盤で危惧されていた時空崩壊が発生、部下の退避を優先した指揮官1名が脱出に失敗、現在行方不明扱いとなっております。》

「その行方不明者ってのは当然・・・」

《あなたのことです。》

あちゃあ〜と額を抑えながらフィーアは呻いた。そういや新兵が時空崩壊から逃げ遅れていて、そいつ助けてたら自分は間に合わなかったんだっけな・・・

「一応確認するが俺の頑張りは報われたのかい？」

特にその新兵と自分の副官であり親友のリオルが気になる・・・

《死人0、行方不明者もあなただけ、というのが今の私の最後の記録です。》

「お前が言うならそうなんだろ・・・まあ少し気が楽になったよ。」

さて、これからどうしようか。通信機兼サポートAIのリリアに軍から通信が無いところを考えると、エライ遠くに跳ばされたんだろうな……。このリリアは、銀河一個分離れた場所からリアルタイムで通信できる程高性能なのだ。そのリリアに通信が一個も無いということとは、俺がリリアが圏外になるほど遠い場所にいるか、軍に捨てられたかの二択しかないのである。後者にいたっては自分は即行でクビになるほど上官にも部下にも嫌われてないので無い筈。ていうか後者だったら泣く……。



「まあ、何にせよここがどんな世界だか調べるのが先決かな？」

《そうですね、この世界の生活水準もさほど低く無さそうなので、サバイバルすることも無いでしょう。まずはこの世界の知識を集めましょうか。》

「よし！そうと決まれば早そっく《警戒！！9時方向！！》・・・え？」

あゝ、俺そーいえば路上にいたんだった。周り見りゃリアの言う通り割と文明高そうじゃん。てことは、自分の世界にもあった車輪が4つ付いたアレ・・・

——ドキャア！！——

・・・いつまでもいたら自動車が通るに決まっているじゃん・・・もっとも、“この程度”で俺は死なないのだが・・・。

キリモミ状態で空中を舞うさなか、フィーアは視界の端になんとも言えない表情で、こちらを眺めている金髪の少女と犬耳の女が見えた気がしたが、ハッキリ確認する前にこの世界に來た時同様“また”顔面から地面に落ち、視界がブラックアウトするのだった。

《  
・  
・  
・  
先が思いやられます。  
》

## 第一話 流れ着いた将校（後書き）

ご感想、ご指摘お待ちしております。

## プロフィール（前書き）

オリ主フィアの紹介

## プロフィール

名前 フィーア・レイガード

年齢 満二十歳

性別 男

職業 軍人（階級については黙秘）

容姿 赤みのある茶髪で瞳は紺色。

顔はよく優男呼ばわりされる程度に整っている。  
やや長身長屈。

服装 故郷の軍隊の軍服と士官帽を装着。旧日本軍の軍服に似ている。

全体的に黒色で、控え目に金色の装飾とボタンが付いている。  
フィーアの軍服はカスタムされており上着の裾が膝まで伸びている。

性格 基本お人好しだが、悪知恵がよく働くため抜け目が無い。

戦術 剣と銃と魔法と気功術

## 第二話 邂逅

フエイトside

魔導士フエイト・テストロッサは困惑していた。

母親の指示のもと、ジュエルシードというロストログアを集めるため海鳴市を一通り探索し、ひとまず今日は切り上げ、自宅兼拠点にしているマンションへの帰り道の途中に倒れている男を見つけてしまったのである。その男がただの人間なら別に対処に困ることもなかったのだが、

《マスター、あの男から魔力反応があります。》

自らの愛機バルディッシュのこの一言によりどうするべきか悩むハメになったのである。

（この管理外世界に魔法文化は無かった筈・・・ということは、あの人は時空管理局員か次元漂流者のどちらか・・・）

今、自分たちが管理局と接触するのは非常にまずい。しかしこのまま放置した場合、後々敵として脅威になるかもしれない。何より漂流者だった場合、彼女の性格上ほっとくこともできなかった。

この葛藤としばらく戦い続けること数分、

「——エイト、フェイトったら!!」

「っ!!、ごめんアルフどうしたの？」

使い魔のアルフが声をかけてきた・・・というかさっきから呼んでいたらしい。集中しすぎて聞こえなかったようである。

「アイツ目が覚めたみたいだよ。」

そう言われアルフの指さした方を見ると、確かに男はむくりと起き上っていた。改めてよく見てみると、その姿は全身黒色で物々しく、腰には日本刀とレイピアが合わさったような剣がぶら下げられていた。

——確実にこの世界の人間じゃ無い。

フェイトはそう結論付け、一層警戒しつつ観察することにした。

「・・・なんか一人で喋りだしたね。（・・・変な人。）」

「いや、左腕に付いてる何かに話しかけてるみたいだよ。」

「アルフ、見えるの？」

「フェイトがバルディッシュと話してる時もあんな感じだからなんとなく・・・。」

「・・・。」

痛い人に見えたあの人と同じようなことを自分がやってることを知って、少し凹んだフェイトだった。

そうやって落ち込んで顔を俯かせている間に、男は何かを決心したように立ち上がったのだが・・・

「・・・あっ。」

——ドキヤア——！！



アルフの間の抜けた声と、すさまじい音が聴こえたので顔を上げて視線を向けると、男が自動車に派手に撥ねられていた。途中、目が合ってしまったが気にする前に男は顔面から地面に落ちた。

突然のことに二人はパニックに陥った。

「ど、どど、どうしようアルフ!？」

「落ち着くんだフェイト!! えーと、こういう時は911だか117とかいう場所に電話するんだ!! あれ? なんか違う気がする・・・」

「私、電話なんて持っていないよ!!」

「あゝもう!! どうすりゃいいんだい!？」

——二人がカオスの極地に陥るその間際、それをくいとめる存在が現れた。

「痛えな畜生!! いきなり過ぎんだろうが!! 何が『警戒九時方向』だ!!」

《気づけなかったうえに避けなかったことが恥ずかしいのは解りますが私に当たらないで下さい。》

何事も無かった(?)ようにピンピンしながら混乱の元凶がもう復活していた。

フェイトとアルフはもう啞然とするしかなかったのだが、もう彼を無視できない存在であり状況であると覚悟した。なぜなら・・・

「さて、余計な会話はここま《凶星だったんですね?》やかましい!!!・・・おい、その二人。少し一緒に会話するのと口封じされるの、どっちがいい?」

元凶フィーアがこっちに向かってそんなことを言ってきたので二人は再び混乱しそうになった。

### 第三話 自己紹介（前書き）

文才が欲しい……。グダグダ感が無くならない……。

### 第三話 自己紹介

フイーア side

・・・我ながらこれはないわーOrz。いきなりこんな小さい子に「お話と口封じ」の二択って俺なに言っちゃてんだろう……。あーあ、金髪の子はなんか武器的な物を出すし、犬耳は牙剥いてるよ……。リリアの言う通り、いつも軽く“避けれる”筈のモノにまるで反応できなかったことに動揺していたのもあるが、それを差し引いてもさっきのセリフはナイ……。

《大人げない、みにっちい、最低、チンピラ、外道……》

「それ以上言わないでくれ、トドメになる……。えーと二人とも今のは本気にしないでくれ。お話したいのは本音だが、危害を加える気は無い。」

《おまけにロリコンですか。》

「今のでなんでそうなる!？」

「・・・あの、すみません。先に一つ訊いていいですか？」

「おっとすまなかった、いいぞ何だ？」

「・・・あなたは時空管理局の人ですか？」

若干緊張を含んだ口調でそう訊いてきた。今ので分かったことが四つ。

1つ。時空管理局なる組織が存在する。

2つ。彼女の口調からして、これは俺が敵か味方かを確かめる質問。

3つ。つまり時空管理局とそれに敵対する勢力がある。

4つ。彼女らはそのどちらかに所属してる。

（て、とこだろう。さて一番無難な返事は・・・）

「とりあえず、俺は時空管理局がなんなのか知らない。」

馬鹿正直に答えることにした。どうやらその選択は正解だったようで彼女の緊張が少し解けたようだ。

## フェイトside

（最初の「口封じ」発言にはすごい焦ったけどそれほど敵意は持っていないみたいだし、何より時空管理局ではないなら大丈夫かな？）

バルディッシュを起動したままだがフェイトはそう思い、少し警戒を緩めた。

「じゃあ、あなたは次元漂流者なんですね？」

「それもなんなのか知らないが別世界から流れてきたのは認める。」

それを聞いてとりあえず一安心することにした。次元漂流者なら自分達と特に敵対する理由もないはずなので戦うこともないだろう。

（でもコイツ十分胡散臭いし、怪しい奴だと思うよ？変な格好してるし・・・）

念話でアルフが話しかけてきた。確かに目の前の人はこの世界でも自分達の世界の間接的な格好である。軍服で堂々と帯剣してる人なんて尚更初めて見た。

・・・確かにもう少し素性を訊いたほうがいいかもしれない。と思  
った矢先、

《変質者の称号もGETしたようですね》

「もしかして八つ当たりしたこと本気で怒ってるのか！？あと犬女、  
前半二つはともかく最後の一つは撤回しやがれ！！」

「アタシは狼だ！！って、アンタ今の念話聴こえたのかい！？」

「ん？思念通信でなく念話って言うのかそれ？」

《通信用電波使ってないと思ったら魔力しか使わない別物のよう  
です。一応通信波は拾えますが。》

いきなり会話に乱入してきた。しかも知らない言葉が出てきた。

「思念通信？」

「俺達の世界の通信手段のひとつだ。ていうかいい加減にお互い名

前くらい名乗らないか？」

そういえばまだお互いの名前すら知らなかった。

「それもそうですね。私はフェイト・テストロッサ、魔導士です。」

「フェイト!？」

まさかすんなり名乗るとは思わなかったのでアルフは驚いた。

「多分この人は見た目ほど悪い人じゃないから大丈夫だよ。」

——見た目は悪いってことかよ…とフィーアが落ち込んだのは内緒である。

「フェイトがそう言うなら……。アタシはフェイトの使い魔のアルフだよ。さっきも言ったけど犬じゃなくて狼だからね?」

「それと、私のデバイスのバルディツシュです。」

《よろしくお願いします。》



ファイア side

金髪の女の子がフェイトで、犬耳…じゃなくて狼耳がアルフで、武器がバルディッシュか。バルディッシュにもリリアと同じように自我を持ってるようだな……。うちの子に影響されなきゃいいが…。

「次は俺たちの番だな。ベルファイア連邦政府軍、L大隊所属ファイア・レイガードだ。」

《先行試作型装着式オペレーター、NO12、リリアです。》

全く聞き慣れない単語が出てきたせいかフェイトとアルフはポカンとしていた。

「…えっと、リリアはデバイスじゃ無いの？」

フェイトがリリアに尋ねた。

《あなたの言うデバイスとは、そのバルディッシュが基準と考えていいですか？》

コクリと頷いて返す。

《デバイスは器はともかく原動力や構成、発生させる物のほとんどが魔法や魔力のようで、しかも武器としての役割が多いようですね。ですが私の場合、デバイスと違い魔法より機械の割合が多めで造られています。なにより私はどちらかというとコンピューターや通信機のような役割が仕事です。》

「これ俺達の世界では普通なんだけど聞いたことない？あとベルフイーア連邦も？」

「「全然」」

・・・こりゃ本格的に帰れないことを覚悟しなきゃいけないかもしれない。この技術は自分の世界だけでなく全“同盟世界”での常識なのだ。ここは完全に自分の知らない世界で、知らない宇宙のようだ。

「まあ、いいや。とりあえずよろしくな。」

「うん。よろしく。」

・・・そういえば、いつのまにかタメ口きかれとる。

こうして魔導士と将校の邂逅はようやく一段落した。

## 第四話 職業は軍人です

フィーア side

自己紹介も終わり一息つき、立ち話もなんなので歩きながら話すことにした。その途中、時空管理局と次元漂流者の説明をもらった。正直、時空管理局とは組織的に接触したくないし、自分の世界と接触させるとヤバイ気がする……。なんて考えてたら、

「ところでさあ。」

「ん？」

「フィーアの世界ってどんなとこなんだい？」

アルフが尋ねてきたきた。

軍事関係ならともかく故郷についてなら幾分喋ってもいいか……。

「俺の世界はな、リリアを見てだいたい分かると思うけど科学と魔法が共存してる世界なんだよ。魔法を科学で補い、科学を魔法で補う。俺達自身は“魔道科学”って呼んでるけど。おかげで周囲と比べて随分と出鱈目な世界になってるけどな……。」

「へえ、なんかよく解んないけどすごいんだね。」

——よく解んなかったのかい・・・

「・・・そして、その出鱈目な技術を使って時空管理局のように別世界と交流がある。」

「「え!?!」」

今の発言でフェイトも会話に参加してきた。さっきの管理局の説明を聞く限り、別世界…もとい別次元世界だっけか?と交流する技術を有するのは管理局のあるミッドチルダとごくごく一部だけ、みにいってたがここまで驚くことかね?

「そんなにすごいのか?」

「少なくとも私たちは管理外世界や認知外世界でそういう世界は聴いたことがないよ。」

「うーん、ますます管理局と会いたくないな・・・。」

接触したくないのにあっちが興味を示すようなことのオンパレードじゃねえか……。

「どうして？ 私たちはともかくフィーアは次元漂流者だから保護してもらえば……。」

——“私たちはともかく” ってやっぱこの二人、管理局とトラブル抱えてるのか……

《そのあとがマズイのです。》

「リリア……？」

しばらく喋ってないからいるの忘れてたよ……。

《仮に保護してもらって私達の世界、ベルフィーア連邦に送ってもらったとしてその後、時空管理局が連邦をほっとくとは思えないのです。》

「さっきも言ったが俺達の世界の技術の半分は科学だ。それに比例して軍事力も半分開らいが科学兵器……管理局が根絶を目指す質量兵器ってやつなんだよ。交流のある同盟世界にいたっては、連邦

のおかげで魔法の存在は知っても馴染まないで科学一筋の世界もあるくらいだ。」

もし連邦がこの地球みたいに魔法文化がなければ管理外世界ということで片付くのだが、生憎かなりの高水準で普及している。十中八九接触を目論むだろうがその半面、自らが否定する質量兵器も同じくらいの割合で存在している。管理局は間違いなく質量兵器、すなわち科学を捨てると言いかねない。そして連邦がそれに従うわけもない。最悪戦争に発展しかねない。

「つーわけで何かしら考えてからじゃない限り管理局とは会いたくない。」

「アンタも大変だねえ……。」

ただでさえ遭難中だったのに敵対勢力候補の存在って、もう胃が死ぬわ……。

「本当にこれからどうし——ん？」

《北部数キロ先に魔力反応を確認!! かなりの出力です!!》

リアの言う通りかなり大きな魔力を感じた。これは放置したらマ

ズイレベルだなオイ・・・。

「ッ！！フェイト！！」

「ジュエルシールドだ・・・！！」

二人はコレの心当たりがあるみたいだな。

「おいフェイト、これはいったい何なんだ？」

「ごめん、説明できない・・・。とにかく私達はもう行かなきゃいけない。行くよアルフ！！」

「待つてよフェイト！！えっと・・・じゃあね、フィーア。とにかく頑張りなよ！！」

そう言ってフェイトは飛び去り、それを追うようにアルフも飛び立った。魔力光の光で二人が流れ星のようだったのは措いといて、フィーアはあまりの急展開にしばしポカンとしてしまった。別に二人が飛んだことには驚かなかったが、災害レベルの魔力反応の発生源に迷わず即効で向かって行った二人に啞然としていた。



「大丈夫か？あの二人・・・。」

《発生直後程の出力はありませんが現在も反応は消失していません。  
》

——そうか、だったら・・・

「行くか・・・。」

《あまり目立つ真似をすると管理局とやらと接触する可能性が増えるのでは？》

「ここが連邦の未開の地で、管理外とはいえ管理局の縄張な時点で接触は避けれないさ：それに、あんな子供をほっとくわけにもいかないだろ？」

またコイツ《ロリコン》とか言ってからかってきそうだが、あんな10歳にも満たない子供が危険な場所に行ったというのに軍人の自分がそれをほっとくなんて出来るわけないし、する気もない。

《あなたらしいですね。》

意外と普通に喋ってきた。

「そりゃどうも。ついでに言っとくが俺はロリコンじゃねえぞ?」

《知ってますよ。そして、あなたがお人好しなことも。》

そして、リリアは改めて言う。

《ついて行きましょう、どこまでも。》

フィーアは短く、だが真剣に返す。

「感謝する。」

——その日、海鳴の夜空に金色と朱色の流星を追うように黒い影が空を舞った。

#### **第四話 職業は軍人です（後書き）**

次回初戦闘描写。書けるかな…。

## 第五話 将校戦場に現る（前書き）

本格的な戦闘は次回になっちゃいました・・・

## 第五話 将校戦場に現る

アルフside

アタシの御主人様のフェイトは一流の魔導士で、なにより優しい傲慢の主だ。でもちょっと天然なところもあって、なんだかんだ言って年相応の女の子なんだと思う。それはいいことなんだろうけどやっぱり・・・

「今は勘弁してほしいよおおおおおおお！！」

アルフはそう絶叫しながらその傲慢の主、フェイトを抱えて爆走していた。なんでこんな状況になったか説明するため少々時間を戻す。

（十分程前）

「反応があつたのは、ここだね・・・。」

使用者の願望を歪めた形で叶えるといわれるロストログア、ジュエルシード。その反応を辿って二人は山の方までやってきた。

（あの鬼ババにフェイトが酷いことされないうちにさっさと全部終

わらせないと・・・)

内心でフェイトの母親に毒づきながらも周囲に被害が出ないように結界を張りながらジュエルシードを探す。ところが違和感に気付いた。ふいに視線を向けるとフェイトが棒立ち状態で固まっていた。おまけに使い魔の自分は主の精神とリンクしているためフェイトの今の精神状態が分かるのだが、さっきから上の空というか呆けているというか、とにかくボケっとしていた。

「ちょっとフェイト、なにぼーっとしてんだい。」

不審に思いながらフェイトの方にアルフは歩み寄る。

「フェイト!! いったいどうしゅ・・・。」

そこから先は言葉が続かなかった。なぜならフェイトが見ているものをアルフも見ただからである。

——8つの目をギラつかせ、8つの足を蠢かす、“人間サイズ”になった蜘蛛の群れがそこにいた・・・

（回想終了）

そんなわけで、今アルフは目をグルグル回しながら顔を真っ青にして気絶したフェイトを抱えながら、ジュエルシードで巨大化した（種族的に繁栄したいとでも願ったらしい）蜘蛛の大群から全力で逃げていた・・・。

「ていうか何でそんなに足速いのさ！？ぎゃあああああああ！！」

飛びかかってきた一匹を必死に避ける。長い8つの足をゴキブリのごとく高速で動かしながら、使い魔のアルフとほぼ同等のスピードで蜘蛛は追いかけてきている。今すぐにでも結界を解き、そのまま空を飛んで逃げたいが、蜘蛛が外に被害を出すかもしれないので多分フェイトはそれをよしとしないだろう：せめてなにかしら指示をくれればいいのだが当の本人はただいま絶賛失神中である。

「あゝもうっ！！お願いだからフェイト起きてええ！！」

「う・・・ううん・・・。」

「フェイト！！」

フェイトさんがログインしました。

「あれ？アルフおはよう。」

「寝ぼけてないでアレなんとかしておくれよ!!」

「え？（巨大蜘蛛の大群を見る）・・・キュウツ・・・。（ガクツ）」

「ちょっとおおおおおおお！？」

フェイトさんがログアウトしました・・・。

巨大蜘蛛さんがログインしました。（ピヨーン）

へシャアアアアアアアアアア！！∨

「来んなああああ!!」

もう駄目だと思ったその時、アルフでもフェイトでもない誰かの声が響いた。

「伏せっ!!」



アルフは反射的（本能とも言う）に姿勢を低くした。その直後、頭上を青白い閃光が通り過ぎ、飛びかかってきた蜘蛛に直撃した。蜘蛛はそのまま吹き飛ばされ、ジュエルシードの効力がなくなり空中で霧散した。アルフは何が起きたか分からず、とりあえず後ろを振り向く。すると、さっきまで自分たちを追いかけてきた蜘蛛の群れが追跡の足を止めていた。まるでこちらを威嚇するように・・・。

「まさかホントに伏せつつって伏せるとは・・・。」

《結局、狼も犬科ですからね。》

声のした方、前を向くとそこには左手に銃身がやや長めのピストルを持ったフィーアがいた。

「ア、アンタついてきたのかい！？ていうか封鎖結界はどうしたのさ！？」

《私が解析して勝手に入口を作らせていただきました。今はちゃんと閉じてありますのでご安心を。》

「そんでアルフよ、このゲテモノ集団はなんだ？放射能でもぶちまけたのか？」

《全個体に魔力反応を確認。出力は分散して劣っていますが最初の反応物と同種のものです。ですが発生源である反応物は別の場所にいるようです》

「ややこしいから最初の反応物を『ターゲット1』とする。こいつらは『エネミー』として随時番号を追加、同時にお前は『ターゲット1』を探知しろ。」

## 《了解》

着々と話しを進めていくファイア達にアルフは戸惑った。

「ちょっと、アンタら何する気だい!？」

「この騒動を静める。」

「ジュエルシールドはホントに物騒なモノなんだよ!？」

「そんなのコレ見りゃ分かるさ。ついでにあのフザケタ出力でこの不安定具合・・・、災害どころか下手に暴走させりゃ世界滅亡クラスじゃねえか・・・。」

《直接破壊するのは危険なので制御して強制停止させましょう。》

フィーア達はアルフとフェイトがやろうとした『ジュエルシード封印』とほとんど同じことをするつもりらしい。しかもこの二人（一人と一機）、よく考えると自分の張った結界にすんなり侵入してきたのだ。魔法の腕もそれなりなのかもしれない。なにより、あの蜘蛛の大群にはもう精神的にも本能的にも戦う気力が湧かなかった。フェイトにいたっては、まだ意識すら戻って無かった……。

「……じゃあ、任せるよ。」

結局フィーアとリリアに任せることにした。

「はいよ任せな。さて、単独の戦闘なんて本当にいつぶりだろう……。」

《L大隊の隊長になってからは誰かしら随伴してきましたからね。あなたの階級を考えると異常に少ない人数でしたが……。》

「上の連中が「戦果に見合わん」って言いながら無理やりよこした階級だもの。大尉以上のことはやりたくなかったのに書類仕事が増えたのなんの……。なんにせよ、久々に遠慮せず殺らせてもらう。そろそろ索敵終わった？」

《完了しました。アルフさんが張った結界の中に『エネミー』が1  
ゝ48体、周囲に展開中。さらに『ターゲット1』と思わしき反応  
が北東に確認されています。》

それを聞いたフィアは右手で剣をゆっくり引き抜き、口角を吊り  
上げ、獲物を見つけた肉食獣のような表情を浮かべた。アルフは場  
の空気が変化した気がした。

「数はさっきのを入れて50匹……。少々もの足りないが、これ  
からの厄介事への準備運動だ……。せいぜい長引かせろよ……。」

今のフィアにフェイト達と出会った時の雰囲気は一切なく、そこ  
には一匹の獣がいた。

《全『エネミー』、行動を開始しました。こちらに接近してきます。  
》

——瞬間、獣が雄たけびを響かせた。

「交戦を開始する……。来るがいい虫けらども!! 一匹残らず滅  
ぼしてくれる!!」

――異世界からきた漆黒の魔獣が咆哮を上げ、戦場に踊り出た。

## 第五話 将校戦場に現る（後書き）

フィーアのセリフが厨二臭くなっちゃった・・・orz



## 第六話 前哨戦ナリ

フエイトside

「あれ？アルフおはよう。」

「さっきとまるつきり同じセリフだね……。また気絶しないでよ・  
・・？」

「気絶？・・・ッ！！」

言われてトラウマ確定のあの光景を思い出す。

「ア、アルフ！！蜘蛛は！？ジュエルシールドはどうなったの！？」

「とにかく落ち着いて。そして蜘蛛共はホラ・・・。」

そう言って横を指差す。視線をそちらに移した瞬間、壮絶な光景が目に入った。黒い影が大蜘蛛の群を相手に大暴れしていた。青白い閃光で撃ち抜き、鋭い斬撃を叩き込み、強烈な蹴りを喰らわせ、蜘蛛たちは黒い影により次々とその数を減らしていった。



《現在確認できるのは『エネミー』が8体と『ターゲット1』のみです。》

「フン、つまらん……。オラァ!! その程度か!？」

「……ファイア!？」

自分のやってることに関わらせないため挨拶もそこそこに置いてきた筈の男、ファイアがいた。

「アルフ!! どうしてファイアがここにいるの!？」

「どうやら付いてきたみたいでさ……。アタシの結果もアツサリこじ開けて、しかもコイツらをどうにかしてやるっていうから任せた……。」

「なんで!？」

「だってフェイト起きないんだもん……。」

「……ごめん。て、そんな場合じゃ無いや!! コレは私たちがや

らないと・・・。」

「もう、終わるみたいだよ?」

「え?」

蜘蛛はもう3匹しかいなかった。完全にフィアに恐れをなしたように、蜘蛛共は怖気づいたようにジリジリと威嚇しながら後退していた。

《残りはこの『エネミー6、14、29』と『ターゲット1』のみです。》

「そんじゃ飽きたし、もう終わらせるか。」

瞬間フィアは駆け出す。蜘蛛が迎え撃つように上下に二匹、同時に跳びかかる。それにフィアは微塵も焦らず軽くジャンプし、足を狙ってきた一匹を避けながら銃弾を叩き込み、そのまま頭上に跳びかかってきた一匹を剣で貫いた。瞬く間に二匹は霧散した。

「ハイ、ラスト。」

振り向きざまに後ろから跳びかかってきた最後の一匹に回し蹴りを喰らわせ、宙を舞ったところに銃弾を放つ。青白い閃光、リニアガンの弾丸が蜘蛛に直撃し霧散させた。

（暴れ始めてから2分たって無いと思うよ・・・？）

（す、すごい・・・。）

改めてフィアが軍人、兵士であることを認識した瞬間だった。

《『エネミー』の殲滅を確認、残るは『ターゲット1』のみです。》

「了解。おや？起きたのかフェイト。」

フィアはこっちに気づいて近寄ってきた。

「・・・フィア。なんでついてきたの？」

「俺の職業は軍人って言ったろ？こういう厄介事には首突っ込まなきゃ気がすまない体質なんだよ。」

「でも・・・。」

「ちよいタンマ、本命が来るらしい・・・。」

《巨大な魔力反応の接近を確認、『ターゲット1』です。》

「ッ!! バルディッシュュ!!」

《Yes. sir.》

フェイトはデバイス、バルディッシュュを起動させた。アルフも戦闘態勢に入る。

「ん? そのまま休んでていいぞ?」

「そういうわけにもいかない・・・これは私たちがやらなきゃいけないんだ・・・。」

「・・・しょうがねえな。ただし、無理矢理にでも手伝わせてもらうぞ?」

「せっかくだし、手伝ってもらおうよ。ファイアってすごく強いみたいだしさ？」

「・・・分かった。」

アルフの言葉もあり、ファイア達にも手伝ってもらうことにした。自分のやってることに巻き込むのは本音を言うとは躊躇うところがあるのだが、実際に先ほどのファイアの戦闘を見るかぎり、ファイアの戦闘技術は凄まじく高く、さらにアルフの結界に侵入できるほどの魔法の腕もあるので心強いものがある。そもそも、自分が気絶してる間に大蜘蛛の群を蹴散らしてもらった時点で今更な話なのかもしれない・・・。と、そこへファイアが話かけてきた。

「ところでフェイト、お前らあの物騒な魔力反応物を・・・壊しにきたのか？」

「違うよ！！それにジュエルシールドは無理矢理壊そうとしたら大変なことになるんだよ！？」

血相を変えて答えた。下手にジュエルシールドに刺激を与えて暴走させた場合、次元震が発生し世界が崩壊することもあるのだ。当然そんな真似はしない。

「それじゃあ、そのジュエルシールドとやらの壊す以外の止め方は知

ってるんだな？」

「うん。」

「じゃあ、ジュエルシードはフェイトに任すわ。リリア、『ターゲット1』の情報は？」

《分析の結果、『エネミー』が一回り巨大化しただけでしかも動きが鈍いようです。しかし、魔力反応の発生源はコイツで間違いないようです。接触まであと3分です。》

「「うわぁ・・・」」

さっきの大蜘蛛達より大きいと聞き、フェイトとアルフは顔を青くした。そんな二人に苦笑いを浮かべながらフィーアは話を続ける。

「親玉とでも呼ぶか・・・。アルフ、結界を造れるなら相手の動きを縛る魔法とか使えるよな？」

「使えるけど？」

「即席の作戦だが、まずリリアが親玉が来る場所をピンポイントで

特定。アルフが魔法で動きを止め、俺が親玉を“半殺し”にする。魔法とダメージの二重拘束で動けないところをフェイトにジュエルシードの封印を直接やってもらう。それでいいか？」

ほとんど無駄がなく、お手軽な作戦だった。二人は即座に頷いた。それと同時にリリアの声が響く。

《『ターゲット1』接触まで1分きりました。アルフさん、座標イメージを思念通信：念話で送りますね。タイミングも私がお伝えします。》

「分かったよ。」

「私は？」

「俺達の後ろで待機。万が一、拘束する前に封印担当のフェイトが攻撃されるところまる。」

《みなさん、来ましたよ。アルフさん、10秒後に指定した場所に魔法を。》

「え？どこにいらっしゃるんだい？」

もう見えてもいい筈なのに親玉が一向に見当たらない。アルフは困惑した。

「いないじゃないk ≪8、7、6、…≫ちょっとリリア？」

そんなアルフを余所にリリアはカウントを続けた。

≪3、2、1、0！！今です！！≫

「ああもうっ！！【チェーン・バインド！！】・・・って、ええ！？」

リリアの合図に若干疑いと戸惑いを浮かべながらアルフは拘束用の魔法を放った。しかし、リリアに抱いた不安は即座に杞憂に終わった。親玉は本当に現れた。“上から”・・・着地点とそのタイミングをリリアは完全に予測していた。そしてそのリリアの合図により放たれたアルフの魔法ま完璧に決まった。しかし、親玉の図体は伊達ではないらしく、無理矢理振りほどこうとしていた。

「ヤバイ！！このままじゃ、強引に解除されちまうよ！！」

「そのために俺がスタンバイしてんだよ。」



そんな光景を尻目にフィーアは素早く、尚且つ柔らかく自分の剣を目前で振るう。すると剣が振るわれるたび光の線が引かれた。それを巧みに操り、みるみる内にフィーアは剣で光輝く魔法陣を絵描き、完成させた。そして・・・。

「・・・魔剣ヴィルガロム、魔銃モード。」

そう唱えた瞬間、フィーアの剣が黒い煙のようになったと思ったら即座に再度集合し、形を作った。ただ、フィーアの右手には剣では無く、普通のよりごつくて銃身が長い黒い拳銃が握られていた。

「【バスカヴィル・ショット】！！」

黒い銃口から放たれたのは純粹な魔法弾。魔弾はフィーアの描いた魔法陣を通過した途端、その魔力を激増させ10倍以上のサイズに巨大化した。弾丸から砲弾になった魔弾は、アルフの魔法にもがく親玉に無慈悲にも直撃した。凄まじい轟音をたて、爆炎が親玉を包んだ。

《『ターゲット1』の動きが停止しました。：いや、ちょっと待って下さい。『ターゲット1』の反応が消滅していきます！！』》

「マジで!?!もしかして加減ミスった・・・!?!」

「大丈夫だよフィア。ジュエルシード本体が現れるだけだから。」

フェイトの言葉の通り親玉の姿は消え、そこにはひっくり返った常識的サイズの蜘蛛と、光り輝く蒼い宝玉があった。

「アレが、ジュエルシード・・・。(リリア、こっそりデータとつとけ)。」

《(了解)》

「手伝ってくれてありがとう、フィア。あとは私に任せて。」

「おう。」

そう言いながらフェイトはジュエルシードに向かっていく。そして・・・。

「ジュエルシード、封印!?!」

―――夜の騒動はようやく終息を迎えた。

## 第六話 前哨戦ナリ（後書き）

やばいです・・・文がまとめれてる気がまったくしないです・・・

## 第七話 協力しましょうか（前書き）

ちよつと無理やり過ぎた…？

## 第七話 協力しましょうか

フィア side

ほとんど化物退治になった魔力反応物：もといジュエルシード封印作業。その決着がつき、ようやく三人は一息ついていた。しかし、フィアはフェイトたちと休みながらも思考にふけていた。

（このジュエルシードがヤバイ代物なのは解かるが、“この二人のこと”が分からん・・・。）

このジュエルシードはロストログアと言って早い話、超危険物なのである。そしてこれの始末は先程の説明の通りだと、フィア自身の見解は置いとくとして、この次元世界の警察組織である時空管理局とやらの役目らしい。百歩譲ってフェイト達が時空管理局に自主的に協力してると言うのなら、こんな若い年齢で危険なことをするのは無理やり納得したかもしれないが・・・。

「ところでフェイト、それ（ジュエルシード）どうするんだ？時空管理局にでも届けるのか？」

「えっと、その・・・、それはちよつと・・・。」

さつきから時空管理局のこととなると歯切れが悪くなるこの二人。まあ、最初の方で管理局と会いたくないみたいなのを言ってたから薄々勘付いているが、フェイト達は管理局から見たら犯罪者予備軍、もしくは犯罪者になることをしているのかもしれない。だが、解せない。さつきからフェイトもアルフも無関係な人を極力巻き込まないようにしながら立ち回っている。そんな二人が自分自身悪いと思っていることを自ら進んでやるとは思えなかった。

「じゃあ、なんでこんなことしてるんだ？」

「それとも言えない……。」

話が進まねえ……。あ、そうだ（ニヤリ）。

「じゃあ、質問を変えるわ。時空管理局の常識は誰に教えてもらった？」

「?・・・母さんにとリニスに。」

「（誰だリニスって…ま、いいか。）管理局に関わるなつったのもフェイトの母さんにとリニス？」

「母さんだよ。それがどうかしたの…?」

「フェイト…お前、その母さんにジュエルシード（それ）探して来  
いって言われたんだろ？」

「ッ!？」

凶星か……。世界の法律である時空管理局のこととそれに反する  
行為を促すなんて矛盾を仕込むってことは、このジュエルシードに  
フェイトを関わらすためのことに他ならない。ということはつまり、  
フェイト達にそのことを教えた者も当然関係者である。そして、フ  
ェイト達は自らこんな真似はしない筈。そこからフェイトの母親が  
指示したと推測した。

「と、いうわけだ。」

「……フィアの言う通りだよ。私達は母さんに言われてジュエ  
ルシードを集めているんだ…。」

視界の端で、急な展開についていけずにアルフがオロオロしていた  
のは無視するとして…やはり、そうだったか。それにしても、こん  
な取り扱い要注意の危険物を集めてどうする気なんだフェイトの母  
親は？ ……ん？、今なんて言った？ ……“集めている”だと…  
・？



「ちょっと待てフェイト、集めているってことはまさかジュエルシールドってこの一個だけじゃないのか!？」

「え? そうだよ。ジュエルシールドは全部で21個あるんだよ?」

「ハア!？」

「1個でもそうとうヤバイのに全部で21個だと!？ お前ら俺の胃袋によっぽど穴空けたいらしいなオイ!!」

「もう、目的とかどうでもいいや……。一応確認するけど、とりあえずフェイトとアルフはジュエルシールドを全部封印して持ち帰るんであって、暴走させて世界を滅ぼすわけじゃ無いんだな?」

「当たり前だよ!!」

「なら一安心だ…。フェイトの母親が何考えているのか不安だが、フェイトに集めろって言ったからにはそれなりの数が揃うまでは平気だろう…。それまでに色々対策考えておくか…。だが今はとりえず…。」

「俺もジュエルシールド集めに協力させてもらう。」

「「え!？」」

「もう今更無関係とは言わせねえぞ? だいたい、自分が今いるこの世界が滅ぶ可能性があるのにそれをほっとけるわけないだろ?」

《そもそも軍人の我々が人命に関わることに無視できるわけないでしょう?》

「リリアまで……。」

「フェイト、フィーアたちに手伝ってもらってこんなことさっさと終わらせようよ。」

ほんの少し考えたが結局……。

「分かった…。改めてよろしくフィーア。そして、ありがとう…。」

「なに、礼には及ばないさ。アルフもよろしくな。」

「ああ!! よろしく頼むよフィーア!!」

——こうして三人は、しばらく行動を共にすることが決まった。だが三人はまだ知らない。この出会いがその後大きな波乱を呼ぶことを……。

くオマケく

「ところでフィーア、アンタずっとその格好なのかい？」

アルフはそのままだが、フェイトはバリアジャケットを解除して私服になっている。しかし、フィーアはこっちに來た時と同様、黒い軍服のままである。

《この世界の常識の検索結果から考えると、今のフィーアの格好はイタイ人です。》

「それはイヤだな…。よし、**【服装換装】**。」

《了解》

するとフィーアの軍服がその形を変え始めた。帽子と上着は一体化してフード付ジャンパーに、ズボンはジーンパンになり今風の服装に

変わっていた。フェイトとアルフは呆然としていた。なぜならフェイトのバリアジャケットのように魔力を一切感じなかったのである。つまり……。

「フィーア：もしかして今の魔法使っていないの…?。」

「ん？これうち（連邦）の科学技術。」

《こんな的一般市民でも持ってますよ?》

「す、すごいんだねフィーアの世界って……。」

魔法を使わず魔法染みたことをするフィーアの世界にただ驚愕するしかない二人であった。

## 第七話 協力しましょうか（後書き）

ご感想、ご指摘お待ちしております。

## 第八話 夢（前書き）

またタイトル変えようかなあ……？

## 第八話 夢

??? side

気づいたら周りの全てが真っ黒だった・・・否、床は赤い、いや紅い・・・。辺りを見回すと、ポツンと白色の何かが目に入った。体が思うように動かなかったが、どうにかその白い何かが分かれるところまで這って近づくことができた。その白い何かは銀髪、ではなく完全に色が抜けた感じのする白髪の少女だった。顔を見るとその表情は悲しみ、絶望、後悔、懺悔など全て負の感情で染められていた。同時に、この少女を自分は知っている気がした。だが、そんな考えを忘れさせる光景が目に入った。

———この空間の紅を創りだしてるモノ・・・血だらけの“かつての自分”がいた・・・。

不意に視線を戻すと少女はこちらを見つめており、そして“今の自分”に問いかけた・・・。

———イマノアナタハダレナノ？

俺は…いや“僕”はその少女の問いに何も返そうとはしなかった・・。

## フィア side

「・・・こっち来て見た最初の夢がこれかよ…。」

起床時刻は朝の6時。今、フィアはフェイト達と同じマンションの一室にいる。昨日の騒動のあと、拠点どころか寝床も無いの思い出し、野宿でもしようとしたらフェイトに招かれたのである。見知らぬ男をかんたんに家に泊めちゃダメ!!とアルフと二人で諭そうとしたのだが、

「フィアはもう知り合いでしょ？」

そういう問題じゃねえ!!という感じの返答をされた。その後何度か説得を試みたが結局フィアとアルフが先に折れた。いくら協力関係とはいえ、いつまでも少女と同居する気はないので一日だけと



いう条件で。

「二人はまだ寝てるな……。よし、金作りに行くか。」

異世界から来たフィーアは実質無一文である。そのため、しばらくここで生活するにはやっぱりこの世界の通貨が必要であったが、自分より年下のフェイト達に金をもらうなんて選択肢は自分には無い。別に軍人であるフィーアはその気になればサバイバル生活を送れる。だが、彼が所属していた『ベルフィーア軍心得十カ条』にこんなものがある。

———未開の地で生き延びる根性と生活する知恵をつけるべし。

要はサバイバル能力も必要だが、異国の文明にすんなり馴染む技能も必要であるということ。自分が滞在する未開の土地の人間は敵にも味方にもなる。故に相手側を理解し、可能なら味方にするだけの手腕を身につけるようにしろという意味がある。もっとも、フィーアはそこまで忠実にこの心得に従ってはいない……。

「それにしても…、また“あの時”の夢を見るとはな……。」

今朝、自分が見た夢を思い出し思考にふける。あの夢は自分にとって忘れたい…、いっそ否定したい過去であるが、同時に“今の自分”を存在させている過去である。故に、否定すれば自分とこれまで自

分に関わったものまで否定することになる。だから今までこのことは極力考えないようにしてきたのだが：

「まさかコレに関係することが近々起きるってか？・・・いや起りようがないか・・・。」

考え事をそのへんで中断し、流石に無断で消えるとマズイのでフェイトとアルフ宛に『少し出掛ける』という内容のメモを書いた。

「んじゃ、行ってきました。」

まだ寝てるであろう二人を起こさないように、フィーアは静かに家を出た：ベランダから：。とんでもない高さから跳び降りたにも関わらず、フィーアは綺麗に、静かに着地した。そして、自分にしか聞こえない程度の小さな声で呟いた：。

“俺は僕だよ”・・・エルミア・・・。」

———夢で逢った白髪の少女、かつての初恋相手の問いかけにそう答えた・・・。



## 第八話 夢（後書き）

今後の伏線にするつもり  
のフィニアの過去

**第九話　よい子は真似しちゃーよ（前書き）**

フイーアが心得に忠実じゃ無いとはこういうこと・・・

## 第九話 よい子は真似しちゃうよ

不運な人A side

今、俺は海鳴市のある競馬場に相方と来ていた…ズタボロにされ、恐ろしい青年に引きずられながら…。

「オラッ、いい加減起きやがれ!!」

「「ひいっ!! すいません!!」」

微塵も抵抗する気が湧かなかった…朝っぱらから狩場であるいつもの路地裏に優男がやってきて、いいカモが来た!! といつものように二人でカツアゲしようとしたのだが…三途の川を渡りかけた…。この優男はカモどころか怪物だった。二人してボッコボコに返り討ちに合い、気絶させられ、気づいたらここにいた。コイツ俺たちをどうする気なんだ!?

ファイア side

(やっぱりどこの世界にもこういう輩ってのはいるもんだな。)

(《全世界共通ってやつですね》)

フィーアはリリアと談笑しながら正座している二人の哀れなカモ達を見下ろしていた。フィーアはあえてヒト気のない路地裏に行ったのである。自分から襲ったら負い目を感じるし、なにより犯罪である。だが、犯罪者を撃退するのであれば話は別だ。自業自得な上に警察に「カツアゲしようとして返り討ちに逢いました」なんて本人たちも言えるわけない。ということで、フィーアは路地裏へカモ狩りに向かったわけである。

(《それにしてもえげつなかったですね…》)

(すぐに気絶させたらどんな目に逢ったか相手が理解できないだろう?)

フィーアはチンピラ二人を気絶するギリギリ手前をキープしながら痛めつけたのである。その甲斐(?) あってか二人は従順な態度になっていた。

「おい、てめえら・・・財布出しな・・・。」

「「ハ、ハイ!」!」

なんの躊躇もなく財布を差し出す二人。

「よし…そこで一時間待ってろ、もし待ってなかったら……後悔するぞ…?」

「一生待ち続けます!!」

そう言ってフィーアは競馬場に入ってしまった。

くっきり一時間後

ご機嫌な表情をしてフィーアは帰ってきた。そして……。

「ちゃんと待ってたか…手え出せ。」

「ハイ…。」

なんとチンピラの財布を返した。なにかしらケジメ（追い打ち）つけさせられると思っていたのでいきなりすることに二人は困惑してい



た。

「金額は足りてるよな？」

「そ、そうですけど…なんで…？」

「お前らは俺に絡んで金をふんどくろうとした、俺は半ば恐喝してお前から金を借りた。だが、お前らはほとんど未遂だし、俺がこうやって金返せばお互い何も無かったことにできるだろう？…怪我の治療代も足しといたからな一応…。」

自分から絡まれに行ったことは柵に上げてそうチンピラ達を諭す。もともと、チンピラ狩りで金稼ぎする気は無く、本命はこの競馬である。軍隊生活で培った洞察力を無駄にフル活用し、強い馬と強い騎手を見分けてボロ儲けするのが本来の目的で、もうそれなりに稼いだのでこいつらと縁を切れれば万事丸く収まって帰れるというわけである。

二人は顔を見合せ、考えたあげくフィーアの誘いに乗ることにしたようだ。

「へへっ、じゃあそうさせていただきやす。今日はお互い何もなかったということ…。」

許されたことをいいことに早速調子が戻り始めた二人にフィアは少しイラッとした。罪悪感を減らすためこういう輩を選んだとはいえ、やっぱり腹が立つ。おもむろにそばにあった手のひらにギリギリ収まる石を拾う。

「一ついいかな？」

「?、なんすか？」

石を手で遊ばせながらこう言った。

「別にお前らが俺の知らない所で知らない奴に何しようがどうでもいい……。が、迷惑かけた奴の中に一人でも俺の仲間とその身内が混ざっていたら……。」

————バキヤアッ!!

「……潰すぞ？」

手のひらサイズの石が瞬時に片手で握り潰され、粉碎された。その光景を見て二人は自分達の体が粉々にされるのを想像して顔を真っ青にした。そして、

「二度とこんな真似いたしません!!」

二人はそう言い残し、脱兎のごとく逃げるように去って行った。

「流石にこれで懲りたろう。ふ、若者の未来を正してやったぜ…。」

《あなたは一切懲りてませんね…。この方法のせいで何回懲罰されたと思ってるんですか…?》

「……教官による折檻は本気で死にかけたな…。」

当たり前のことだが、相手の自業自得であるものの故意にやっているので当然許される方法では無い。上官にバレたときフィアは地獄を見るハメになり、さらに賭博の一切を禁止された。

「まあ、これだけ稼いだからもうやる気はないよ…（博打は解禁するけど…）。さて、マンションの部屋借りる金も当分の生活費も手に入ったし、買い物して一回帰るか…。」

特に食料品…。あの二人、ロクなもの食ってないからなあ…。昨日見たがフェイトはインスタントや冷凍食品、アルフにいたっちゃドッグフードだなんて…。おいしいものを食えるありがたい状況が無

駄にするあいつらには絶食訓練を受けた者として一言言わなきや気が済まん!!

「連邦政府軍一の調理兵（自称）の実力を見せてやるぜええええええ!!」――――ぬッ!？」

《南東数キロ先に魔力反応確認!! ジュエルシードです!!》

ちっ、せっかくやる気出したってのに買い物どころじゃ無くなった  
…。しかも…、

「おいリリア、魔道士の気配もするんだが？」

《お察しの通りフェイトさんとは別の魔道士の反応を1名、いや2名確認できます。》

管理局員かもしれないな…まだ何も対策考えて無いから、今回は無理してまで行くのはやめとこうかな？なんて思ってたら、

《フェイトさん達がジュエルシードのもとへ急行した模様です。》

「…行くしかねえか。」

フェイト達だけに任せて傍観するのが一番楽で安全なんだろうけど  
…どうしても性に合わないだよ、そういうの…。

《やっぱりお人好しですね。》

「我ながら難儀な性格だと思うよ…。いつも迷惑掛ける…。」

《お気になさらず。この迷惑が無くなったら、あなたについてく気  
も無くなりますから。》

「ハハッ…。さて、行くか。」

言うや否や、フィアはジュエルシールドの元へ走りだした。

??? side

「またか…。」

とあるケーキ屋で、二十代後半のグレーの髪で緑色の目をした男はそう呟き、溜息を吐いた。昨夜から無視できない大きさの魔力反応を何度か感じていた。おかげで昨日からロクに眠れていなかったが、自分のことはぶっちゃけどうでもいい。しかし…、

「どうしたん？溜息ついて。」

「いや、なんでもない。」

万が一にでも、この子が巻き込まれる様な事になるのは断じて許せん。素性の分からぬ、異界の住人である自分を家族として認め、扱ってくれる優しいこの子にこれ以上悲しみを与えると言うのなら…たとえ神であろうとこの手で葬ってくれる…。

「ふうん、まあええか。それにしても、ここのケーキほんまおいしいなあ。」

「ああ、本当だな。」

車椅子の少女と談笑しながら男はこの厄介事に介入する決意をした。まさか自分の同類と逢うことになるとは知らず…。

**第九話　よい子は真似しちゃーよ（後書き）**

はやての口調が分かんねええええええ！！

## 第十話 高い高い…ごめんなさい…(前書き)

なのは好きの人、ごめんなさい…。作者はアンチじゃないので段々待遇はよくするつもりです。



## 第十話 高い高い…ごめんなさい…

なのはside

はじめまして、高町なのはです。訳あってユーノ君とジュエルシードを集めるため魔法少女やってます。今日、私は友達のアリサちゃんと一緒に同じく友達のスズちゃんのお家に遊びに来ていました。けど、突然ジュエルシードの反応がしたから途中抜け出してまで封印に向かったら、

「あれは…まさか僕と同じ世界から来た魔導士!？」

ユーノ君が言ったように、私と同じくらいの金色の髪をした女の子の魔導士が現れ、手早くジュエルシードの封印を行った。そして、

「申し訳ないけど、いただいていきます。」

いうや否や襲いかかってきた。私はそれを迎え討とうとしたのだけど…。

「そおおおおおい!！」

「にゃあああああああああああ!？」

「なのはああああ!？」

後ろから気配がしたと思ったら誰かに掴まれて、おもいつきり空高く投げ飛ばされたの…。

一体何がどうなってるの？

フエイトside

私はただ驚いた。ジュエルシードの反応を辿ってきてみれば、ジュエルシードで大きくなった猫がいたし、自分以外の魔導士がいて少しびっくりした。でも、それはまだいい…一番びっくりしたのは…。

「そおおおおおい!」

「にゃあああああああああああ!？」

(何してるのフィーア!?)

どこから持ってきたのか、フルフェイスのヘルメットを被ったファイアがいきなりやってきて白の魔導士を空高く放り投げた。白の魔導士の子は猫みたいな声を出しながら空を舞った…遠心力で…。

「よおフェイト、俺だオレオレ。」

《詐欺ではありませんよ》

「いや、分かってるけどなんであんなことを…？」

とにかく聞かなきゃ色々の意味が分からない。

「おい！！お前たち、なのはに何するんだ！！」

「うおっ、ただの獣じゃねえのか。」

《もう一人の魔導士反応は彼のようにです。》

「魔法生物ではなく魔導士なんだな？コレ。」

「わっ!! やめろ離せ!!」

喋るイタチみたいな生き物を引っ掴みながらフィーアは念話で話しかけてきた、

（フエイト、こいつらは管理局の奴らなのか？）

（…ううん、違うみたい。もしそうだったら局員は名乗るらしいよ？）

（なんだよ、こんなの被らなくてもよかったのかよ。）

あ、管理局に顔を見られないようにするためにヘルメットをかぶって来たんだ…。

（そういえば、なんであの子投げ飛ばしたの？）

（敵か味方が分からないからギリギリ冗談ですむレベルで攻撃してみた。場合によっては協力関係を作りたい。人手は多い方がいいだろ？ 因みにアルフは先に帰ってもらった。）

あいつ、気が短いから交渉無理だろ…と、つけくわえてそう説明してくれた。フィーアって、ふざけてるようで一応ちゃんと考えてるんだ。自分だけじゃこの二人に手伝ってもらうなんて考えもしなかった…。

「今失礼なこと考えたな？」

「そ、そんなことないよ？」

「…そういうことにしといてやるよ。さてと、あの子、なのはだっけ？フェイトと同じ魔導士ならそろそろ自力で飛行して戻ってくるだろ。その時にお互いの話をしようじゃないかイタチ君。」

「ぼくはイタチじゃない、ユーノだ…！」

なんて喋ってたら…

「——————やああああああああっ！！！！」

——————びた————ん！！

白の魔導士の女の子が戻ってきた…いや、降ってきた…。あれ？あ

の子私と同じで魔導士なんだよね？

「…あの子、飛べないの？」

「なのはは魔導士になってまだ日が浅いんだよ！！いきなりあんなことされて冷静でいられるわけじゃないか！！」

「・・・フイーア？」

《・・・フイーア？》

「・・・THE DOGEZA！！」

バリアジャケットで無傷ながらも目がグルグル状態の白い魔導士の女の子、パニック状態のイタチもどき、ジャンピング土下座するフイーア。なんだろうこの状況…。

結局、なのはが目を覚ます前に一般人の気配が近づいてきたので、アリサとすずかロクに話しあうこともできずにその場を去るしか無かった…因みに、ちゃっかりジュエルシードは頂いてきた。

《さて、称号はどれにします？愚者、間抜け、役立たず、カス、そ

れとも能なし?》

「…すまん。」

「ア、アハハ…。」

この時、なのはがフィーアと再会したあかつきには“お話”ではなく“O☆H A☆N A☆S I”することを心に固く誓っていたことをフィーアは知るよしも無かった…。

「絶対なの!!」

## 第十一話 エンカウントフラグ（前書き）

今回オリキャラ二号の名前出します



## 第十一話 エンカウントフラグ

フイアー side

「温泉？」

「うん、さっきのくじ引きで貰えたんだ。」

先ほどの白い魔導士のことは、今日はもう忘れて三人で商店街へ買い物に行き、今はその帰りである。そして、別行動中にフェイトはくじ引きに挑戦し日帰りの温泉旅行のチケットを手に入れたようである。

「ほほう、そりゃいいや。行こうじゃないか。」

「え、でもジュエルシードが…。」

「今だってフェイトのサーチャーと俺の使い魔で探査してるのに全然見つからねえじゃん。」

先日からフェイトはサーチャーをとばし、フイアーは鴉のような使い魔を大量に飛ばしジュエルシードを探しているのだが一向に反応

が無いのである。

「あれって多分、軽く暴走しないとただの石ころと区別つかないんじゃないのか？　だったら、時がくるまでノンビリする方が後々ためになるってもんだ。それに最悪の場合、俺の使い魔がどうにかするさ。」

「アタシもそう思うよ。なあフェイト、今までロクに休んでなかったんだからたまにはさあ…。」

その言葉を聴いて二ヤリとするフィーア。段々分かってきたが何事も控えめで遠慮気味のフェイトは自分とアルフが二人で言うの大抵…。

「分かった、そうするよ。」

首を縦に振るのだ。フィーアとアルフは視線を合わせ。

（グッジョブ！）

と、互いにアイコンタクトして心の中でサムズアップするのだった。まだ出会って一日たらずだが、三人ともすっかり馴染んできたようである。

「んじゃ、今日はさっさと帰るか。」

「あれ？夕飯の買い物は？」

「お前は即席ラーメンとレトルト以外は食い物と認識しないのか…？」

そう言って買い物袋に入った食材達を見せる。

「だって私もアルフも作れないんだもん…。」

《女の子なんだからちゃんとしたもの食べなさい。お肌にも悪いですよ。》

唐突に会話にログインしてきたリリア。一応女性なのでやっぱりこの手の話は黙ってられなかったらしい。昨晚も二人の夕食風景を見て俺と同じく何か言いたげだったが、初日から居候の身でモノ申すは流石に自重したらしい。

「お前はオカンか…？」

《あなたみたいな馬鹿とずっといたらイヤでもこうなります。》

「…ごめんなさい。」

「フィーアとリリアってやっぱり仲がいいね。」

《もう十年くらいの付き合いになりますね。》

もうそんなに経ったのか…：そーいや訓練兵のときからずっと一緒だったな…。

「…私たちもずっと一緒にいようね、アルフ。」

「当たり前さ、フェイト。」

自分たちを見て改めて絆を確かめ合う二人。微笑ましい光景にフィーアは少し笑顔を浮かべ、

「さて、帰ろうか。」

「「うん!!」」

三人は仲良く歩いて帰路についた。

みらい side

「温泉？」

知ってか知らずか、グレーの髪に緑の目をした男『八神みらい』は  
フィーアとまったく同じ言葉を居候中の家の主である『八神はやて』  
に発していた。

「そうなんよ。今日、魚屋のおっちゃんが『手に入れたはいいいけど  
孫は遊園地に行きたいらしいから…』て言ってくれんたんよ。行か  
へんか？」

「そうだな。基本的に暇だし、アリアでも誘って行くとするか…。  
ムッ!! 来たあああああ!!」

「ほ、ほんまか！？ガンバレみらいさああん！！」

今この二人は椅子と車椅子に座りながら釣り竿をたらしていた…家のリビングで光輝く魔法陣に…。

「こ、こ、これはかなりの大物だぞ！！はやて、代われ！！俺は銚を出す！！」

「ええ！？」

「大丈夫だ！！この竿、クジラも釣れるくらい魔法で強化してあるから！！」

「わ、分かった！！私に任せときい！！」

即座に釣り竿を手渡されるはやて。みらいは別の魔法陣から銚を取り出し、そして…。

「チエエエエエエエエスウウウトオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
！！」

————ズドオオオオオン！！

凄まじい突きを、釣り竿にかかった獲物がいるであろう日本の遠洋に接続された魔法陣に叩き込んだ。その余波で八神家が一瞬揺れた…。そして、

「獲ったどおおおお!!」

「釣ったどおおおお!!」

八神家のリビングにはやての身長より大きなマグロが釣り上げられた。

「ふっふっふ、この『どこでもフィッシング魔法陣』を開発するのと早三ヶ月…長い道のりだった…待たせて悪かったな、はやて…。」

「そんなことあらへんよ。ありがとうなみらいさん、私の我儘きいてもらって…。」

以前、はやてがテレビに繋げて遊ぶ釣りゲームをほしそうにしたたので『もつとすごい作るからちよつと待ってる』と言ったのだが徹底的（特に安全面）に制作していたら思いのほか時間がかかってしまった…。

「よっしゃあ！！気合いれて料理するでえ！！」

「待てえい！！半分は魚屋のおじさんに引き取ってもらうんだからな！？」

「そんなん関係あらへん！！目の前にある食材は全て私が屠る！！それが八神クオリティ！！」

「どうやってできたそんなクオリティ！？」

「『目の前の敵は全て我が屠る！！それが我、ラインベルトなり！！』を参考にしました。」

「俺のセリフじゃねえかあああああああ！！」

「あはははは。」

自分がはやてのために言った言葉が原因であったことを知り『八神みらい』、もといた次元漂流者『ミランダ・ラインベルト』は頭を抱えた。それを見てはやては笑う。そして、頭を抱えながらも『ミランダ』：いや、『みらい』はそんなはやてを見て同じように笑顔を浮かべる。そのやり取りは、年の離れた兄妹にも、年の近い親



子にも見えた。

——今の八神家に、今の八神はやてに、悲しみと涙はもう存在して  
いなかった。彼女はもう、孤独では無くなったのだから…。

## 第十一話 エンカウトフラグ（後書き）

みらい（ミランダ）が誘うと言った相手、アリアは猫姉妹の…。  
すでにみらいは原作壊し始めてます…。ですが、彼はまだ闇の書と  
はやての関係を知りません…。

## プロフィール2

名前 八神みらい（命名者・八神はやて）

本名 ミランダル・ラインベルト

年齢 26歳

職業 とある世界の元近衛銃士。現在魔法をフル活用して野菜の栽培、最近は漁業も始めた。

容姿 身長はフィーアと大差無し。グレーの髪、緑色の瞳。イケメンの分類に入るが若干老け顔…。

性格 いたって真面目な性格だったが、はやてと過ごすうちに大分丸くなった。

戦術 銃剣と魔法。みらいの銃剣はボルトアクション式なのだが…そう遠く無い日に一部の魔導士を驚愕させる。

みらいはフィーアより二年早く海鳴市に漂流してきており、それからずっと八神家に居候中。はやてとご近所公認の正式な八神家の一員になっている。

## プロフィール2（後書き）

こいつをベースに主人公作りやよかったかなあ…でもフィアの未使用設定がまだまだあるし…。みなさま、できれば意見を下さい…。

## 第十二話 その身に宿し悪魔の片鱗（前書き）

使い捨ての二号

## 第十二話 その身に宿し悪魔の片鱗

フイーア side

「それじゃあ俺はマンシヨンの管理人さんに部屋貸してもらおうよう話してくるわ。」

「フイーア行っちゃうの…?」

そんな上目使いやめてくれフェイト…なぜか身に覚えの無い罪悪感が沸くから…。今俺達はフェイト達のマンシヨンの一階、正面入り口にいる。俺がある程度金を稼いだので（方法は伏せた）居候は今日でやめるという話をしたのだが…何故かそれをフェイトが嫌がるのである。

「…あゝ、あれだ、その…いきなり今日借りれるわけじゃないから、もう一日だけ厄介になるよ。」

「明日になったらいなくなっちゃうの…?」

どないせえいうねん!?

《大丈夫ですよフェイトさん。フィーアが来ないならあなたから行つてしまえばいいのです。》

「リリア!？」

《何か問題でも?》

「:特に無いです。」

いや、あるんだけどさ。自分で言うのもなんだけど、女の子がこんな怪しい男とずっと同じ部屋にいるってのはどうなの?とか。こんなに男への警戒心薄くて将来大丈夫か?とかさ…。

《大丈夫だ、問題無い。》

「死亡フラグだ馬鹿野郎。」

《だいたい、あなたが女が警戒しなきゃいけない類の男ならとっく  
に上官と教官に殺されてるでしょう?》

「まあ、ね…。」

《と、いうわけでフェイトさん。なるべく近くの部屋を借りますのでジュエルシードの件以外でも気軽に来てください。あ、バルディッシュさんも忘れずに連れて来て下さい。また（・・・）色々おしゃべりしたいので。》

「うん、わかった！」

満面の笑顔だよこの子：不覚にも癒された…。会ってまだ一日しか経ってないってのに随分と懐かれたみたいだな俺…。

（ありがとね、ファイア。）

（アルフか。むしろ俺みたいな不審者と仲良くしてくれて礼を言いたいのはこっちだ。）

アルフが念話で話しかけてきた。

（最初は怪しい奴なんて言っただけだったよ。これからはよろしく頼むよ。）

（俺なんかでいいのか？）



（フェイトがあんな表情するのはアタシ以外だとファイアが初めてだよ。アンタなら信頼できる。）

そこまで言われると満更でもないな…むしろ、嬉しいよ。ならば、それ相応に応えなけりゃな。

（分かった。任せろ。）

（ありがとう。）

んじゃ早速、手始めに料理でも振る舞うとしますか。……おっと、こいつは…。

「なににせよ管理人さんと話するから先に行って。あとで夕飯作ってやるから冷蔵庫に食材しまっといてくれ。」

「分かった。待ってるから早く来てね。」

「はいよ。さっさと片付けてくるよ。」

そう、“片付けにね”。

??? side

ようやく見つけたぜ、黒服の漂流者…。上の連中は何のつもりか知らないがせつかくの休暇を潰されたんだ、八つ当たりで手足の2、3本へし折っても文句は言わないだろう。それにアイツらがほしいのは漂流者じゃなくて漂流者の持つ技術だ。別に生け捕りにする必要もない。ミッドチルダの人間が近くにいるが、まあ証拠が残らなきゃ何してもいいって言ってたから…。

「あのガキは殺しちゃえば問題無いよな？」

封鎖結界を展開すりゃ、あのガキも飛んでくるかもしれねえが敵にならねえだろう、さくつと殺して終わらせて休暇の続きといこうじゃないか。

「さあて、封鎖結界てんか——」

「こんばんわ。名も知らぬ誰かさん。」

「っ!？」

気づけば後ろに目的の男、フィーアがいた。ただその表情は、割と穏やかな筈なのに恐ろしいものを感じさせ、尚且つ口調も変わっていた。

「てめえ!! いつのまに!?!」

「君が愚痴をこぼし始めた時かな。」

なんてやろうだ…。それでも俺は同僚の中じゃ隠密行動はトップクラスの實力を持つてゐるのに…。まあ、落ち着いて対処すりゃ問題無いはずだ。

「で、“僕”に何の用かな?」

「テメエは俺についてきてもらう。」

さて、どうでる?

「行き先は?」

「言えねえな。ついでに拒否権は無え、イヤだってんなら力ずくだ。」

言葉とともにありったけの殺気をぶつける。並の人間なら怯えて動けなくなる規模の殺気を…。すると、フィーアは少し考えるような仕草を見せ、一言…。

—————君は素人かい？

「…ハア？」

コイツ：俺は暗部のエースだぞ！？あの“脳味噌共”の無茶な命令に応えられる数少ない人間なんだぞ！？それを素人呼ばわりだど！？ぶち殺してやる！！

「てめえ、生け捕りはやめだ！！死体にして持ち帰ってやる！！」

「まあ、少し話を聴きな。君の上司か依頼主の目的は僕か僕に関わるものだろう？」

「だからどうした!？」

御託はいい、とつとと殺らせろ…。

「そういう時は嘘でも何でも使って標的の警戒を解くのが先決だ。そうすれば標的も自主的に協力してくれる。そしてあわよくば自分の拠点に連れて行き、より優位な状況を作る。」

「しまったことか!!」

「次に、接触する前に必ず標的のことは調べておくことだ。特に性格は先程言った警戒を解くための手段に必要不可欠。言葉を選ぶための参考になる。」

「てめえの講義もどきなんか聴きたくねえんだよ!! 俺は「そして、最後に大切なのは標的の実力を見誤らぬこと。」いい加減にしやがれ!!」

「自分より格上の相手に決して正面から相対せぬこと。任務を遂行せず死ぬのは愚者の選択だ。さて、ひとつ問おう。」

———本気で“僕”を殺せると思ってるのかい？三流風情が

途端、男の体に絶対零度に匹敵する悪寒が走った。先程男が発した殺気など比べるまでもない大規模な殺気がフィーアから放たれていた。男はただ恐怖に震えるしかなかった。

「な、なんなんだお前は！？」

「知る必要は無いよ、君は僕に“片付けられる”のだから。」

———そう、この世からね。

「それじゃあ、始めようか。」

———黒による殺戮劇が今、始まろうとしていた

## 第十三話 怒狂（前書き）

この話いらなかったかも…

## 第十三話 怒狂

リリア side

私の主兼相棒のフィアに対するタブーが3つある。

1、彼の身内を傷つけるような言動。

2、自分自身の決めたルールを自分で破って尚且つそれに自覚が無い。

3、フィアの過去（悪夢）を思い出させるもの。

2に対しては度合いにもよるが、まあ彼自身たいてい嫌悪感を抱く程度で済む。3は彼に対して一番やってはいけないのだが：今はあまり語れないので割愛する。で、1についてだがこれは普通の人からしたら誰だって普通に許せないことだろう。しかし、フィアはこれに関して覚える怒りの限度が無い。特に彼の身内を『殺す』なんて言った日にはその日のうちに殺されかねない。これは3のタブーが関係しているが今回は多くを語るのはやめる。さて、そんなフィアの前で

「あのガキは殺しちゃえば問題無いよな？」



なんて言ったらどうなるのか？その答えが目の前にあった。

「う……ぐ……かはっ…。」

「どうしたんだい？もう疲れたのかい？」

先程の言葉を吐いてしまった男、今は『名無し』と呼んでいる男が見るも無残な状況で転がっていた。纏っていた戦闘服は血まみれでボロボロ、武器は跡かたも無く粉碎され、両足も砕かれ、左腕はおかしい方向に曲がっていた。右腕にいたっては“無くなっていた”…。

「この程度で戦えなくなるのかい？なんて脆い生き物なんだろうね。」

「……化け物…ぐはっ！！」

「あ、まだ遊べそうだ♪」

追撃の蹴りを喰らわす。因みに今のフィアは手ぶらである。というより最初から何も手にしてない。そう、フィアは彼を最初から最後まで“素手で”文字通り、なぶり殺しにしているのだ。もう『

名無し』に戦闘意欲は微塵も残って無かった。

「さて、もう少し遊びたいけど、あの二人をあまり待たせたくないから用件をすませようか。」

「な…なん…だ…:…?」

「“お前”の所属か依頼主を“俺”に教えろ。」

『君』が『お前』に、『僕』が『俺』に戻ったことに少し安心する。ようやく、落ち着きが戻ったようだ。場合によっては“発狂”する前に鎮静剤を打つつもりだったが…もうその必要はないようだ。

「い…言えねえ…言おうとしたら…死ぬよう…に細工され…て…いる…。」

「しょうがねえな…因みに、俺の正体の目星ついてんのか?」

「た…だの…次元…漂流者と…しか…。」

『次元漂流者』という言葉を使いましたか。ということは…。

《ミッドチルダの人間ですね。》

「管理局員か？法の番人にしては素行が悪すぎだな…。裏仕事の間違ってところか。」

《どちらにせよ、コイツはどうします？》

「そうだな……。せええええい！！」

———ズドムツ！！

「ぐあああああああああああああつ！！……………」  
（がくっ）。」

「お前はもう（魔導士として）死んでいる。（キリッ）」

指で名無しの胸部の中央あたりを指でおもいつきり突いた。そこには魔法を使う者のほぼ全員が持つといわれる秘孔があり、そこを突かれた人間はもう一度そこを同じように突かないと魔法が使えなくなるのだ。

「これで、ただの人間として警察に引き渡して万事解決。」

《解決しません。これからどうする気ですか？管理局と2日目から接触しちゃって…。》

「大丈夫だろ。さっきも言ったがこいつは十中八九裏の人間だ。そして多分ベルフィーア連邦のことは知らないだろう。」

《何故です？》

「何もかも雑すぎるんだよ。俺の戦闘能力を知らない、俺の素性も知らない、にも関わらず俺を捕まえにきた人数は雑魚が一人…。連邦の未知の技術、俺自身を最初から狙ったにしては随分と準備がお粗末だ。いくら急に正体不明の人間がこの世界に現れたからってもう少し何かしら準備するもんだろ？」

《そうですけど…。つまり、あなたはコイツらに対してのイレギュラーな存在だとしても？》

「多分そうだ。おそらく本命は俺じゃあ無い。俺がそこに急に現れたから慌てて対処しにきたんだろ。しかも裏の人間が来たってことは、その本命は奴らが表沙汰にできない何かだ…。心当たりはあるけど…。当分は様子見になるが、管理局全体が敵にまわるのはまだ先の話になるはずだ。」

《結局その裏の人間どもはどうしますか?》

「無視だ。流石にこっちから積極的に行ったら奴らに表の人間を使う大義名分を与えかねない。まあ、襲ってきたら正当防衛は続けるけどな…。」

ほんと考えてないようですね、この人は…やらかしたあとに考えてる可能性もありますが、結局いつも万事解決しますからあまり文句も言えないんですね…。

「…おい、フェイトに続いてお前まで何か失礼なこと考えてるだろう?」

《そんなことないですよ。早くコイツを片付けて帰りましょう。》

「話逸らしたな…? いいや、とにかくそうし…あれ?」

動けなかった筈の名無しがその場から消えていた。

《ワープ反応確認。魔法による転移とみられます。》

「秘孔突いたから魔法は使えないはず…。道具でも持ってたのか？」

《まあ、連れて帰る気はありませんでしたからいいのでは？》

「それもそうだな…。おっと、時間掛け過ぎたな。部屋借りる相談は明日にするか。」

フィーアは夕飯を作るため、フェイト達のもとに帰っていった。そこに先程の魔獣のような雰囲気は一切無く、いつもの明るい彼に戻っていた。

尚、リリアの管理局による更なる襲撃に関する心配は、間接的に2年前の『八神みらい』の手により杞憂に終わる。

## 第十四話 光に紛れし闇（前書き）

今回オリキャラ二人は直接は出ません…

## 第十四話 光に紛れし闇

ミッドチルダ某所

定時連絡

先日出現した二人目のイレギュラーの報告。以後、この二人目を『魔獣』と呼称。

緊急報告により、休暇中だった隊員番号67番が接触、交渉、交戦。交戦の結果デバイスの全壊、全身打撲、両足骨折、左腕の骨折、右腕の損失、リンカーコア損傷。

67番は隊員として使い物にならないため、サンプルとしてJ・S氏に送りつけるものとする。

被害は闇の書のもとに出現した一人目のイレギュラー通称『魔人』のものを加えると、28人に昇る。

これ以上の『魔獣』との接触は『魔人』による被害の二の舞になる恐れがある。故に『魔人』同様、今後『魔獣』に対してはギリギリまで監視でとどめておくことを進言する。

管理局暗躍機動部隊隊長 ノー・ネーム二佐

「こんなもんか…。」

薄暗い部屋で映像端末を再生しながら報告書を制作している男、



ネーム二佐』は呟いた。そしてチラリと再生中の映像に目をやる。そこには二人目の漂流者、『魔獣』と隊員番号67番の戦闘記録映像が流れていた。

咄嗟に隊員がデバイスを出し、攻撃をしかけようとしたらしいのだがデバイスを相手に向ける前に間合を一瞬で詰められ、腰に捻りを加えた鋭い蹴りが一撃で隊員のデバイスを粉碎した。隊員は驚愕と恐怖の表情を浮かべ、慌てて後ろに下がろうとするも『魔獣』はそれを許さず、彼の左腕を捕まえそのまま間接を決めながらへし折った。絶叫する隊員に一切の慈悲も与えず、『魔獣』は最初にデバイスを粉碎したあの蹴りを彼の右腕に放とうとしていた。そして…。

『ぐあああああああああああああ（ブツッ）――――』

「…この映像も送っとくか。」

ネーム二佐は途中で映像を再生するのをやめた。映像でとんでもない状態にされていた隊員番号67番だったが、緊急転移で帰還した彼はもつと酷い状態だった。つまり、右腕を飛ばされた後もまだこの暴虐が続くのだ。別に隊員に同情してゐるわけではない。ネームの憂鬱の原因は、

「『魔人』とほぼ互角の可能性がでてきたな。」

2年前、計画のために選んだ第97管理外世界に悪名高きロストロギア『闇の書』が存在していることが分かり、計画の邪魔にならぬよう秘密裏に持ち主ごと処分しようとしたが：散々な結果になった：。『闇の書の主』の家に次元漂流者が居候していたのだ。本局の人間がソイツを保護しにきてしまった場合、当然『闇の書』の存在も同時に知られ増援が来るだろう。表の人間に来られると計画に支障が出かねない。よって、漂流者も抹殺対象になったのだが：この漂流者が恐ろしく強かったのだ。

「まさか暗部の人間が27人、全員使い物にならなくなるとは：。」

最初に1人が抹殺に向かい、返り討ちに逢った。次に腕の立つ隊員を1名送ってまた返り討ち。1人がダメなら3人で行かせても返り討ち。その後も何度か試みたが失敗。なら暗殺だ、とトラップ専門の隊員を向かわせたら未知のマジック・トラップにかかり返り討ち。未知の魔法技術を確認し、なおのこと引けなくなりついには12人で交戦したが結局返り討ち。気づいたら他の任務に支障が出る程、隊員の数が減っていた：。

管理局の万年人手不足の影響はこの暗部とて例外では無い。ましてこの部隊は仕事柄、“表”の名のある実力者をヘッドハンティングできないので“表”のハグレ者やゴロツキで構成されている。Aランクなんて片手で数えられる程度しかない。故に一人目の漂流者、通称『魔人』に手を出すのは断念した。

「幸い、こちらから出向かなきゃ何もしてこないようだ：触らぬ神に祟りなしってか…。しかし、こっちの神にはいずれ触らねばならぬのか…。」

『魔人』の扱いが決まって一段落し計画が本格的にスタートした瞬間に奴、『魔獣』が現れたのである。しかもまた居候、さらに今度は計画の重要人物の家。悪い冗談にも程があるだろう…。即抹殺を試みたがあのザマである。『魔人』と同等ならばこちらの被害もまたしかりだ…。早々に抹殺は保留することにした。当分は『魔獣』をうまく計画の歯車に加える方針になることだろう…。

「“脳味噌共”に文句を言われたくないので、これ以上余所者に邪魔されたくないのだがね…。失われた都、『アルハザード』への道を…。」

唐突に自室の扉がノックされ、扉が開き部下が入ってきた。

「失礼します。ネーム二佐、報告書を受け取りに参りました。」

「御苦労。ついでに現地の人間に通達しろ、『魔獣は監視で留め、人形遊びの魔女を踊らせ続けろ』とな。」

「了解。」

―せいぜい我々の手のひらで踊り続けるがいい…哀れな『プレシア・テストロッサ』

「さて、次の書類は…。」

――光に紛れし闇が、邪な笑みを浮かべていた

## 第十四話 光に紛れし闇（後書き）

八神みらいのスコア。迎撃戦17、トラップ4。

リーゼ姉妹のスコア。遭遇線6。

合計27名

## 第十五話 将校の黒羽（前書き）

温泉は次回

第十五話 将校の黒羽

フィニア Side

“片付け”を終わらせ、フェイト達のもとに帰ったフィーア。相手方の目的がハッキリしない上、当分来ない可能性もあるため、余計な不安を与えるだけと判断しフェイト達には内緒にしておくことにした。万が一の時の対策はこっそり打つといたし…。そして、早速夕飯を作ろうとしたのだが問題が発生した。それは、

「調理器具がヤカンしかねえええええええ！」

ヤカンでお湯以外何を作れと言っただい。

「おいお前ら、まさか本当にカップメンの類しか食っていないのか……」

「そんなことないよ。たまにお湯で温めるカレーとか。」

「アウト！！」

「アタシはドッグフード。」

「退場!! (怒)」

こいつらは…。ていうか一体どんな教育してやがったんだ、フェイトの母親とリニスとか言う教育係は…一度しっかり『O☆H A☆N A☆S I』したほうがいいかもしれん…。

「しかたねえ、『黒羽』を使うか…。」

《お、こっちの世界に来てついに初使用ですね。》

「「?」?」

おもむろに左手を掲げたフィーアが何をするのか分からず、二人は不思議そうな顔をした。

「【出でよ黒羽】」

フィーアがそう唱えた瞬間、彼の左手に無数の黒い羽根のようなものが出現した。少しの間羽根は舞い踊るように漂っていたが、フィ



ーアが手を軽く振ると一か所に集まり形を作り始めた。そして…。

「完成〜。」

——黒い羽根は見事な新品同様のフライパンになった。

《相変わらず完璧ですね。》

「当たり前だろ？俺の個人魔法なんだから。あれ？どうした二人とも？」

「「……（ポカーン）」」

《失礼、リリア殿。》

だれの声だ？と思ったらバルディッシュか、そういえばお前喋れたんだっけ…。

《どうしました？バルディッシュさん。》

《今フィーア殿はコレを魔法とおっしゃいました？》

《そうですが、それがなにか？》

《確かに発動中はファイア殿から魔力を確認できました…しかし、今そのフライパンから微塵も魔力を感じないのでありますが…まるで“ただの”フライパンのように…。》

「!？。バルディッシュ、それ本当!？」

魔導師としてフェイトは驚愕した。確かに、鉄製に近い剣や盾を出す魔法は少なからずあるし、バルディッシュみたいな存在もある。しかしそれは、当然それらを生み出すために魔力を消費し、同時にその形を“維持”するためにも魔力を消費する。そのため、その魔法の使用者から離れすぎたり、使用者が死んだりするとそれらは消滅する。それらを存在させ続けるにはデバイスのように、もとからこの世に存在する物質を混ぜたり、ロストログアのようにそれ自体に魔力を持たせるしか無いのである。そのはずなのだが…。

「一応確認してみるか？ほれ。」

「……本当に本物の鉄製の“ただのフライパン”だ…。」

《もしかして、ミッドチルダにはこういう魔法無いんですか？バル

ディッシュさん。》

《その通りですリリア殿。フィーア殿が今行った魔法は我々からしたら『無から有を創る』に等しい行いです。正直、目の前で見ても信じられません。》

魔力だけでこの世に物質を文字通り『産み出す』なんて真似、誰にも出来ないし誰も知らない。にもかかわらず、フィーアはあっさりとやってのけた。

「確かにこの魔法で作った物は俺が離れようが死のうが独立した存在を維持するが…魔法だけでやった訳じゃ無いしそんなに大層なものじゃないぞ？ 科学知識がなきゃただの宴会芸が関の山だこんなの。」

——まあ、戦闘に使えるレベルまで発展させたけどね…。

「そんなことないよ！！フィーアってすごいよ！！」

フェイトが目キラキラさせながらそう言ってきた…なんだろう、なんかこうフェイトを喜ばせるのって、なんか…こっちも色々癒されるような…。

《いい加減料理始めませんか？》

「うおっ、忘れかけてた。まて、今後のために色々と創らせろ。」

さっきと同じように他の調理器具をいくつか創りだす。（そのたびにフェイトは目をキラキラさせてた）

「さうて、はじめるか。」

「今更だけどフィーアって料理できんのかい？」

《愚問ですよアルフさん。ベルフィーアの軍人はみな料理が自然と上達するのです。》

「……あ、やべ…訓練時代を思い出したら涙が…。」

ベルフィーアの訓練兵は入隊初日に御馳走を食わされる。しかしその翌日から三カ月間、出てくる食事は腐ってたり、ヘドロ漬けだったり、毒入りだったり悪質な嫌がらせのようなメニューが解毒薬と一緒に出される日々が続く。免疫をつけるためなのと贅沢を簡単に言わせなくするのが目的らしいのだが、素直に従う者ばかりなわけもなく、こっそり食材を仕入れて料理する輩も少なくなかった。だってやっぱりおいしいもの食いたいじゃん？と言ってもやっぱり

地獄飯を食わねばならぬ日も多いので結局三カ月後には全員、大抵の食物は平気で食べれるようになってゐるし、違反者は料理に慣れていたりするのである。

「だから二人とも、おいしい物を食べれることの大切さをちゃんと理解しろよ？」

「はい。」

そう言つてフィアはようやく料理を開始するのであつた。献立はハンバーグである。そして気合をいれて一言、

「連邦軍随一の調理兵（自称）の腕前を見せてやるぜええええ！」

——数刻後、三人分の『いただきます!!』の声と二人分の『おいしい!!』の声が響いた。

《こね具合が足りませんね、65点》

《リリア殿：味覚あるんですか…？》

《気にしたら負けです。》

《…そうですか。》

## 第十五話 将校の黒羽（後書き）

次回、魔獣と魔人と魔王と死神がエンカウント。夜天の主は…どうしよう…。

## 第十六話 狭い世間（前書き）

うっかり投稿する前に消してしまい、ようやく携帯で半分くらい書  
けました…せっかくジュエルシードのところで書いたのに…チクシ  
ヨウ（泣）



## 第十六話 狭い世間

フイアー side

カポーン

「あゝゝゝ生き帰るゝゝゝ。」

騒動続きの二日間と何も無かった数日を経て、フイアー達はフェイトが福引きで手に入れたチケットで海鳴市の温泉宿に来ていた。そして早速フイアーは温泉を堪能中である。

「ベルフイアーや同盟世界にも温泉はあったが、ここは格別だ。」

この町、さり気なくなんでもあるから観光地として連邦と交流持てないかな？と本気で考えていたら新たに二人の温泉客が入ってきた。

「どうした恭也、そわそわして？」

「いや、なんだかなのは達に淫獣の魔の手が迫ってる気がして…。」

「なんだそりゃ？」

一見するとただの親子（兄弟にも見える）なのだが…。

（明らかに雰囲気が一般人と違うじゃねえか…。）

フィーアはこの二人から戦場の匂いを感じた。魔力こそ感じないが、おそらく実力は先日撃退した男がゴミのように感じるぐらい強いだろう…まあ、実際ゴミのように弱かったが…。

（少々手合わせ願いたいものだが、互いに休息を取りにきた身のようだし、自重するか。それにしても、本当にこの町はなんでもあるし、なんでも居るんだな…）

主に魔導師とかチンピラとか使い魔とか人外なケーキ屋とか…。なんて思考にふけていたら、フィーアはこの二人の会話に『なのは』と言う名前が出たことに気付けなかった…。

「…はあ、はやての奴大丈夫かな…？アリア、頼むから絶対に他人の胸揉ませるなよ？」

何やら今度は苦労性と哀愁感を漂わせる客が入ってきた。

「ん？あんたはこの前のお客さん？」

「おや、どうもこんにちは。あなた方も来てたんですか？」

「ええ、家族とその友達たちと一緒に。」

三人は顔見知りらしく世間話を始めた。一方フィアはそろそろのぼせてきたので温泉から出ることにした。

「おっと、失礼。」

「あ、すいません。」

去り際に三人目の客と目があつた。男は緑色の目をしていたが、それ以外なにも感じなかった。

「それにしても、いい湯だった。また来たいもんだ。」

温泉から出て定番と言われる牛乳を飲みながらくつろぐフィア。

そこへ…。

（ちょっと、フィア。）

（アルフか。どうした？）

アルフから念話が届いた。なにやら困っているようだが、たいしたことでは無いだろうと思い、フィアは牛乳を飲みながら話を聞こうとした。

（この前フィアが投げ飛ばした子がいるんだけど？）

それを聞いた瞬間フィアは牛乳を勢いよく吹きだした。

## 第十六話 狭い世間（後書き）

次回、魔獣が魔王と魔人とエンカウント。あ、魔人とは会ってた…。

## 第十七話 魔獣と魔王と魔人（前書き）

魔王誕生早期化。そしてちょい長い、昨日の分は半分もいってなかったように…。

## 第十七話 魔獣と魔王と魔人

なのは side

私は今日、家族と友達みんなで温泉旅行に来ていた。だけど、アリサちゃんとすずかちゃんと一緒に居たところに突然、知らない女の人が話しかけてきた。それも普通の会話をしながら念話で。話によると、先日会った金髪の魔導師の子の使い魔だったらしい。しかも・・・。

（ちょっと、ジュエルシードの回収に関して相談したいんだけど…。）

また襲われたり脅されたりするのかと思ったら、割と穏やかな内容で正直、意外だった。ユーノ君もちょっと戸惑っている。

（この前は襲ってきたのになんで急に？）

（いや、正直言うのアタシたちも最初はアンタらのこと邪魔者として見ようとしてなかったんだけどね？アタシたちの仲間が場合によっては一緒に協力したいって言ってんのよ。）

これは、ちょっと朗報なの。ジュエルシードの回収を手伝ってもらえるならそれにこしたことは無いし。それに…その仲間って言うのは多分……。

（ま、お互い今日は遊びに來ただけだから、別にすぐに話し合わなくてもいいって言ってたよ。日にちもそっちが決めていいってさ。）

その言葉にユーノ君（淫獣形態）は少し考えるような仕草をした。そして、

（分かりました。では明日あたりにでも会って話しましょう。）

（あいよ、ファイアに伝えとくね。それじゃあ明日ね。）

女の人、あの時の子の使い魔さんは帰っていった。念話中もアリサちゃん達に不審に思われないように普通の会話もちゃんと続けていたようで、内容は聞いてなかったけど二人の表情からして、そんなに悪い内容では無かったみたい。それにしても…ふふふ……。

（いやゝ、よかったよ。これでジュエルシードの回収もきつと楽に…なのは……？）



「ふふふ…フィーアって言うんだ、あの時の人…ふふふふふふふふふふふふ…」

フィーアは分からなかったが、あの時フィーアに投げ飛ばされたなのは宙を舞い、“ユーノの結界に顔面から衝突し”、そのまま顔面から地面に落ちるの三連コンボになっていたのである。そのため、彼の予想以上にあのことを根に持っているのである。

「少し頭冷やしてもらって『O☆H A☆N A☆S H I』するの…ふふふふふふふ…」

「す、すずか…、なのはったらどうしちゃったの…?」

「さ、さあ…?」

アリサとすずか、そしてユーノはなのはから黒い何かが滲み出てる気がしたが、怖かったのでそれ以上何も言えなかった…。

フィーア side

あれから時間も経って今は夜中。フィーアとフェイトとアルフの三

人は旅館から少し離れた森に居る。すっかり堪能したので帰ろうとしていたのだが、突如ジュエルシードの反応を確認したのでトンボ帰りしてきたのである。

「あゝあ、タイミングがいいのか悪いのか…。この距離じゃあ、あの二人もすぐに来るよな？」

「そうだね。」

「あの子、去り際にすごい怖い笑い方してたけど…？」

「帰っていい？」

《いやあなたはダメでしょう。》

まずい、思った以上にあのことを怒っているようだ…。どうやって許してもらおう…。あれ？誰かの気配がする…。いや違う、これは殺気だ…！

「ちよ、なのは落ち着いて…！」

「【ディバイン・バスター】…！」

突如、誰かの会話が聴こえたのとほぼ同時に桜色の閃光がフィアに襲いかかる。

[illegible]

フィーアは慌てて魔法陣を書き上げ少し傾けた状態で展開した。ただの防御結界なら結界ごとぶち破ったであろう桜色の閃光は魔法陣に衝突した瞬間、真上に屈折させられ空に向かっていった。途中、通り抜けた雲に大穴が空いた。

「うわあ……。」

「なんて威力だい。」

フェイトとアルフはその威力に咄然とした。直接撃たれたフィーアも内心ビビっていた。三人は魔砲が撃たれたであろう場所に視線をやると人影が目に入った。そして、その人影はいい笑顔で一言。

「…手が滑ったの。」

「嘘つけっ!!」

「今度は外さないの。」

「そっちの意味かい!？」

フィーアに魔法を撃った白い魔王…もとい白い魔導師、高町なのはがそこにいた。ユーノは肩にのっている。

「落ち着いてなのは!! 僕たちは話し合いをするんであって、戦いに来たんじゃないからね!？」

「分かってるよユーノ君、『O☆H A☆N A☆S H I☆A I』でしょ?」

「多分違う!!」

終始笑顔だが相当ご立腹のようである。アルフは野生の本能故かすでにビビりきっている。正直フィーアも今すぐ逃げたい。生憎、敵と認識していない相手と戦う神経は持ち合わせていない。自慢の悪知恵は使ったあとが怖いのでやめておきたい…。

「ちょっとフィーア、アンタがどうにかしてよ?」

「私もあの時はフィーアが悪いと思うよ。だから、頑張ってね？」

「魔王の生贄になるのを頑張れと？ていうか、お前だって最初アイツのこと襲おうとしてたろ！？」

チクセウ、味方がいねえ…。なんであんなことしたのか今更ながら悔やんでも悔やみきれねえが、マジでどうしよう…。

《お話し中失礼、なのはさん、でしたっけ？》

「え？あなたは？」

《フィーアの部下兼相棒であるリリアと申します。この度はうちの相棒がご迷惑お掛けしました。》

「ふえ！？いや、ご丁寧にどうも…。」

おお！！救いの神が降誕なされた！！頼むぞ我が相棒。この場を丸く収めてくれい！！

《場合によっては今後、私達はあなた方と行動を共にするかもしれませんが。そのため、今あなた達と悔恨を残したくありません。》

「は、はあ……。」

《なので、お詫びの印に一発コイツ（フィアー）をブツ飛ばしちゃうってください。》

「待て待て待て待て待て待て待て待て待て待て！  
」

「え？  
いいの？」

「よくないよくない！！おい、リリア！！」

《元々はあなたが原因でしょう。さっさとやられて水に流してもらってください。》

ぐ…正論でしかも自業自得だから言い返せねえ…。なんて思った  
ら、なのはもうこっちにデバイス、『レイジング・ハート』を向  
けていた。

「それじゃあ遠慮なく、一発やらせろなの。」

「何故か卑猥に聴こえた!?!」

「問答無用なの、『ディバイン・バスター』!!」

有無を言わず、桜色の魔砲がフィーアを飲み込んだ。

くしばらくお待ちくださいく

「あゝ、未恐ろしい威力だった…。」

「…チツ。」

舌打ちしやがったよコイツ…。だがどうにか先日のは水に流してもらえた。今は互いの軽い自己紹介をすることにした。

「私、なのは。高町なのはっています。あと、私のデバイスのレインングハート。」

《初めまして。》

「僕はユーノ・スクライアです。」

『高町なのは』と『レイジング・ハート』、それに『ユーノ・スクライア』っと。なのはは地元の間人っぽいがユーノはどうみても違うな…まあ、いいか。

「私はフェイト。フェイト・テストロッサ。そしてこっちが私の使い魔のアルフと、デバイスのバルディッシュ。」

「さっきも会ったけどね。よろしく。」

《以後お見知り置きを。》

「んで、俺はフィア・レイガードだ。あの時はホントにスマンかった…。そしてさっきも名乗ったが部下兼相棒のリリアだ。」

《どうも。》

簡単な自己紹介を終え、身元や素性の詳細うんぬんは今度にして、今はとりあえず先にジュエルシードの封印をしておこうということこ



とになった。

「ところでユーノ。」

「なんですかフィーアさん？」

「お前って封鎖結界張れるよな？」

「?…ええ、張れますけど。」

「そうか、分かった。」

アルフと二人がかりで張ってもらえばそれなりに頑丈な結界ができる筈。そうなれば、もう少しだけ…

———本気が出せる。

《ッ!?! フィーア!?!》

「どうした？」

リリアが珍しくうろたえた声を出す。しかし次の言葉は全員を驚愕させた。

《ジュエルシードの反応が消えました!!》

「「「なっ!?!」」」

「っ!!! 先に行ってるぞ!!!」

言うや否やファイアは一人走りだす。

「ちょっと待ってよ、ファイア!! っって速っ!!!」

走り出したファイアのスピードは、魔法で身体能力を上げたフェイトを凌駕していた。あっという間にフェイト達は置いてかれてしまった。

そして、ついにファイアは先程までジュエルシードの反応があった場所に辿り着く。しかし、そこには二人の先客がいた。片方は地に倒れ伏せ、もう片方は茶色いスーツを着ており、魔力反応が無くなったジュエルシードを片手に倒れている男を見おろしていた。そし

て、男はゆっくりと視線をこちらに向け、口を開く。

「…ほう、新手か。」

——その男の髪の色はグレーだった。

「昔から懲りない奴らだな、貴様らは…。」

——その男の瞳は緑色だった。

「だが、いいだろう!! 何度でも来ると言うなら、何度も叩き潰してみせよう!!」

——その男の殺気は自分に匹敵していた。

「かかって来るがいい!! 目の前の敵は全て我が屠る、ただそれだけだ!!」

——闇に恐れられし、怪物二人の戦いが今、始まろうとしていた。



**第十七話 魔獣と魔王と魔人（後書き）**

次回激戦

## 第十八話 本能のままに（前書き）

キリが悪いので前置きと本格的戦闘に分割。

## 第十八話 本能のままに

ユーノside

ファイアに置いて行かれたユーノ達は、ただひたすらジュエルシールドがあつた筈の場所へ向かつていた。

「ファイアがこんなに足が速いとは思わなかった…。」

「よく考えたら、いつどこにいてもジュエルシールドのある場所にすぐ来たよね…。」

ファイアのスピードに半ば全員驚く中、ユーノはジュエルシールドの反応が消えたことについて考えていた。

（ジュエルシールドは一度暴走すれば誰かが止めない限り暴走は終わらない筈…。なのに、反応が無くなったということは…まさか、まだ彼女達以外に誰かが集めているのか！？）

そう推測をたてた瞬間…。

——ドゴオオン——！

轟音と共に、黒い何かが周囲の木々をなぎ倒しながら飛んできた。

「な、何なの！？」

なのはが驚きの声を上げる。そして、フェイトとアルフも驚愕の表情を浮かべていた。しかし、なのはが飛んできたモノが何なのか判らなくて驚愕したのに対し、フェイトとアルフは飛んできたモノが何なのか判ってしまい驚いていた…。何故なら、ソレは黒いフード付きジャンパーを着ており、右手に刀とサーベルが混ざったような剣、左手に銃身がやや長いピストルを持っていた…。

「フィーア！？」

赤みを帯びた茶髪の青年、フィーアがフェイト達の足元に倒れていた。

みらい side



さっきまでジュエルシールドがあつた場所はすっかり様変わりしていた。周囲の木々は真つ二つに斬られたものや、根元から折れたもので溢れ、地面にはいくつかのクレーターができていた。そんな中、ひとつの人影が残っていた。

「クソッ…やってくれる…。」

先程フィアをブツ飛ばしたみらいは片膝をつき、自分の愛銃『オルギニス』で体を支えながら忌々しそうに呟いた。銃剣と刃による打撃斬撃の応酬のさなか、フィアの蹴りがみらいの側頭部を捉えたのである。しかし、蹴られると同時にみらいも全力でフィアを殴り飛ばした。向こうの彼方まで吹き飛ばしてやったのだが、やはりフィアの蹴りは強烈でかなり効いたようである。まだ頭が揺れる…。

「ここしばらく“奴ら”みたいな三下しか相手をしてなかったせい  
か、少々鈍ったか…。」

チラリと倒れている男に目をやる。みらいは、はやて達と共に旅館でとくに就寝していたのだが、先日から何度も確認している例の魔力反応を旅館の付近で感じてしまったのである。流石にこの距離は近すぎると思い、はやてのことは最近すっかり仲良くなった『リーゼアリア』に任せて、大惨事に至る前にこっそり処理することにしたのである。

目的地に着くと例の反応物が魔力を放出しており、危険な雰囲気

出していた。即座に自分の魔法で強制的に制御したのだが、そこへ見覚えのある格好をした人物が現れた。2年前から八神家に散々ちよっかいを出してきたどこぞの組織の人間と同じ格好だった。

「そいつを渡してもr（バキィッ!!）————。」

「だが断る。」

見慣れた敵だったので迷わず速攻で顎に拳を叩き込み、沈黙させた。その矢先にジュエルシードの反応が消えたために警戒心丸出しのフイーアが現れたのである。それを敵意と感じたみらいは、フイーアを奴らの仲間とほぼ断定してしまい戦闘を開始、今に至る。

（それにしても、今の奴は随分な手錬だった…。もう少し、続けたかったものだが…。）

ようやく頭痛も治まり、みらいはその場を去ろうとするが途中で足を止める。その表情は歓喜を示すように、うっすら笑みが浮かんでいた。そして、振り向く。

「殺す気でやったんだがな…。」

「こっちも首を飛ばしてやったつもりだったんだけどな。」

奴は…、久々の“強敵”はピンピンしていた。まだ、この時間を楽しむことができる。こちらは最低限の用事は済ませてある。気にするべきは、朝日のみ。だが、生憎まだ夜は続く。はやてが目を覚ますまで時間はまだある。なにより、目の前の存在は奴らの仲間（誤解）。今帰る理由は無い！！

「続きといこうか…。」

「望むところだ…。」

「ちょっと待って下さい！！」

二人のやり取りに割って入る声、ユーノの声が響いた。フェイト達のもとにブッ飛ばされたフィアはあの後すぐに起き上がり、そのままみんなと一緒にこっちに來たのである。ユーノは言葉を続ける。

「あなたがそのジュエルシードを封印したのですか？」

「何だ？喋るイタチ？…ふむ、これはジュエルシードと言うのか。確かにコレは俺が暴走を止めた。」

「ソレはとても危険な物なんです!! なんの目的があって集めてるんですか!？」

みらいに問い詰めるユーノ。しかし、彼らにとって意外な返事が返ってきた。

「む？俺はこんなものいらぬ。」

「」「え?」「」

「俺はただコレが危険なのは分かったから始末しにきただけだ。逆に問うがお前ら、“アレ”はお前らの仲間か？」

そう言ってみらいが指差す方を見る。そこにはユーノ達には見覚えのない、フィーアには心当たりのある格好をした男が倒れていた。

「…いえ、知りません。僕の仲間は今のはただです。この人たちは僕達に今後協力してくれるかもしれない方々です。」

お互いの素性と事情は明日説明しあう予定でしたが…そう言ってユーノは締めくくった。それに対しみらいは少し考えるようにしてから口を開く。

「なるほど、嘘ではないようだ…。俺もこんな物騒なモノはいらぬ。悪用するわけでもなさそうだし、欲しいのならくれてやる。」

「ありがとうございます。」

「ただ、ひとつ頼みたいことがある。」

「え？」

ジュエルシードをユーノに投げ渡し、おもむろに言い出す。ファイアの方を見ながら…。

「不完全燃焼で帰りたいくないのでな…、少し“さっきの続き”がしたい。」

うつすら笑みを浮かべてそう言った。ユーノは目が点になり、なのはは思わず叫ぶ。

「な、なんでですか！？話し合いも済んで、もうお互い用は無いでしょ！？」

「いや、本来ならここで帰ったのだが…、なにぶん久々に“本当の意味で”戦えそうなのでな。」

ここ最近はおはや一方的な“奴ら”の駆除作業しかしておらず、戦いと呼べるようなものじゃ無かった…。

——だが、今、目の前に居るのは…。

「いいだろう、俺もまだ物足りなかったところだ…。アルフ、ユノ、結界を頼む。」

——本物の敵、本物の強者、本物の戦いが目の前にある。

「本当に今更だが、“お前も”あそこでのびてる奴の仲間では無いんだな？」

「…正体に心当たりはあるが、俺の仲間は今はこの子達だけだよ。」

そう言ってフィーアはフェイトとアルフ達の方に視線をやる。

「そうか、さっきは勘違いしてすまなかった。」

「気にしなくて結構。では、色々と仕切り直しといこうか？ 結界張ってもらったから“お互い少し本気出せる”ぜ？」

「ありがたい。」

——感じるのは歓喜、高揚、闘志。ならば、することはただ一つ……。

「「さあ、楽しもう（殺し合おう）かつ！！」」

——今はただ獣の如く、本能のままに！！

## 第十九話 たった2人だけの戦場（前書き）

やっところさ激戦スタート。みらいがなんであのシステムを持ってるのかはまた今度で…。



## 第十九話 たった2人だけの戦場

なのはside

夜の森を二つの影が舞い踊っていた。片方は魔剣と拳銃を、もう片方は銃身に刃を装着した小銃を嵐のようにぶつけ合い、斬り合い、撃ち合った。そのたびに、二人に『邪魔』と言われて大分遠くに離れ、尚且つ上空から眺めているフェイトやなのは達のもとにまで衝撃の余波が届いた。

（本当にアレはさっきの人なの…？）

さっきまで自分の怒りにすっかり怯えていた人間とはまるで思えなかった。あの人、フィーアは確実に自分より強い。

「えっと…フェイトちゃん、フィーアさんって何者なの？」

「…別世界の軍人だって言ってた。」

「え？」

「彼は次元漂流者なのか？」

ユーノの問いかけにフェイトは首をコクリと頷かせる。不意になのはは忘れかけていた疑問を思い出す。

「そういえば、フェイトちゃん達はなんでジュエルシードを集めているの？」

「そ、それは……。」

フエイトは焦る。元々隠し事も嘘も基本的に苦手である。しかも、さっきの軽い自己紹介の時に分かったのだがこのフエレット、ユーノは実質ジュエルシードの持ち主。本人の目の前で自分が母親の命令で集めており、しかも母親の目的を知らないことを言っているのか、悩んでしまふのである。

だが、そんなフェイトを救うかのように、

——ズッドオオオオオオオオオオオオン！！

明らかにさつきまで規模が違う爆音が響いた。それにつられさつきの会話を中断し、全員が視線をそちらに移した。フェイトは話がそらせてホツとしたが、同時にフィーアが心配になった。

（フィア、大丈夫だよね…？）

フィア side

「随分と物騒じゃねえか：ジュエルシールドよりあんたの方がよっぽど危ねーよ。」

「人のことを言えるのか？お互い様だろう。」

互いに流暢な会話をしているが、その最中も二人は斬り合っている。鉄と鉄がぶつかる音が絶えることなく響く。

——ギギギギギギギギギギギギギギギギギン！！

あまりに速すぎて音が一つになりかけていた。みらいは咄嗟に間合をとり、銃剣『オルギニス』の銃口をフィアに向ける。それに反応してフィアも左手のリニアガンを見事に向ける。二つの銃口が同時に火を噴く。

——ドゴオオン!!

放たれた二つの銃弾は互いにぶつかり合い、爆音と共に消滅した。衝撃の余波で二人の間に砂煙が立ち上る。みらいはその場を動かずにオルギニスを構える。それと同時にフィーアが煙を突きぬけ、“二刀”で斬りかかる。

——ガキイン!!

みらいはそれをなんなく受け止める。だが、フィーアが左手に持ってるものを見て眉を顰めた。

「…随分と便利で厄介な物をもっているな。」

「いいだろコレ？欲しけりゃ創ってやろうか？」

フィーアの左手の武器、リニアガンの銃身が長さ30?程のプラズマの刃を纏っていた。

「オラァ!!」

「ッ！！フンッ！！」

二刀になったことにより激しさを増したフィーアの斬撃がみらいを襲う。しかし、みらいも一步も引かず、銃剣格闘でそれを防ぎ、かわし、いなす。その最中、みらいの頭上にリニアの刃が振り下ろされる。みらいはそれを防ぐが、

「もらった！！」

「ッ！？」

フィーアが魔剣を魔銃に変形させ、至近距離からみらいに魔弾を放つ。しかし、それをみらいは体を強引に捻ってかわす。

「なっ！？この距離でよけた！？」

「いつまで呆けている！！お返しだ！！」

———ボコオオン！！

「うおっ！？」

体制を立て直したみらいが銃剣を力の限り振り下ろした。フィーアは慌ててそれを避ける。“魔法を使ってない”にもかかわらず、その威力は地面にまた一つクレーターを増やした。距離が開き、互いにらみ合いながら息を整える。同時に、相手の力量を計る。

（魔力を使わないあの身体能力、俺の気孔術と同じたぐいか…。ジュエルシードを封印できるってことは魔法もかなり使えるんだろうな…厄介すぎる。）

（上級の魔剣とそれに匹敵する脅威を持つ電磁銃、加えてそれを両方同時に使いこなすだけの技量…これを脅威的と言わずに何と言う…。）

二人は互いに相手がかなりの実力者ということを改めて認識しはじめていた。そして、相手がまだまだ全力を出していないことを…。

「…準備運動にしては長くないか？」

「それもそうだな…。では、こちらからやらせてもらう！！」

そう言いみらいは、ボルトアクションでオルギニスから葉莢を弾き出す。それを見た瞬間、フィーアの顔は驚愕一色になった。その弾き出された葉莢と、それと同時にみらいの魔力が爆発的に増えたと

いう現象に見覚えがあった、リリアにいたっては半ば熟知すらしているとも言える。何故なら…。

《ベルカ式のカートリッジ・システム!?!?》

「あんたまさか『アルテミア王国』の人間か!?!」

「ッ何故その名を!?!? 貴様ら何者だ!?!」

…まさか、目の前の人間が自分の同類、しかもお隣さんと呼んでも差し支えないような奴とは夢にも思わなかった。喜ぶべきなのか、呆れるべきなのか…。

「…これ見りゃ分かるんじゃないやねえ? おい、リリア。」

《了解。》

そう言った途端フィアの服装がこの世界に来た時の軍服に変わった。それを見たみらいは一瞬固まる。

「そうか…、貴様『ベルフィア連邦』の民だったのか。よもやこのような場所で『同盟世界』の人間と会えるとは思ひもなかった

ぞ…。ちなみに俺はこういう身分だ。」

パチンと指を鳴らすと、今度はみらいの服装が変わった。色はそのままだが、ただのスーツから貴公子が着るようなシックなナイトスーツへとその形を変えた。どこから出したのか立派な羽根つき帽子もかぶっていた…。そして、その格好にもフィーアは見覚えがあった。

「なんてこった…。『アルテミアの城壁』と名高い『王家直属近衛銃士隊』と戦っていたのか俺は…。」

「よく言う：階級が戦闘能力を表すと言われる連邦で“その若さでその地位”とは末恐ろしいことこの上無いわ…。で、この空気（雰囲気）でまだ続けるか？」

「うーん、今のカミングアウトで微妙な気分なのは確かだが…あんたもそのミナギツタ魔力は放出したいだろ？それにまだ俺の、連邦の力を見せたいんだが？」

「そこまで言われたらやるしかあるまい…。感謝する。」

「なに、俺もただの戦場好きの馬鹿にすぎないだけさ。てなわけでもう少しよろしく。」



《了解。》

そう言ってリニアガンを魔剣ヴィルガロムで“斬って霧散させた”。当然、みらいは自分で自分の武器を斬ったフィアの行動に驚く。

「なんのつもりだ？」

「俺のヴィルガロムは魔剣と魔銃の二種類に変形できる。だが、少しレパートリーに乏しい気がしてね、変形する種類を増やすことにした。このリニアガンに搭載した科学プログラムで。」

言うや否やフィアの右手には魔剣でも魔銃でもなく、機械的なアサルトライフルが握られていた。

「…文字通り、科学と魔法の融合というわけか。なるほど、連邦の『魔道科学』は伊達では無いな。」

魔力をダダ漏れさせながらみらいはオルギニスを構える。フィアはライフルになったヴィルガロムを構えながら周囲に『黒羽』を展開させる。

「では、もう少しばかり。」

「お付き合い願う!!」

言葉と共にみらいはカートリッジシステムにより魔力を高めた魔砲を解き放つ。

「【天河瀑布】!!」

——ゴォウ!!

轟音と共になのは【ディバイン・バスター】を凌ぐ魔力の奔流がフィーアに迫る。しかし、それを持ち前のスピードでフィーアは避ける。同時にアサルトライフルが魔弾を雨あられのごとく放つ。みらいは自分の魔力を地面の土や石を混ぜながら個体化させそれを防ぎ、忌々しそうに口を開く。

「やはり、魔力と実体の両方の性質を持っているのか! 厄介な!!」

「初見でそんな防ぎ方したあんたに言われたくない!!」

もし、なのはやフェイト達のようにただの魔力障壁で防いだ場合、魔力の部分は消されるだろうが実体の部分、ただの鉛弾の部分は貫

通したはずだった。故に、ファイアの弾丸を防ぐには同じように魔力と実体を混ぜた防御か恐ろしく固い実体の防御が有効なのである。

「【サーベル】！！」

ファイアはライフルを細身の剣に変え、みらいに斬りかかる。それを受け止めようとするが、悪寒が走り咄嗟に後ろに下がる。

——ドカアアン！！

さっきまでみらいが立っていた場所が突然爆発した。よく見るとファイアの後ろに三脚の付いた筒状の物が上を向いていた。

「迫撃砲…？」

「御名答。そして…終わりだ！！」

——ポンポンポンポンポンッ

戦場に似つかわしくない間の抜けた音が響く。しかし、何の音か分かったみらいは顔を青ざめさせる。そう、ファイアがいつの間にか『黒羽』で造って設置した迫撃砲が一斉に発射された音なのである。

しかし、みらいは迷わずフィアに向かって走り出す。

「ゲッ!？」

「馬鹿正直に全部防ぐと思ったか、馬鹿め!!」

てっきりさっきの防御で全て防ぐものだとばかり思っていたためフィアは焦る。だが、迷いは一瞬で切り捨て、迎え撃つ。剣と銃剣が再度ぶつかり合い、二人の動きが止まる。

——それとほぼ同時にフィアの砲弾が、少し離れたとは言えほぼ近距離と大差ない場所にに着弾し、爆炎が二人を飲み込んだ。

## 第二十話 休戦（前書き）

今回、超都合合わせなお話…グダグダかもしれません…。

## 第二十話 休戦

フエイトside

さっきまでと明らかに桁違いな爆発が起こり、ついにアルフとユーノの結界にも限界がやってきた。このままではマズイと思い、今フエイト達は二人の戦闘を止めに向かっていた。しかし、

「ねえ…、私達であの二人止めれるかな…?」

「…無理じゃないかい?」

遠くから眺めていても分かるぐらい異常に強い二人を自分達なんかで止めれるのかと問われると、全く自信が無かった…。

「フエイトちゃんが言えば、フィーアさんも止まってくれるんじゃないかな?」

「私もアルフも、フィーアがあんな風に戦つてるところなんて初めて見たよ…。だから、自信ないよ…。」

よく考えれば、まだフィアと出会って一週間も経ってないのだ。分かってることといえば、異世界の軍人で、陽気で、めっちゃで、強くて、なんだかんだいってお人好しということ位である。もっとも、出会ってたった数日の人間と仲良くなれて、尚且つそこまですべて知ってれば充分な気もするが……。そんな中、バルディッシュが口を（無いけど）ひらいた。

《マスター、リリア殿から通信です。私を経由して喋っていただきます。》

「え？」

《どうもフェイトさん、お待たせしました。やっと終わりましたよ。

》

「よかった…、結界壊れそうになってたんだよ？」

《ええ、承知しています。それを伝えたら二人とも渋々ながら戦闘をやめてくれました。》

そういえばリリアが魔法を高レベルで理解できるのを忘れていた…結界の耐久度もそれなりに分かっていたのだろう。それにしても…

「相手のあの人はともかく、フィーアがあんなに戦いが好きなんて知らなかったよ…。」

《すいません。ですが、大目に見てやってください…彼は…これでは生を感じることができない体なんですから…。》

「リリア…？」

今のリリアの言葉に、フェイトもアルフも少し違和感を感じた。まるで、フィーアが“ただの戦闘馬鹿では無い”と言ってるように聴こえたのである。なにか深い事情がありそうな気がしたので、二人はくわしく訊こうとするのだが、

「オイ、余計なことは喋んなよ？ここは俺達の世界じゃねえんだ。」

《失礼。》

「ほう、疑似人格では無く本物の自我が存在するのか…ますます連邦は侮れないな。」

フィーアとみらいが現れた。今の二人の格好は戦闘を始める前の普段着に戻っている。二人の表情は疲労に染まっていたが、同時に充実したような顔をしていた。



「いや、付き合わせてすまなかったな君達。それじゃあジュエルシード集め、引き続き頑張りたいまえよ。」

「待って下さい！！あなたも手伝ってくれませんか？」

そのまま帰ろうとしたみらいをユーノが引き留める。

「うゝむ、今更だが俺はてっきりこの騒動を静めれる人間が自分しかないと思っていたから来たのであって、ムザムザ事件に巻き込まれるような真似はしたくないのだが？（はやてを巻き込む可能性もあるし…。）」

「そこをどうか！！もし手遅れになったらこの世界中の人が巻き込まれてしまうかもしれないんです！！！」

「私からもお願いします！！手伝ってください、お願いします！！！」

ユーノとなのはに頭を下げられ、みらいは困ったように頬をかく。みらいとて近衛銃士という名の騎士なのだ、子供にここまで頼まれて断ったら騎士の名折れ。そもそも、大の大人がこんな危険なことを子供達に任せっきりにすること自体間違っている。そう結論付け、みらいは前言を撤回する。

「分かった、協力しよう。」

「「ッ!!」ありがとうございます!!」

二人は嬉しそうにお礼をみらいに言う。そして、みらいは視線をフ  
ェイト達に移す。

「ところで、君たちはこの二人と事情が違うのかい？」

「えっと…。」

「俺たちは魔法的にジュエルシードに興味が沸いたから集めていた  
だけだ。」

（フィーア!?)

みらいの問いに言葉を詰まらせかけたフェイトを余所に、フィーア  
がサラリと嘘をついて助け船を出す。無論、アドリブである。

（いいから合わせろ。アルフも。）

（う、うん。）

（分かったよ…。）

「ほう、では持ち主の彼から盗ろうとしたのか？」

みらいは若干睨みをきかせながら訊いてきた。その視線を軽く受け流しながらフィーアは答える。

「まあ、結果的にそうなるな。でも、まさかジュエルシードがここまで危険で、しかも持ち主がいたのは知らなかったさ。もっとも、本音言うとソレはまだ欲しいけどな…。」

言ってユーノの持ってるジュエルシードを指差す。思わず身構えるユーノとなるのは。しかし、フィーアは言葉を続ける。

「だが、流石にこの世界が滅んでしまうようなことはいただけない。だから、所有権だの分け前だのは一旦忘れて、彼らと協力してさっさと全部封印することにしたんだよ。」

咄嗟に喋ったデマカセ、しかし嘘四割真実六割なので妙に信憑性が

あった。なにより、フィアの目的はこの場を凌ぐことにある。今この場を切り抜ければあとはどうとにでもなる。そして、フィアの口八丁は功を征した。

「：分かった、今は信じよう。さっき、そのイタチモドキ「ユーノです：。」：ユーノが明日改めて話し合う予定だったと言ってたな？」

「（おっしゃ！！）ああ、その予定だ。そこでお互いの素性と事情を話し合うつもりでな。」

「では、俺も参加させてもらう。そこで色々情報交換といこうじゃないか“ベルフィアの兵士”よ。」

「あいよ、“アルテミアの騎士さん”。」

お互いにこの世界へ来た経由を話せよ？という意味合いを込める。その会話に事情を知らないのはとユーノは頭にハテナを浮かべ、フィアの素性を少し知っているフェイトとアルフは、みらいがベルフィアの名前を出したことに驚いた。

「（あとで二人に事情教えとくか：。）それじゃあ、また明日：そういう名前なんだっけ？」

「今は、『八神みらい』と名乗っている。本名の方が聞きたいか？」

「いや、その名前が気に入ってるなら別にいい。八神と呼ばせてもらおう。」

「すまん。因みに、一般人の家族がこの町にいるんだが…無闇に巻き込んだら俺がこの世界を滅ぼすぞ…？」

さっきの戦闘時以上の殺気を溢れさせ、みらいはそう忠告した。フエイトとなのは、ユーノは震え上がり、勘の鋭いアルフは気絶しそうになった。フィーアもこれは本気だと感じ、肝に銘じ真剣に答える。

「俺の家名に賭けて約束する。あんたの家族は決して巻き込まず、決して傷つけない。」

「…感謝する。そうだ、俺もお前の名前を知らなかった…名前はなんて言う？」

「『フィーア』だ。『フィーア・レイガード』。」

それを聞いた瞬間みらいの顔が凍りつく。

「っ！？…それはまた、とんでもない家名を賭けてくれたな…。」

「故に約束は必ず守る。」

「ああ、信じるとも…。では、そろそろ帰らしてもらおう。また、明日な。」

そう言ってついにみらいは旅館に帰っていった…なのはと一緒に…。

「なんでついてくる…？」

「え？私もあの旅館に家族で来てたんですけど…。」

「あ、そうなの…。」

そして、残ったフィア達も家に向かって帰り始めた。それを横目で見やりながら、みらいは一人心中で呟く。

（確かに約束は守ってくれるだろうが…やはり、なにか隠していたろうな。まあ、どうせまた明日会うんだ、その時に洗いざらい教え

てもらうぞ？ 『黒鋼くろがねの不死鳥』 よ…。」

——故郷にさえ轟くその異名を携えし男のことを考え、魔人は笑う。

## 第二十一話 今後の方針（前書き）

次回、ギャグ無しで原作介入予定。原作キャラが今回ほとんど出ないのはその布石なんで許して…



## 第二十一話 今後の方針

??? side

ベルフイーア連邦政府軍統合監察部隊本部にて

同盟世界抜きでも全体の規模が洒落にならないベルフイーア連邦軍、その大軍勢を監視、統括するのがこの統合監察部隊の役目である。その部隊の本部の一室で、二人の男が会話をしていた。二人とも将校の軍服を着ており、片方は部屋の主ゆえ執務椅子にすわり、もう一人はその部屋の主に執務机を挟み、立ったまま事の報告を行っていた。

「以上が、先日の決定事項であります。“レイガード大将”。」

「ふむ、仕方あるまい…報告御苦労、“ヴェルシア大佐”。」

部屋の主、『トーラス・レイガード』大將は自分の息子の元副官、『リオル・ヴェルシア』大佐の報告を聞いてそう答えた。トーラス大將のその態度に眉を顰めるリオル大佐。報告の内容のわりに随分と軽い反応なのである。何故なら…。

「息子の搜索が“中止”になったわりにはアツサリしすぎではありませんか？」

そう、先日任務中に行方不明になったトールス大将の息子、フィアの搜索が中止になったのである。主な理由は、行方不明になった場所そのものが消えたため、搜索のしようが無いというものだった。そのためリオルはフィアの抜けた穴を埋めるために大佐に昇進したのである。本来はフィアの階級をそのまま受け継ぐ予定だったがリオルは辞退した。いつか、フィアが戻ってくると信じて…。

「…報告は以上かね？大佐。」

「…ハイ、以上です。」

言った途端、トールスは指をパチンと鳴らす。すると、トールスの執務室の窓はシャッターが閉まり、ドアに鍵が掛かかり、もはやこの部屋に誰も入れなくなり、誰も盗み聞きできなくなった…。

「…説明してくれるんですか？“トールスさん”。」

「ああ、お前なら構わないよ、“リオル”」

互いに口調と呼び方を多少なり碎けたものにし、呼び合った。リオ

ルはフィーアの副官であるが、それ以前に親友なのである。そのため、プライベートでもトーラスと交流が多少なりあるのだ。今の二人は上官と部下でなく、一人の男の友と父である。トーラスは机に常に置いてあるコーヒーを淹れ始めながら話し始めた。

「実はな、フィーアが行方不明になった時に…部下の一人が余計な気を使わして『ベルノア』にそのことを報告したんだ…。」

「御夫人にですか!？」

リオルは驚愕した。『ベルノア・レイガード』はトーラス大将の妻であるが、一般人である…血筋以外は…。

「それでな…、“御隠居”を脅す…お願いして、フィーアを探してもらった。」

「……自分の父親を脅したんですか、あなたの奥さんは…。」

「出会いがしらに言われたよ、『俺はどこで娘の育て方を間違えた?』って…。」

もう、リオルは苦笑いするしかなかった。トーラスは会話を続けながら淹れたコーヒーに“白いの”を混ぜながら話を続ける。

「それで今朝連絡をくれてな、一応見つけたそうだ。時空の彼方だから簡単に迎えに行ける場所じゃないが、ピンピンしてるらしい。いつか連れて帰ってきてくれるとよ。」

「時空の彼方の人間を探せて迎えに行けるって、相変わらずのチートっぷりですね…。いや、そんな人を脅せるベルノアさんの方が凄いのか…。」

内容は多少なり衝撃的だったが、なにはともあれ親友の無事が分かりホッとする。自分を含め、事件の当事者はあまりにショックが大きすぎ、しばらく任務に支障が出るほどだった。これ以上の混乱を招かないためにも、一部の者たちを除き連邦軍全体ではフィーアは単独で極秘任務に出たことになっている。

「伊達に『不死鳥』と呼ばれていないということですね。流石は…。」

———  
“あの世から戻された男”

「そもそも私の息子で、あの人の孫だぞ？これぐらい当然だ、心配など必要ない。」

そう言ってトーラスは出来上がったコーヒーを口に運ぶ。それを見てリオルは苦笑を浮かべる。

「…そんなこと言ってますけど、実際はさっきまで動揺してましたね？」

「…何のことだ？」

そのまま“白いの”を混ぜたコーヒーを一口飲むトーラス。

「トーラスさん…それ、ミルクじゃなくて“修正液”混ぜてましたよ…。」

「ブフォッ!？」

——口からコーヒーを噴き出したその姿は、親子でそっくりだったそう…。

フイアー side

一方、こちらは海鳴市で知る人ぞ知る名店『翠屋』。今日はそこにジュエルシードの関係者で集まる予定だったのだが…。

「…お互い、相手が子供なのを忘れてたな。」

「…全くだ。」

今、待ち合わせの場所にはフイアーとみらいしか居なかった…。昨日の夜、それも深夜までずっと起きてたのに、尚且つ今日旅先から帰ってきたばかりのお子様組はもう疲れきっており、ユーノの『すいません…やっぱり…今日は無…理…（ガクツ）』という念話を最後に音信不通になった。フェイト達も眠そうだったので、二人はマシオンで休ませてフイアーだけ来たのだった。

「しかたない、先に同盟世界の人間同士の話をしよう。」

「そうするか。じゃあ、俺から話s「あ、桃子さん、オススメケーキ詰め合わせを一つ用意しといてください。」…聴く気はあるのか？」

「当然だ。」

「あら、みらいさん。はやてちゃんへのお土産？」

「ええ、はやてもこのケーキが大変気に入ったようで…。」

「…（………#）。」

因みに、今回リリアは喋らない。流石の彼女も同盟世界の人間と主人の会話に口を挟むような真似はしない。そしてフィーアは（微妙な表情で）語る。自分は任務中にこの世界へ飛ばされたこと、そこで最初に会った人間がフェイトとアルフだったこと、そして行動を共にしているうちに今に至ると。先日話さなかった事は伏せて…しかし…。

「…それで？」

「え？」

「とぼけるんじゃない。ただ興味が沸いてジュエルシードを集めるなんて大嘘、誰が信じるか。”あの程度のもの”、連邦に腐るほどあるだろうが。」

「…やっぱり、バレたか。」

観念したフィーアは昨日伏せた部分を話す。フィーアはみらいはしっかり説明すれば話しの分かる人間であると感じていたので、どうにかなるだろうと思った。そして、

「つまり、フェイトとか言うあの子はその母親の命令で集めているんだな？」

「そして俺もフェイトも、その母親の目的を知らねえ…。だが、ジエルシードをそのまま放置するのはユーノの言うとおり危険だから、今はとりあえず一緒に集めている。もっとも、一番の理由はほっとけなかったって言うのもあるが…。」

一通り話し終え、一息つく二人。そして、みらいが再度口を開く。

「その母親の目的の予想はできているのか？」

「いや、会ってないから全くわからねえ…。娘のフェイトでさえ定期的な連絡以外させないそうだ。もしかしたら、本当に興味があつて集めてるのかもしれないし、世界を滅ぼす気かもしれない…。まあ、そのうちその定期連絡があるらしいからその時にどうにかする。」



「そうか…そっちは任す。」

フィーアの話はとりあえず終わり、次はみらいが話す番になった。

「俺は二年前、近衛銃士を辞めて旅をしていたんだが…気づいたらこの世界に飛ばされていた。」

「おい、雑すぎるだろ…。」

「仕方あるまい、事実なんだから。歩いていたらいつの間にか今の居候先の家の前にいたんだ…。その後、色々あって今は家族の一員として暮らさせてもらっている。」

「で、この世界の住人として2年間平和に暮らしてたら俺達が来た、と?。」

それにみらいは微妙な表情を見せる。フィーアは不審に思い説明を促す。

「この世界の住人として生きているのは認めるが、それ程平和ボケ出来無かった…。昨日、俺の足元に転がってた奴がいたよな?。」

「ああ、覚えてる。」

二人は昨日戦闘をやめた時に、みらいが気絶させたその男も連れて帰ろうとしたのだが、フィアの時のように転移して逃げたあとだった。そのあと、八つ当たりで木を二、三本へし折ったのは御愛嬌である…無理か…。

「あいつと同じ格好した奴が二年前から何度も俺と家族を襲って来てな…まあ、その度に返り討ちにしたんだが、去年の年末に12人同時に叩き潰したらしばらく来なくなった。」

「…こういう時って、なんて言えばいいんだ？」

「知るか。それで、お前はあの時『仲間では無いが心当たりがある』とか言ってたがどういことだ？」

「俺も似たような奴に襲われた。」

そしてフィアは自分がこの世界に来て二日目に奴らの仲間と思わしき連中に襲われたことと、それが時空管理局の暗部の類ではないかと推測していることを。みらいは考え込むようにして口を開く。

「ふむ、時空管理局の暗部か…。確かに、管理局との共通点と矛盾点を考えると納得がいく。」

「あんた、管理局のこと知っているのか？」

「俺の友人の知り合いに管理局員がいるそうだな、少なからずその友人に教えてもらった。先言つとくが、そいつは奴らの仲間じゃないからな？」

因みにその友人、嘘は言っていないが友人本人が管理局員なのをみらいには教えてない…。

「分かったよ。じゃあ暗部（仮）の奴らはあんたに任す。」

「任せろ。では一足先に交渉成立ということだ。」

二人はがっしりと握手を交わす。傍から見れば会社員が契約とったような光景に映ったかもしれない。

「なのはとユーノには俺が説明しておく。お前はフェイトとアルフのところに帰って説明して来い。」

「ああ。でも、できればフェイトの母親の件はまだ内緒にしといてくれないか？」

「何故だ？」

「ちょっとな…いやな予感がするんだ…。」

「…分かった、一応協力するのなら問題ない。好きにしろ。」

「すまない。では、今日はこれで。」

そう言ってフィーアは店を出てみらいと別れた。いつの間にか暗くなった夜道を歩いてフェイト達のもとへと向かう。そんな中リリアが口をついに開いた。

《何故内緒にしてもらったのですか？》

「…さあな、自分でもわからん。ただ、俺の勘がこれは俺が解決しろと言ってる気がしてな。」

——あの夢を、自分の過去を思い出さす何かが待っていると、そ

う囁いてる気が…。

その刹那、リリアが何かに気づき、叫ぶ。

《ッ！！フィア、大変です！！》

「どうした？」

《ジュエルシード反応です！！あと、フェイトさんの反応が！！》

「何…！？あいつ疲れて寝てたんじゃないのか…アルフはどうした！！？」

《分かりません！！しかも、ジュエルシードが本格的に暴走始めます！！フェイトさんが一人で封印しようとしてますが、無理そうです！！》

「ッ！？ヤバい、急ぐぞ！！」

——海鳴市、三度目の夜の大騒動が始まろうとしていた。

## 第二十二話 闇は囁く（前書き）

だれか、助言くदाしゃい…そして、いつもより長い…しかも分割…

## 第二十二話 闇は囁く

フェイトside

（少し時間を遡る）

旅館付近でジュエルシードの反応を確認したのが夜。フィーアとみらいの試合（死合い）観戦が真夜中。そして、全て終わらせて家に着いたのが深夜。ただでさえ、ジュエルシードの回収で寝るのが最近遅かったフェイトとアルフにとってこれは流石にキツかった…。特に、昨日の試合のために結界を張り続けたアルフはもう限界だったようで、すでに爆睡中である。そのためフィーアはフェイト達を休ませて、明日の：実質今日のなのは達との話し合いは1人で行くことにした。まどろみの中、フェイトはフィーアのことを考えていた。

（フィーアって、結局どんな人なんだろう…。）

無論、見た目や素性のことでは無い。初めて会った時や日常ではちよっと抜けた感じの人だと思った。けれども、ジュエルシードの暴走体やみらいと戦う時はまるで別人のように様変わりする…。いや、正確には違う。日常と戦闘時では無く、“常に別の人間性がチラついている”気がするのだ。それこそ、理性的なフィーアと本能的なフィーアの二人と同時に会話していると感じる時がある。

（でも、どっちも優しいのには変わらないし…どっちもフィーアなんだよね。それに、私の気のせいなだけかもしれない…。）

なにかと軍人だからと言って手伝ってくれるフィーア。でも、フィーアは自分達と一緒に買い物に行ったり、食事に行ったり、遊びに行ったりとジュエルシードと関係ないことでもよくしてくれる。こんなに仲良くなれた人はアルフとリニス以外では初めてだった…。

（フィーアとも、ずっと一緒に居たいなあ…。）

私にはいなかった父親や兄。もし、いたらフィーアに感じたこの気持ちと同じような気持ちになれるのかな…？ずっと一緒にいたいと思えるのかな？…何にせよ、フェイトはアルフ同様フィーアに心を許していた。

（よし！とにかく、今日は休んで明日も頑張ろう！）

そう気合を入れ、今は休むことにした。そして目を閉じ、意識を手放そうとしたその時…

（本当にそれでいいの？）



瞼を閉じ、真っ暗な世界に入ったフェイトの頭に声が響く。咄嗟に体を起こそうとするが現実なのか夢なのか判別がつかず、体が思うように動かない。

（誰なの？）

思わず尋ねる。だが、その声には聞き覚えがある。いや、聞き覚えのあるどころかこの声は…

（私はあなた、そして、あなたは私。）

——それは“自分の声”そのものだった…。そして、声は話し続ける。

（君は、いくつジュエルシードを集めたのかな？）

(∴2つだけ。)

ジュエルシードは全部で21個ある。なのに、まだそのうちの2つしか集めていないという事実を思い出す。これだけでもそうとうフエイトは焦燥感にかられるのだが、無情にも声はさらに非情な事実を突き付ける。

(違うよ、“君が”集めたジュエルシードはゼロだよ?)

(え∴?)

(1つ目のジュエルシード封印の時は、ほとんど君は気絶してただけだね?)

(あ∴。)

フエイトは思いだす。あの日、蜘蛛の大群を見て気絶していたことを。その最中、アルフは自分を抱えて逃げ続けてくれて、フィーアは蜘蛛を蹴散らしてくれた。

(2つ目だって、彼が来なければあの白い魔導師に負けていたかもしれないんだよ?)

(そんなこと…。)

無いと言いかけたが自分は白い魔導師、なのはの実力を知らない。  
戦って勝ってジュエルシードを手に入れたかもしれないし、負けて  
手に入らなかったかもしれない。フィーアがいたからこそ、あの時  
は楽に手に入れることができた…。そう、思えてきた。

(昨日だって、彼がいなかったら君たちはどうなっていただろうね  
?)

(…。)

もう返す言葉も無い。自分が八神みらいと戦って勝てる道理なんて  
無い。もし、みらいが敵にまわったら自分はもうどうすることもで  
きない。それに追い打ちをかけるように自分の声が頭に響く。

(結局、君は何もできない役立たずなんだよ。)

(そ、そんな…。)

——突然、声が自分の使い魔、アルフのものに変わる。

（アタシに愛想をつかされて…。）

（やめて…。）

——今度は彼の、フィーアの声に変わる。

（俺にも嫌われて…。）

（お願いだから…。もう、やめて…。）

現実と夢の狭間でフェイトは泣きそうになっていた。だが、そんな彼女に声はトドメをさす。フェイトがジュエルシードを集める一番の理由…。

『そして、母さんに捨てられてしまうのよ。』

———母親の声、プレシア・テストロッサの声でそう囁かれた。

「ああああああああああああああああっ！！」

叫びながらフェイトはベッドから飛び起きた。辺りを見渡すと、時間が夕方頃になって周りが暗くなり始めていたこと以外、特に何も変化してないいつもの自分の寝室だった。アルフもそこで眠っている。フェイトは乱れに乱れた呼吸を徐々に整える。

「ハア…ハア……。今のは、夢…？」

そうとしか思えない。だが、例え夢だったとしても、さっきの聲に告げられたことは事実。そう考えると急に惨めな気持ちになった。

「私は…、何もできていない…。私は役立たず…。」

———このままじゃ本当にみんなに見捨てられてしまうんじゃないだろうか？アルフにも、フィーアにも、そして、母さんにも…。

「嫌だ…そんなの嫌だ…!! みんなに嫌われたくないよ!!」

フェイトは泣くように叫びながらバルディッシュとバリアジャケットを展開した。

《マスター!?!》

「ん…あ、おはようフェイト。ってちょっとフェイト、どうしたの!?!」

バルディッシュとアルフはフェイトの様子に戸惑う。いきなり戦闘状態になったのには当然驚いたが、なによりフェイトは今、泣いているのだ。声をかけて問うも、フェイトは半ば理性を失いかけており、二人の声を聴こうともしない。

「私、みんなの役に立ってみせるから!! 1人でやって見せるから!! だから、私のことを嫌わないでえ!!」

そう泣き叫びながらフェイトは部屋から外へと飛び出す。一人置いて行かれたアルフは一瞬茫然としてしまったが、すぐに気を取り直す。

「ハッ!! ボーっとしてる場合じゃなかった。フェイトを追いか…」

け…な…いと…。(ドサツ)」

突如、不自然な眠気に襲われたアルフは意識を失い、再び眠りについた。

「遠慮するな、もう少し眠っていたまえ。」

そんなアルフを一瞥し、黒装束の男、ネーム二佐はフェイトの飛んで行った方へ飛び立った。

ファイア side

そして今、ファイアはただひたすらフェイトのもとへ向かっていた。いまだに念話の返事をよこさないアルフは一旦放置して、ジュエルシードのもとにいるであろうフェイトのもとに急ぐことにしたのだ。

「あいつ一人で大丈夫そうか？」

《現在、結界内で奮闘中のようです。ですが、いつもはアルフさんがやっている封鎖結界を自分で張りながら一人で封印しようとして

ますからいつもより集中力が…。》

あんの馬鹿…なにがしたいんだ…？俺を信頼できなくなったつうのなら、悲しいが…まあ、納得できる。だが、なぜアルフまでいない？

「アルフの現在位置は？」

《反応からして、マンションで寝てると思われます。》

喧嘩でもしたのか？いや、今はとにかく急ごう。

「フィーアさん！！」

「お、なのはとユーノか。」

ジュエルシールドの反応を感じ、二人も向かい始めていたようだ。

「昨日の疲れは大丈夫か？」

「私もユーノ君もギリギリまで寝てたから大丈夫です。」



確かに二人の顔色は平気そうだった。フェイトは…大丈夫だろうか…一人でいる時点でやな予感がしてしょうがない…。不意に、あることに気づく。

「八神は？」

自分並みに勘のいい八神みらいがいないのだ。あの男に限ってこの騒ぎに気づかないなんてことは有り得ないはずなのだが…。その疑問にユーノが答える。

「みらいさんなら、血相抱えて家に帰りましたけど…？」

「ハアッ？」

逃げたのか？イヤイヤ有り得ない…待てよ、家に帰った？

「ユーノ、八神はなんか言ってたか？」

「ええ、『奴らめ、また俺の家族に手を出す気か!!』とか言っていましたけど…奴らって誰です？」

「ああ、なるほど…そりゃ仕方がない…。」

そうか、そういうことか…八神がジュエルシードを無視したのも、アルフが眠りっぱなしなのも、フェイトが一人でいるのも…。

「全部、お前達のせいだ…。」

そう言ってなのは後ろの方を睨む。なのはがつけられて後ろを振り向くと、いつの間にかそこには十人程の黒装束の男達が立っていた。辺りを見渡せば封鎖結界もすでに展開済みのものである。そんな中、連中の一人が口を開く。

「この件から手を引け。もう、ジュエルシードとあの小娘に関わるな。」

ふん、やっぱりコイツラの本命はジュエルシードとフェイト達か。さらに男が口を開く。

「貴様は次元漂流者であろう？ たかが異界の小娘一人に命を懸ける理由は無かろう。」

それに対し、

[illegible]

フィーアは嗤う。“笑った”のではなく、“嗤った”。馬鹿にされたと感じた男たちは殺氣立つ。なのはとユーノは何故フィーアが笑い声をあげたのか分からず、目を白黒させていた。

「何がおかしい!？」

「ハハハッ：ああ、すまない。そういや、こんな時に“僕”はこんなところで何をしているんだろうって思ってたね。」

なんだ、そういうことか……。男たちはそう心で呟き、フィーアが予想よりアツサリ手を引いてくれるものだと思った……。思ってしまった……。フィーアの“口調が変わっている”ことに気づかずに……。

「話しができるように助かる。ではとつと何処へでも行つ――」

「【我が銘に答えよ、  
『夜叉鴉』】」

男の言葉を遮るようにフィーアは呪文を唱える。すると、フィーアの足元に魔法陣が出現し、そこから鴉のような使い魔が複数現れた。

そして、その中の一匹がさつきまで喋っていた男に体当たりを喰らわす。フィーアの使い魔、『夜叉鴉』は見た目も大きさも普通の鴉のそれと変わらない。にもかかわらず…。

——ドオオオオンッ!!

体当たりを喰らわれた男は派手な音と共に、民家をぶち壊しながら吹き飛ばされた。男たちの表情は全て驚愕と怒りで染められていた。

「き、貴様ッ!! 我々とやる気か!?!」

「おゝい、なのはゝ。」

男の怒声を見捨てたのは視線を移し、声をかける。

「ハ、ハイッ!!」

「…。(ガタガタガタガタ)」

雰囲気がガラリと変わり、なのはとユーノは今のフィーアが怖くてしょうがなかった…。そんな二人に構わずフィーアは話を進める。

「薄々感づいてると思うけど、今フェイトが無茶して一人でジュエルシードを封印しようとしてるみたいなんだ。先に行って助けてあげてね。一応、僕の使い魔も一緒に行かせるから。」

「わ、分かりました…。でも、フィアさんは？」

するとフィアは視線を男達の方に視線を戻し、恐ろしくて冷たい笑みを浮かべる。

「彼らを片付けてから行くよ。だから、早く行ってね…。？」

「（怖ッ！？）ハイッ！！先に行ってます！！」

言うや否や、フィアの夜叉鴉を率いてなのははフェイトのもとへ飛んで行った。夜空を鴉の群れを率いながら飛ぶ姿は中々絵になっていた。フェイトならもっと似合ってたかもしれない…。

「そんなに死にたいのか貴様！！突然飛ばされたこの世界も、昨日今日会ったあの小娘共も、別に命を懸ける程のものでもないだろう！？なぜ貴様是我々の邪魔をする！？」

男の怒声に、めんどくさそうにしながらもフィアは口を開く。

「僕は、欲張りだからさ。」

「…何？」

意味不明な返答に思わず呆けてしまう。それに構わずフィアは続ける。

「一度知ってしまった…全てを失うということの怖さを…失った多くは戻ってきたけど、その中に愛した人たちは居なくて…。それ以来、僕は失うことが怖くて怖くて怖くて怖くて仕方がないんだよ…。」

男たちは段々フィアが得体のしれない不気味な存在に見えてきて、背中に悪寒が走った。

「だからさあ…僕からあの子たちを奪わないでよ…悲しくなるじゃないか…泣きたくなるじゃないか…君たちを…」

―――殺したくなるじゃないか……!!

冷たい笑みを張りつけたままフィーアは魔剣を取り出し、引き抜き、プログラムを喰わせ、サーベル状態のヴィルガロムを構える。そして、魔剣はフィーアの言葉と同時にランチャーへと姿を変える。

「【グレネード】。」

―――ボオオン!!

あまりの恐怖に動けなくなっていた男達、黒装束達に向かって容赦なく爆撃が叩き込まれる。今ので3人がヤラレ、残りの者達はそれに動揺し、混乱するが、フィーアはすでに彼らの中心に居た…。

「【スライサー】。」

今度はフィーアの手日本刀にそっくりな剣が握られていた。そのことに気づく暇も与えず、一閃二閃と斬りつけ、さらに二人を沈黙させる。

「いのッ!」

「【ショット】。」

後ろでデバイスを構えていた奴を散弾銃に変化させたヴィルガロムで撃ち抜く。男は弾丸の壁をもろに喰らい、吹き飛んだ。

「なんなんだよお前は!? 人の皮を被った化け物か!」

瞬く間に仲間の半数以上を失い、恐怖と混乱が込められた声で黒装束の一人が叫ぶ。それにフィーアは『黒羽』で手榴弾を創りながら自嘲気味に答える。

「いや…、ただの死に損ないさ…。」

——自ら張った檻（結界）の中で、彼らは爆音と断末魔と共に次々と消えていった。



**第二十三話 それぞれの理由（前書き）**

苦情殺到覚悟…

## 第二十三話 それぞれの理由

フェイト side

「【ジュエルシード封印】！！」

ジュエルシードの封印に成功したフェイト。しかし、その顔は浮かない。その原因は彼女の周囲を羽ばたいてる数羽の鴉が原因だった。

「君たちは…、フィアの……。」

そう、フィアの使い魔の夜叉鴉たちである。先程ジュエルシードを封印する際、日頃の疲労と、基本アルフに任せている慣れてない封鎖結界の展開が重なり、集中力を切らせたフェイトはジュエルシードを暴走させかけたのだ。半暴走中のジュエルシードを直接握りしめ、そのまま魔力を送り込み、手に傷を負ってでも強引に制御しようとしたその時、突如フェイトの周囲に魔法陣が展開され、中から数羽の夜叉鴉が現れたのである。

フィアは黒装束と接触したその日、用心のためフェイトにこっそり夜叉鴉を護衛につけていたのである。フェイトの危機が迫ったと判断した夜叉鴉たちは出現し、己の魔力をフェイトに差し出し、その上封印の補助までこなしてた。

「やっぱり…、フィーアもアルフも私のこと…役立たずだと思ってるんだ……。」

いつもなら礼の一つくらい言ってたろうが、“あの声”に話を聴かされた今のフェイトには、『フィーアがフェイトを信頼してない』という意味合いに感じてしまった…。

「このままじゃダメだ…何か、何かしないと…みんなに嫌われちゃう…見捨てられちゃう……。」

思考が悪い方へ悪い方へと傾き、震えた声で呟き続け、表情はどんどん虚ろな物になっていった。その姿はまるで、“壊れた人形”のようであった…。その時、フェイトに呼びかける声が響く。

「フェイトちゃん!!」

フィーアの夜叉鴉を複数引連れたなのはがそこにいた。ぼんやりとした思考の中、フェイトはなのはを見てあることを思いついてしまう。そして、虚ろな表情のまま、笑みを浮かべる。その姿になのははゾクリとする。

「ねえ、なのは…、勝負しよう…。」

「え…？ フェイトちゃん、何言ってるの…？」

フェイトは考えてしまった…歪みに歪んだ自分なりの名誉挽回の方法を…。

「私が負けたら、今私達が持ってるジュエルシールドは全部あげる。私が勝ったら、なのは達が持つてるジュエルシールドを全部ちょうだい…。」

「ちょっと待って！！なんで今、戦わなきゃいけないの！？せめて理由を教えて！！」

なのはを倒せば“あの時”、フィーアがいなくてもジュエルシールドを手に入れることができたと証明できる…そして同時に、一気に自分の元にジュエルシールドを手にすることができる。そうすれば自分アルフにも、フィーアにも、そして母さんに嫌われなくて済む…。

そんな考えが今のフェイトの頭の中を占めていた。そのため、なのはの声はロクに頭に入ることは無かった…。

「どうせ言葉だけじゃ、何も変わらない…何も伝わらない…。だから私は、行動で示す！！」

《サイス・フォーム》

バルディツシュに魔力刃を形成させ、なのはに斬りかかる。

——ガキンッ！！

「きゃあッ！？」

かろうじてレイジングハートで防ぐものの、なのははそのまま弾き飛ばされた。体制を取り直し、なのははフェイトに向かって叫ぶ。

「言葉だけじゃ何も変わらないって言うけど…話さないと、言葉にしないと伝わらない事だってきつとあるよ！！！」

「そんなの、今の私に意味はないよ！！もともと、私たちは敵同士の筈だったんだから！！！」

——フィーアが居なかったら、なのはの名前さえ覚えることも無かった筈なのだから…。

再度バルディツシュをなのはに振るうフェイト。なのははそれを再びレイジングハートで防ぐ。

「目的がある同士だから、ぶつかり合うのは仕方ないのかもしれないかもしれない……だけど!!」

半ば気合で押切、フェイトと距離をとったのはは彼女に問う。

「戦うのが当然だって言うなら……、どうしてもそんなに寂しい目をしているの!?!」

「ッ!?!」

「私がジュエルシードを集めるのは、それがユーノ君の探し物だから。最初はユーノ君のお手伝いで集めてたけど、ジュエルシードの力で街の人や大切な人に危険が降り懸かったら嫌だから!! だから私も簡単には譲れない!!」

今のフェイトとは対照的に決意の籠った真っ直ぐな目で見つめながらなのは言いきった。

「これが……私の理由!! フェイトちゃん理由は!?!」

「……私は……私は!!」

なのはの言葉に声を詰まらせ、顔を俯かせるフェイト。だが、やがて何かを決心したように顔を上げ、宣言するかのようになのはの問いに答える。

「ジュエルシードを集めること、それが母さんの願いだから！！その願いを叶えて母さんを笑顔にしたい！！それだけが私の望み！！」

言いたいことを言い切り、フェイトは思考も気分も少しスッキリした。表情も先程の虚ろなものではなく、なのは同様強い意志が宿っていた。その様子になのはは少しホッとする。しかし、安心したものも束の間。フェイトは再びバルディッシュを構え、なのはに向ける。

「だけど、このままじゃ私はただの役立たず…きつとみんなに見捨てられてしまう…。だから君を、なのはを倒して信用を取り戻す！！」

《フラッシュ・ムーブ》

「ッ!？」

言うや否や魔法による高速移動で瞬時になのはとの間合を詰める。  
そしてバルディツシュを振りかぶり、それを振り下ろす……つもり  
だった……。まるで、“何かに掴まれた”かのようにバルディツシュ  
が動かせなかった。

「……………こんのっ……」

背後から聴き覚えのある男の声が聴こえた。なのははフェイトの背  
後に居るであろう声の主を見て顔を青くしていた。フェイトは恐る  
恐る後ろを振り向く。するとそこには……。

「バカタレがああああああああああああつ!!」

……………ゴツツン。

「キャンッ!!」

“四枚の黒い翼を生やした”フィーアが鬼の形相で怒鳴りながら、  
フェイトの頭にそこそこ手加減された拳骨をお見舞いした。



ファイア side

拳骨を喰らったフェイトは空中でうずくまっていた。それを同じ高度で、ファイアは仁王立ちしながら見おろしていた。さっきとは別の種類の怒りオーラを纏ったファイアに内心ビビりながらも、なのはファイアに声をかける。

「あのー、ファイアさん？」

「あん？ どうした？」

「その翼はなんなんですか？」

言ってファイアの背中に生えた黒い翼を指さす。それはファイアの背中から横向きに一对、縦向きに一对生えていた。横向きの一对は結構動くようだが、縦向きの一对はさほど動かず、代わりに赤い火花がチラついていた。

「俺の『黒羽』を本格的に展開しただけだ。空を飛ぶ時は大抵コレ使ってる。あ、とりあえずフェイトの相手してくれてありがとな。」

「え…、いえいえそんな大したことは…。」

「さてと…、フェイト。」

フェイトはビクツと体を震わせ、顔をゆっくり上げる。そしてフィアと目が合う。その表情は何かに怯えてるようだった。当然、怒ってるフィアにも怯えているのだろうが…フェイトはもうフィアが自分に失望してしまったのでは？という考えにも恐怖していた。

「『嫌われるから、信用を取り戻す』ってのはどういうことだ？」

視線を泳がすもフィアのプレッシャーに耐えれず、フェイトは口を開く。

「私、ほとんどフィア達に任せっきりだから…みんなの役に立ててないから、そのうちみんなに愛想をつかされて、嫌われて、見捨てられるんじゃないかと思ったたら怖くなって…。」

「それで一人でジュエルシードを封印しようとしたり、なのはと勝負したりしたのか？」

「…うん。」

ゆっくりと頷くフェイト。それを見てフィーアは溜息をつく。フェイトになにかしら黒装束共がちょっかい出したのは確かだろうが、フェイト自身の性格にも原因があるようだ…。

「…：フィーアだって私のこと、役立たずだと思ってるんでしょ？」

「…：そうかな。」

「ッ！！」

その言葉を聴いてフェイトは泣きそうになる。やっぱり自分は…。  
しかし、フィーアは言葉を続ける。

「だからこそ、簡単に見捨てれるわけないだろうが。」

「…：え？」

「少し目え離れた途端、一人で無茶するし、勝手に思いつめて暴走

するし…危なっかしすぎてほっとけないっいたらありやしない…。」

自然とフェイトの目に熱いモノがこみ上げる。しかし、それはさっきまで悲しくてこみ上げてきたモノとは質が違った。それでもフェイトはフィーアに問う。

「こんな役立たずの私なんだよ…？」

「…なあ、フェイト。お前は、なんで母さんの笑顔を見たいと思った？ 見ると何かお礼の品でも貰えるのか？ 魔力が増えるのか？ 天才にでもなれるのか？ —— 違うだろう？ ただ『母さんの笑顔が見たい』だけで他に複雑な理由なんてないだろう？」

「…うん。」

フィーアの言葉に頷くフェイト。

「俺だって、フェイトに見返りを求めて一緒に居るんじゃないんだよ。ただ、フェイトを手伝いたくなっただけなんだからさ…別に役に立とうが立つまいが関係ない…俺はお前を、お前らを最後まで見捨てないさ。出会って一週間の俺がこう思ってたんだから、ずっとフェイトと一緒にだったアルフだって同じ気持ちに決まってるさ。」

笑みを浮かべながらフィアは言う。ソレを聴いてフェイトは何も言えなくなった。悲しいからでは無い、フィアの言葉が嬉しかったからである。フェイトはフィアに抱きつく。そして泣きながら言った、

「勝手に疑ってごめんなさい……!!そして、ありがとう……!!」

「どういたしまして。そこで空気になりかけのなのはと、家に置いてきたアルフにもちゃんと謝っとけよ？」

フェイトの頭を撫でながらフィアはそう返す。そして、しばらくして泣きやんだフェイトはフィアから離れ、なのはと向き合い、さっきのことを謝罪した。

「……ごめんね、なのは。」

「気にしてないからいいよ。それにしても、よかったねフェイトちゃん！」

「うん!ありがとう!」

もう、フェイトの顔に暗いものは無かった。それを確認し、フィアは言う。

「それじゃあ、また徹夜になる前に帰るぞ。」

「うん！」

「ハイ！」

——時刻は夜中。辺りは真っ暗だったが、三人が居る場所だけは明るかった。それはきっと、魔力光のせいだけではなかっただろう。

**幕間 その影で…（前書き）**

コイツのプロフィールも作るべきかな？

## 幕間 その影で…

ネームside

「おのれえ…忌々しい…。」

遠く離れた建物からフィーアたちを監視していたネーム二佐は吐き捨てるように呟いた。

「私自ら出てきたと言うのにこのザマか…。『魔獣』め…。」

何を隠そう、フェイトに散々酷いこと言った“あの声”の主はネーム二佐なのである。彼のレアスキルである『変声念話術』はその名の通り、一度聴いた声なら簡単に念話で真似できるのだ。実質ただの念話と変わらないため守護魔法の類に滅多に反応せず、彼はそのレアスキルによる洗脳紛いで任務中に何人もの人間の心を弄び、壊し、利用してきた。

「このままではプレシアの手元にジュエルシードがいかないではないか…。」



わざわざスクライアの輸送船を襲撃してジュエルシードをこの世界にばら撒いたというのに……。スクライアの小僧、持ち主と協力関係を築きおって……。計画上、ジュエルシードが“私が狂わせた”プレシアの手に渡るのは必須事項。そのため、あの“人形”を小僧と面倒な奴らと別離させ、いのように利用して残りを集める予定だったのだが……。

「あれではもう無理ではないか!!」

魔獣と人形が、出会った当初より仲良さそうに帰るところを見ながらネームは呻いた。ただでさえ魔人と魔獣の足止めのために金で雇った次元犯罪者を全滅させられ、おまけに勘の鋭い二人の化け物に同じ手を使う気にはならなかった……。

「ネーム二佐!!」

「なんだ……?」

数少ない正規の部下の報告を聞いて彼は後悔する。

「表の連中が動きました。しかも派遣されるのは『アースラ』とのことです。」

「クソッ!!あの女狐か!!…しかたあるまい、監視をプレシアに集中し、奴らの監視は最低限に留めろ。」

「了解。」

(覚えていろ貴様ら…最後に嗤うのは私だ!!!)

——そう言って闇は姿を消した

### プロフィール3 (前書き)

本格的に出る回数増えそうなので…

### プロフィール3

名前 ノー・ネーム（偽名）

年齢 黙秘（三十代と思われる）

階級 時空管理局暗躍機動部隊隊長・二等空佐

魔力 A A ー

外見 赤い瞳をしており、黒の7・3ヘア。部下達同様、黒装束を身に纏う。

性格 紳士的なフリをしてるが、最近ではフィア達のせいでボロが出始めてる。基本外道。

特技 レアスキル『変声念話術』による洗脳。スキル自体に洗脳能力は無いが、寝ぼけてたり、意識が朦朧としている相手に印象的な声を選択し、巧妙に話しかけ惑わす。

戦術 自身は滅多に現場に行かず、主に部下や金で雇った犯罪者を使う。基本的に捨て駒として使ってるので失敗したら簡単に切り捨てる。しかも作戦を失敗したり、捕虜などにされた部下が情報を漏らさぬように嘘の任務内容を渡すこともある。（例・フィアによる一人目の犠牲者）。

備考 ネームの部隊はスカリエッティ達と同じ様な立場である。そのため、『アースラ』などの表の局員に発見されると犯罪者扱いさ

れる。

余談 本当は第十四話で出番終了だった。だから適当に考えてノー・ネーム（名無し）に…。

## プロフィール3（後書き）

いつか名前つけよう…

第二十四話 お話しよう (O☆H☆A☆N☆A☆S☆H☆Iにあらず) (前書き)

や  
やのん  
びり

第二十四話 お話しよう（O☆H A☆N A☆S H Iにあらず）

フイアー side

「申し訳ない。」

昨日のフェイトの暴走から一夜明け、時間は正午を過ぎたところ。六人は再び、否やっと『翠屋』に集まった。そこでフイアーはみらいに頭を下げていた。頭を下げられた本人のみらいと、なのは達はキョトンとしていた。

「一昨日、約束をしたにも関わらず、貴官の家族を巻き込んでしまった…。家名を賭けた手前、どんな罰でも受けよう。煮るなり焼くなり好きにしてもらって結構。」

どうやら、一昨日みらいと約束した『みらいの家族を巻き込まない』という約束を早々に破ったことを謝ってるらしい。とは言っても、直接フイアーが巻き込んだわけではなく、黒装束がみらいの足止めのために八神家の方に向かって行く“フリ”をしただけであったのだが…。そして、まんまと騙されたと知ったみらいはしょんぼりしながらフイアー達と合流したのである。



（（（誰…？）））

その場に在る全員がそう思った。目の前に在るのは確かにフィアなのだが、明らかにいつもの彼じゃない…。いつもの陽気で気さくなものでも、なのはが目撃するハメになった冷酷狂気のものでもなかった。そこにいたのはクソ真面目な青年ただ一人である。

「……どうした？」

「いや、ギャップがすごいとしか言いようがないと思うよ…。」

その場の空気に違和感を感じ、顔を上げ疑問を口にしたフィアにフェイトが答える。

「あのな…、俺は軍人だって前から言ってるだろう？ その場に合わせて口調ぐらい変えるわ。ああ、ついでに言っとくが謝罪は本気だ、殴るなり斬るなりして構わねえよ。」

「…いや、俺が“巻き込むな”と言ったのはジュエルシードの封印そのもので奴らのことでは無い。奴ら、黒装束には昔から目をつけられていた…、あの約束があるうとなかろうと関係無かった。むしろ、非があるとしたら首を突っ込んだ俺自身だ。」

「…感謝する。」

そうしてこの話は終わりになった。そしていよいよ本題である。

「では、本題であるフェイトのお母さんのことだが…。」

そう言った途端フェイトの体が強張り、アルフは心配そうにフェイトを見つめる。

「大丈夫かい、フェイト…?」

「平気だよ、ありがとう…。それに、私が自分で言っちゃったんだし…。」

本来なら、ジュエルシードを求めているのはフェイトの母さん、『プレシア・テスタロッサ』であることはギリギリまで黙っている予定だったが昨晚、フェイトはなのはの問いかけへの答えとして言うてしまったのである。そのため結局、なのはとユーノにも洗いざらい説明することにした。

「つまり、フェイトちゃんもなんでお母さんがジュエルシードを欲しがってるのか知らないんだね?」

「うん、黙っててごめん…。ユーノも…。」

「いや、僕も今は特に気にしてないよ。」

特に黙ってたことは咎められなかった。それにフェイトもアルフも安堵する。

「で、どう思うユーノ。何か他のジュエルシードの利用方法とか無いのか？」

「うーん…特に無いと思います。あるとしたら、込められた莫大な魔力ぐらいだと思います…。」

「まあ、アレ一個でこの世界滅ぼせるもんな…。」

どうすつかねーホント…情報足りなくて何も予想できない…否、逆に様々な可能性がありすぎて予想が絞れない…。そんな中、ユーノが口を開く。

「ところでフィーアさん。」

「ん？」

「あなた、何者なんですか？」

ああ、そういや素性については名前以外なにも言っていなかったな……。にもかかわらず目の前で激闘したり豹変したりしたのか俺……。

「次元漂流者。」

「いや、そうじゃなくて……」

「魔法と科学が共存した世界で軍人やってた。」

「え!？」

「ちなみに、八神は俺の祖国の『同盟世界』、管理局でいうところの『管理世界』みたいなところ出身だぞ。」

「管理世界と違い、あくまで対等関係だな。」

祖国の誇りに賭けてそこは譲れないためか話に割り込むみらい、と  
ころが…。

「…え？」

何故か意外そうな顔をしたユーノ。不思議に思ってたらユーノの口  
から驚くべき言葉が出た。

「でも…みらいさんのデバイスって、『カートツリジ・システム』  
が付いてるってことは『ベルカ式』なんですよね？なんで持つて  
るんです？」

「ハアッ!？」

「ユーノ、何故お前がその単語を知っている!？」

「え? え? ちよつ、待つ…わわっ!!」

思わずみらいと二人がかりでユーノに掴みかかる。二人の豹変つぷ  
りになのは達は困惑する。そりゃ俺たちだってビックリするわ…俺  
達の世界はフェイトに話したときの様子からして未知の世界であり、  
認知すらされてない辺境地だと思っていたのだ。にも関わらず、何  
故ユーノはこっちの世界の技術の一端を知ってるんだ!？

「聞きたいのはこっちですよ！僕たちの世界の二大魔法大系の片方をなんであなたが持つてるんですか？」

「…八神、どうなんだ？」

「数世紀も前から普及してたから俺にも分からん…。ユーノ、ちょっと貸すからよく見てくれ。」

そう言っつて魔法陣を“堂々と”展開したみらいはそこから愛銃『オルギニス』を引っ張り出す…て、オイ！？

（（（何堂々と魔法展開してんのおおおおおおおおおおとおおおお！？）？））

先程も書いたが、ここは『翠屋』。魔法を知らない一般人も大勢いる。そんな中で堂々と魔法を使ったみらいに全員焦る。なのはにいたっては家族の目の前なので一層パニック寸前である。

「ちょっと、みらいさん！？何してるの！？？」

「あら、みらいさん新作かしら？」

「ええ桃子さん、ちょっと新ネタを見てもらおうかと。」

「よかったわね、なのは。みらいさんの『手品』見せてもらえて。」

「え…？ ああ…うん、よかった…。」

それ以上特に反応せず、いたって普通に仕事へ戻っていくなのはの母、『桃子』さん。周りの客も同じような状態であった。思わず呆ける五人。

「…あんた、今まで二年間そうやってきたのか？」

「そうだが？」

「…参考にさせて貰うなの。」

なのは、お前じゃ多分無理だ…。でも確かに手品で魔法のフリするより、魔法で手品のフリする方が楽だろうな。マジック（手品）のようなマジック（魔法）ってか…今度、広めてみよう…。

（閑話休題）

結局、一部独自の技術が加えられているがアルテミアとベルカの技術はほぼ同一とユーノは判断した。しかも、アルテミアで普及した時期とベルカの歴史を比べると、技術がベルカからアルテミアに渡った可能性が出てきた。

「つまり、もしかしたら俺達も『こっち』から『あっち』に渡れるかもしれないということか…。」

時空のジャンプが一方通行では無い可能性がある。それがこんな形で判明とは、人生分からないものだ…。そんな中、リリアがじれったそうに声を出す。

《すごい話が脱線しましたが、プレシアの件はどうするんですか？》

「「「「…忘れてた。」」」」

「…私、母さんに直接聞いてみる。」



「フェイト!?!」

おもむろにフェイトが言ったことにアルフが驚く。しかし、確かに現状では本人と話をしない限りどうにもならない。ここは一度問い直すべきなのかもしれない…。

「んじゃ、俺もついてくか…。」

「え?」

「なぐに、こっち来てから娘さんにお世話になってるって礼を言いに行くついでだ。」

「むしろ私達がお世話になってばかりだよ…、でも分かった、フィアもついてきて。」

「はいよ。」

とりあえずフェイトとアルフ、そしてフィアは報告を兼ねてプレシアに会いに行き、なのはとユーノ、みらいは引き続きジュエルシードの探索を続けることになった。

「うまくやれよ？」

「ただの家庭訪問みたいなもんだ、大したもんじゃないさ。」

みらいの言葉に軽く返すフィア。

——あの日見た夢の意味が、己の過去と重なるモノが待ち構えているとも知らず…。

## 第二十五話 魔道科学

ファイア side

時空の狭間に存在するとある豪邸、むしろ城とよべるような屋敷の入り口に三人の人影が立っていた。

「ここがそうか…、結構でけえな…。」

ファイアとフェイト、そしてアルフは転移魔法により高次空間内にあるテストロッサ邸、『時の庭園』に来ていた。

「それじゃあ、母さんもファイアのこと待ってるみたいだから、行く?」

「…おう。」

今更ながらファイアは不安であった。実は居候初日にフェイトはファイアのことをプレシアに伝えていたのだ。その時は、ファイアが『魔法を知っている次元漂流者で自分たちに協力してくれる人』と伝えたらしいのだが、特に何も言われなかったらしい。ところが今日の定期報告のために出発する直前、

『その人を必ず連れてきなさい。』

と、プレシア直々の御指名がきたのである。元々、呼ばれなくても行くつもりだったが、今頃になって自分に興味を持たれたり、用件ができたりしたのかと思うと不安になる。

（一体、俺を自分から呼ぶ気になった原因は何なんだ…？）

一番可能性が高いのは、また黒装束が関わってるということぐらいだろうか？ 奴らは心なしかフェイト達が“直接”ジュエルシードを手に入れるのだけは邪魔をしない。そして、フェイトに指示を出したのはプレシア…。黒装束がプレシアの部下という可能性も考えたが、それなら娘にこんな危険なことさせないだろうし、なにより一人目の奴は『邪魔をすればフェイト達をも殺す』みたいな発言をしていた。

「まあ、それも今から確かめりゃいいか。」

「どうしたんだい？」

「いや、なんでもない。」

三人は屋敷の中を進んで行った。

プレシア side

屋敷の中の大広間、そこにプレシアはいた。

ああ…ついに例の男がやって来る…。フェイトの報告を聞いた当初はどうでもよかったのだけど、そのあと監視中に見た男の魔法、あれは大魔導師と呼ばれた私でさえ知らない、理解できない未知の技術…あの男の持つ魔法は例の場所へ辿り着く近道に…いや、ひよつとすると……。

（もっと早くあなたに会えるかもしれないわ…、アリシア……。）

その時、プレシアのいる広間の扉が開き、フェイトとアルフ、そしてフィーアが入って来た。最初にフェイトが口を開く。

「母さん、報告に戻りました。」

「ジュエルシードはまだ2つだけしか集まってないのでしょう?」

「…はい、ごめんなさい。」

「あなたは大魔導師と呼ばれた私の娘、ガツカリさせないでちょうだい。」

「はい…。」

「もういいわ、下がりなさい。次の報告を期待するわ。」

「…え？あ、はい。」

（…アレ？）

フェイトとアルフは首を傾げた。二人はいつもならここでプレシアはフェイトに折檻という名の虐待を行うと思っていたのだった。しかしプレシアは、ジュエルシードが全く集まってないにも関わらず、あんまり気にしてない様子さえ見せた。フェイト達が不思議に思う中、プレシアはフィーアの方を向く。

「それで、あなたがフェイト達に協力してくれてる方？」

その問いにフィーアは例の真面目な口調で答える。

「そうです。ファイア・レイガードと申します。こちらに漂流した際、あなたの御息女にお世話になりました、以降その御礼を兼ねましてジュエルシード集めを協力させていただきました。」

「そう、でもどのみち礼を言うわ。」

「いえ当然の義務であります。ところで、何故に自分まで呼びに？」

「少し、あなたの魔法に興味を持ったのよ。」

それを聞いたファイアは少しフェイトと目を合わせ、考えるような仕草を見せた：

「…て、なんでうちの娘と目を合わせるのよ？」

「失礼、そういえば御息女にも自分の魔法は雑な説明しかしておりませんでしたので、ついでにこの場で披露しようかと…。」

——別に大した意味は無かった…いや、別にこの男と私の“人形”が意志の疎通をしてもどうでもいい…、それにしても、親密になるには年齢が離れすぎじゃないかしらって何を考えてるのよ私は

？私の娘はアリシアただ一人、こんな優しくて素直な子、アリシアとは別人よ……今の、遠回しに褒めただけかしら……？

「…あの、テストロッサ殿？どうかなさいました？」

「ッ！なんでもないわ。丁度いいから教えてちょうだい…あと、口調は楽にして構わないわ。」

「…やっぱり、見てたんですかい。」

バツが悪そうにするフィーア。それを気にせず、早く始めろと促すプレシア。フェイトも結構興味があったようで、アルフと一緒にフィーアを見つめている。

「ハイハイ、分かったよ。リリア、助手。」

《了解です。》

返事と共にリリアから資料が一部載ったホログラムが展開される。口調は楽にしろと言われたが最低限の敬語を使いながら、フィーアとリリアは説明を始める。

まず、ベルフィーア連邦には基本的に魔法と科学の二つの技術系統



が存在している。連邦の魔法技術、科学技術は単体でも恐ろしい高水準を誇っている。魔法のみなら『ゼロ？使い魔』を強化したもの、科学のみなら『ガ？ダム00』の世界に匹敵する。しかし、この栄華に拍車をかける技術が生まれた。

「それが、その『魔道科学』ってことかしら？」

《そうです。》

文字通り魔法と科学の融合である。しかし、その実態は全くの新種の技術というわけではない。魔法で科学を、科学を魔法で強化するといった方が正しい。

「一つ、代表的な例を出しましょうかね…これを見てくださいいな。」

そう言ってフィアは魔力の弾を作りだす。それは、プレシアはもちろんフェイトでも簡単に作れるような代物である。

「プレシアさん、ここに壊している物ありますか？できれば同じ硬度の物を3つ程。」

「ちょっと、あなたソレ撃つつもり？」

「一番手っ取り早いんです。」

「…しようがないわね。」

そう言った途端広間に騎士鎧の傀儡兵が3体現れた。

「では、失礼して。」

そう言って魔力の弾を発射し、的の兵に命中する。対象は胸部に穴を空けながら吹き飛んだ。プレシアは怪訝な表情を見せる。

「ただの魔法じゃない…。」

ミッドチルダでも普通に見られる基本的な攻撃魔法、あんなの“今の自分”でも簡単にできる。

「まあ、待って下さいよ。とりあえず、さっき俺がやったのは『弾を作る』、『弾を維持する』、『弾を発射する』の三つの魔法です。それでは次にコレをご覧あれ。」

今度はフィーアの左手にはいつの間にかリニアガンが握られていた。

管理世界出身のプレシアは少々動揺した様子を見せる。

「それって質量兵器じゃない…。それにフェイト、あなたは何で平然としてるの？」

「私もアルフも、もう見慣れたから…。」

それを無視するかのようにリニアガンを放つフィーア。傀儡兵は先程と“全く”同じように吹き飛んだ。フェイトとアルフはさっきからフィーアが何をしたいのかが判らず首を傾げる。プレシアも同様である。

「確かに質量兵器の中では優秀な道具かもしれないわね…でも、所詮さっきの魔法と同じ程度の威力じゃない。違うのは魔力を一切使わないことぐらいじゃ…まさか…。」

プレシアは自分で言って気づいたようである。それにフィーアはニヤリとする。

「今のリニアガン、質量兵器は魔力を使わず弾を『作ってあるし』『維持できるし』『発射できる』。そして、一回目と同じ結果を出せる。では、二回目に使わなかった3つの魔法を『電磁波の出力上昇』『弾丸の威力向上』『銃本体の硬質強化』に使ったら？」

その言葉と同時に強化されたりニアの弾丸が明らかに桁違いな威力を纏い、解き放たれた。

———ドゴオオオオン！！

轟音と共に傀儡兵は跡かたも無く粉々に粉砕された。その光景に、プレシアは啞然とする。自分の知る魔法でも、この光景は作ることはできるだろう。しかし、フィアの説明を考えると恐ろしい事実が分かる。

「…コレと一回目に使った魔力量が同じだと言うの？」

フィアの魔道科学は今の『結果』を傀儡兵を“吹っ飛ばしただけ”の魔力量で同じものを“消し去る”ところまで強化したのだ。それはただの弾丸がひとりでに砲弾に変わったようなものである。もし、同じ魔力量を持った2人の人間が魔法と魔道科学で撃ち合った場合、結果は明らかだ。持つてる魔力量は同じはずなのに燃費のよさと威力が違いすぎる…。

「これが一番の具体例ですかね？見ての通り、連邦の魔道科学のコンセプトは『より少ない対価でより大きな結果を』なんですよ。片方の技術だけでは足りない分をもう片方の技術で強化することにより、連邦の技術は革命的に進歩したんです。」

さらに具体的に言うと、魔法は燃費の向上により更なる大規模及び高性能な魔法の開発が可能になり、科学は半ば非現実的な魔法を技術として組み込むことにより、夢で終わるはずだった物を現実にすることに成功した。

「根本的な説明はこの辺まで。あとは機密に関わるんで、それなりの理由が必要です。」

魔道科学の根本が判ったところで科学技術、いわゆる化学や物理が理解できなければ魔道科学を理解することは不可能なためここまで教えたが、ここから先はその核心に迫る。そのため、秘伝とも言える連邦の技術はこれ以上教えることはできない。

「理由ねえ…、天才科学者と呼ばれた者として、というのはどうかしら？」

「お断りします。」

……参ったわね、この魔道科学という未知の可能性は『アルハザード』の技術に匹敵するかもしれない上に、そのアルハザードと違目の前に、確かに存在している…もし、それをモノにすることができれば娘を、アリシアを……何としてでもこの男から技術を手に入れてみせる！！

——そして、プレシアはフィアに自分の目的の片鱗をさらす。

「…あなた、死者の蘇生に興味はないかしら？」

——しかし、それに対する返答は…

「——け…な。」

「?…どうかしたのかしら？」

——関心でも興味でもなく…

「ふざけるなああああああああああああああああああああああああ  
あああああッ!」

——ありったけの怒声だった。

フェイトside

何故彼が、フィアがこうまで怒り狂っているのか解らず、フェイトもアルフも混乱していた。プレシアも同様で、フィアの豹変ぷりっに呆然としている。『死者蘇生』という言葉が起爆剤だったのは判ったのだが、何故ここまで怒りをあらわにするのか理解できなかった。それに構わずフィアは吠える。

「あんたは…、あんたもそう思っているのか！？死者が生き返りたがっていると、この世に残っている者達の命を対価にしてでも甦りたいと思うと、本気で信じているのか！？死者が喋れないことをいいことに、勝手な思い込みで他者を巻き込むつもりなのか！？」

「フィア！！お願いだから落ち着いて！！」

「どうしたんだい！？いつものアンタらしくないよ！？」

自分を叱る時とも、なのはが見たと言う狂った時とも違う全く別の怒り。そこには様々な感情が入り乱れていた。今にもプレシアに跳びかかりそうなフィアはフェイト達に抑えられ、正氣に戻る。

「ッ！…失礼、取り乱した…。しかし、自分は死者蘇生に興味は無いし、それに活かせる技術は無い。すいませんが、今日はもう失礼させていただく…ああ、ジュエルシードの件はこれから協力するので御安心を…では、ごきげんよう。」

そう言って足早に去っていくフィーア。フェイトとアルフは急いでプレシアに別れを告げそれを追いかけた。ちなみに、プレシアはフェイトが声をかけるまでボーっとしていた。そして、フィーアに追いついたフェイトは早速尋ねる。

「一体、急にどうしたのフィーア!？」

「すまない、嫌なをことを思い出したんでつい…。」

——そう言って歩くフィーアの顔は、どこか暗いものがあった。まるで悪夢を見たような…。



## 第二十六話 フィーアの決意

アルフside

「……ハア…。」

落ち込んだように溜息を吐いたのはフィーアである。場所は『時の庭園』から帰ってきていつものマンション、フェイト達の部屋である。資金を調達したのでフィーアもマンションの一室を所持しているのだが、日中はフェイト達とジュエルシードを探索してるし、それ以外は二人の部屋で食事を作って一緒に食べており、結局ただの寢床と化している。

そして、今日も例によって夕飯を作り（献立は肉野菜炒め）、3人で食べているのだが、フィーアが何かを思い出したかのように溜息を吐いて落ち込み始めたのだ…なにかこう、さっきと違う『やっちまった…』感を滲ませて…。ためしにアルフは尋ねてみた。

「一体どうしたんだい？落ち込んだのは、帰りもだけど…。」

「いや…、プレシアさんに目的とか事情とか色々訊くつもりだったのに、『魔道科学』を見せびらかしたただだった、て…。」

ああ、それでか…と、アルフは納得した。プレシアに激昂したあと、フィーアの表情はマンションに帰るまで暗いままだったが、夕飯を作り終えたとたんこうなったのである。暗いのに変わりないが、内容が若干間抜けてる分、マシといえる。

「…それにしても、本当にあの時どうしたのさ？」

勿論、あの時とはプレシアに激昂した時のことである。その言葉にフィーアの顔に再び影が挿す…。

「…ちょっと嫌なことを思い出したんだって…。」

「あんなに怒る程のことがちょっとなのかい？」

明らかに誤魔化そうとしたフィーアに、アルフが続けて問いかける。バツが悪そうな表情を見せつつも、フィーアは口を開く。

「…よく考えたら勘違いかもしれないし、もうこの話はやめないか？」

「でもさ…。」

「アルフ、やめよ？」

「フェイト？」

尚も問い詰めようとしたアルフを止めたのはフェイトだった。彼女とてフィーアの豹変っぷりには驚いており、同時に自分と同じくらい疑問に思っていた筈だった。

「中々教えてくれないってことは、フィーアが言いたくないってことなんだから、これ以上無理に訊くのはフィーアに悪いよ…。」

「けれど、「アルフ。」…分かった、悪かったよ…。」

「二人とも、ゴメンな…。いつか話すからさ、それまで待ってくれ。」

「うん。」

そうして三人は食事を再開した。しかし、その食卓は終始気まずい空気のままだった。

## ファイア side

夕飯も済ませ、フェイトとアルフは食休みをしながらテレビを眺め、ファイアは皿洗いをしながら再び考え事をしていた。

（ジュエルシードの収集、未知の技術への関心、そして『死者蘇生』……。もう、キーワードは揃っている。どう考えても、プレシアは誰かを生き返らすつもりだ……。）

そこまで考えて、不意に近くに置いてある鏡に映った自分を見た。近日、稀に見る暗さである……。とてもフェイトたちに見せれる顔じゃないので慌てて整えなおした。

（振り切ったつもりだったのにな、“あのこと”は……。いや、ただ忘れようとしただけか……。情けない話だよ本当に。初日に見た夢はこのことを表してたのか？）

あの日見た忌まわしき“あのこと”の夢。そして、夢に現れた彼女は、『エミリア』はどちらを願うだろうか？

（君の二の舞になりそうなプレシアを止めろと言うかい？それとも手伝えと言うのかな？）

自分の信じた彼女なら前者を選ぶかもしれない。しかし、そんなものが当てにならないのは、自分の存在が証明している。自分の知っている彼女はとくに壊れていたのだ…。

———自分の死が決まった、あの時に。

（プレシアさんよ…あんたの気持ちは理解できるさ。けどな、同時にあんたが蘇らそうとしてる人間の、“蘇らされた”人間の気持ちも理解してるからこそ…あんたの気持ちを認めることはできないんだよ…！）

その思いと同時に食器を洗い終え、何かを決心したかのような表情を見せる。その何かを察したりリアがフィーアに話しかける。

《行くんですね？あなたの決着をつけるために。》

「これで過去にケリがつくとは限らないさ…この先、何度も似たような奴に会うかもしれない。けどな、その度に逃げるわけにもいかねえ。そいつらに大切と感じた人間が関わってるなら尚更だ。」

そう言ってフェイトたちの方を見る。二人は仲良く、フィアの視線に気づかずにテレビを見ている。二人はすでに深いところまで関わってるかもしれない…しかしまだ最悪の、手遅れの状況にはなっていない筈だ。まだプレシアを止めれると、自分を助け続けた勘が告げている。

「正直何が正しいのか、どうすればいいのか“俺にも僕にも”解からない…。けれど、このまま放っておくのは絶対に間違っている。」

言うや否やフィアは出かける準備をする。もう一度、『時の庭園』に行くために。

——分かってなかったら教えてやるよプレシアさん…、死者蘇生の対価は、蘇えった人間が一番多く払うことになるってことを。

「フェイト、アルフ。俺、今日はもう部屋帰って寝るわ。お前らも、どうせ夜勤みたいなもんなんだから早めに寝ろよ?」

「分かったよ。」

「おやすみ、フィーア。」

言葉と共にフェイトたちの部屋を出る。そして、自分の部屋（寝床）ではなく、屋上に向かう。

「リリア、座標は？」

《バッチリ記録済みです。いつでも行けます。》

「上出来だ。では、行こうか。」

《了解。目標地点『時の庭園』に設定。転移エネルギー、チャージ。》

リリアから青白い光が噴出され始め、フィーアを包み始める。

（たとえば自分自身と君を否定することになっても俺は…“僕は”自分の心に従うよ、エミリア!!）

《カウント開始します。5, 4, 3, 2, 1, ゼロ!! 転移、発動  
!!》

フィアを包んでいた光が一瞬強く、激しく光った。閃光が治まった場所に、マンションの屋上にフィアの姿は消えていた。



## 第二十七話 過去（前書き）

かなり修正しました

## 第二十七話 過去

プレシア side

『時の庭園』にある、プレシアが大抵居る大広間。そこに存在する隠し部屋の奥に彼女“達”はいた。

一人は、もちろん屋敷の主のプレシアである。彼女は今、同じ部屋の中に居るもう一人と向かい合っていた。そのもう一人は幼い金髪の少女であった。しかし、その少女は目も開けず、口も開かず、眠るように、培養液で満たされた試験管のようなカプセルの中で沈黙を保っていた。

——当然である。彼女は死んでいるのだから。

そんな彼女に向かってプレシアは呟く。

「……私は、間違っているのかしらね？…アリシア。」

思い出すのは、今日やってきた彼の激昂する姿とその言葉。

『死者が生き返りたがっていると、この世に残っている者達の命を

対価にしても甦りたいと思うと、本気で信じているのか！？死者が喋れないことをいいことに、勝手な思い込みで他者を巻き込むつもりなのか！？』

たった一人の肉親であるアリシアが死に、十年以上の日々を犠牲にしながら一心不乱に彼女を取り戻すためにあらゆることをしてきた。全ては、幼くして人生を終わらせたアリシアのためにと……。だがしかし、フィーアの言葉が彼女に一瞬の迷いを生じさせた。

「あなたは……いつも元気で優しかったあなたは……私ともう二度と会えなくても構わないの……？この世に思い残すことは無いの……？」

プレシアは思い出す、かつての愛娘のことを。常に笑顔で、活発で、健気で、優しかったアリシアのことを。そして、彼女と過ごした幸せな日々と……。全てを失ったあの日のことを……。プレシアは考えるのをやめ、さっきまでの迷いを切り捨てた。

「……ふふっ。今更あんな若僧の言葉に、私は何を迷っているのかしら……。今までの全てを、アリシアのために費やしてきたんじゃない……。違法研究にまで手を染めて、あの忌々しい人形まで生ん……。で……。……」

そこまで言っ言葉が尻すぼみになった。何故か最近、あの人形のことを傷つけようとする苦しく感じる。自分の抱える病の苦しみとは全く別の苦しみを……。まるで、悲しんでいるときのような胸の苦

しみを感じるのだ・・・。

「…まあ、いいわ。もう止まれないところまで来たのだから、私はこのまま突き進むだけよ…アリシアとの幸せな日々を取り戻すために。」

そう呟き、プレシアは隠し部屋から出ようとする。その間際、もう一度だけアリシアの方に視線をやり、心の中で彼女にささやく…。

——もう少しよ、アリシア。もう少しであなたと会えるわ。

そして、プレシアは隠し部屋から大広間に出た。しかしそこには、招いた覚えの無い客人がいた。

——プレシアに迷いを与えた張本人、フィーアが大広間に立っていた。

フィーア side

リアの転移で『時の庭園』にやってきたフィーアは、この屋敷に

使用人がいないのを思い出し、勝手に大広間まで入ってきたのである。プレシアに確かめねばならぬことを尋ねに…。

屋敷の主は顔を思いっきり不機嫌なものにし、フィーアを睨みながら口を開く。

「なんの用かしら？」

「本日働いた無礼の謝罪を。」

即答するフィーア。それにプレシアは眉を顰める。

「用件はそれだけ？意外と律儀な男ね。」

「それと、もうひとつ。」

「…何かしら？」

途端にフィーアは緊張したような顔をしながら静かに深呼吸をする。すでに精神的に追い詰められてる彼の様子に、リリアが不安げに尋ねる。

（《大丈夫ですか？あなたにとって一番のタブーと向かい合って…。》）

（…やばくなったら殺してでも止める。）

（《なっ！？できるわけ無いでしょ！？》）

（これは命令だリリア中尉。発狂したら鎮静剤を全部撃て。）

（《…了解。》）

明らかに沈んだ雰囲気を出すリリアに構わず、フィーアは覚悟を決めたかのようにプレシアに切り出す。

「…誰を生き返らすつもりなんです？」

その言葉にプレシアは表情を変えずに沈黙する。だが、やがて口を開き答える。

「やっぱり、分かってしまうわよね…。」

「…そりゃ、あの状況であの言葉ですよ？」

未知の可能性を秘めた技術を見せた途端に『教えて』と『死者蘇生』だもの……と考えれば分かる……。そんなフィニアにプレシアは言葉が続ける。

「私は、十年前に娘を失ったのよ……」

「娘？…フェイトの姉ですか？」

[illegible]

フィーアのその言葉にプレシアは狂ったような嘲笑で答える。その様子にフィーアはフェイトに関して、ある可能性が頭に浮かんだ。そして、それは的中する。

「はははははは……笑わせないで!!」  
“あんな子” ……アリシアの妹  
どころか私の娘ですらないわ!!」

「…じゃあ、何者なんです？」

「“あの子は”アリシアを蘇らす過程で生み出した、アリシアの記憶を持ったクローンよ！！…せっかくアリシアの記憶を持たせたというのに、そっくりなのは見た目だけ…、性格も何もかもアリシアとは全く別のただの“人形よ”！！…“そんな子”をアリシアと同じ娘ですって？冗談じゃないわ！！」

プレシアの口から語られる事実。

——娘、アリシアを蘇らすという目的。

——フェイトが造られた人間であるということ。

——そして、プレシアの心情。

沈黙を保つフィーアに構わず、プレシアは語り続ける。

「やはりアリシアの代わりを造るのは不可能だった…だから私はこの世界を次元震で滅ぼしてでも、次元の狭間に存在し、未知の技術が眠ると言われし『失われた都』への道をこじ開け、そこでアリシアとの幸せな日々を取り戻すのよ！！…そのつもりだったけど、そこへあなたが『魔道科学』を持ってきたのよ。」



そう言ってプレシアは自分のデバイスを起動させる。そして、それをフィーアに向ける。

「あなたの『魔道科学』なら、この場でアリシアを生き返らすことができるかもしれないわ……。今すぐに知っている全ての技術を渡しなさい。そうすれば、痛い目に遭わずに済むわよ?」

オーバーSランクの魔力と殺気を滲ませながら、フィーアに脅しをかけるプレシア。しかし、フィーアはいまだに沈黙を保つ。正直、彼はフェイトが誰かのクローンという事実は気にしていない。似た境遇の人間は身近に“いくらでもいた”のだ。今更フェイトに対する態度を変える気は無い……。それよりも今は……。

その時、いつまでも黙り続けるフィーアに苛立ちを覚えたプレシアはついにキレた。

「ッ!! いい加減、何か言ったらどうなのよ!!」

その瞬間、プレシアが紫色の稲妻をフィーアに向けて放つ。稲妻はフィーアに直撃し、轟音と爆炎がフィーアを包む。

「はぁ、はぁ、……ッ!!……ゴボッ。」

ビチャビチャと音を立てながら自分の足元に吐血するプレシア。病に蝕まれ、今の魔法の反動にすら耐えられない自分の体に齒軋りする。

（この程度で…根を上げてたまるものですか！！アリシアのためにも、私は…。）

——あなたは、ちゃんと理解しているんですか？

「な…ん…ですって…？」

顔を上げると、放った魔法による爆煙が晴れ、無傷でその場に立っていたフィーアが視界に入った。それに驚愕するプレシアを余所に、フィーアは言葉を紡ぐ。

「そのアリシアって子がどんな子か、僕には解りませんよ…。ただ、その子が人に優しい子だったというのなら、こんなことは辞めてください。」

今までに見せたことの無いような口調で、諭すように語り掛けるフイーア。だがプレシアはそれに怒声をもって答える。

「…あなたに何が解ると言うの！？アリシアを、たった一人の肉親を失った私の何が解ると言うの！？解らないでしょう！？そんな、あなたが知ったような口を利かないで！！」

「あなたの気持ちは理解してますよ。ただ、それ以上にアリシアの気持치가解るんですよ…、 “あなた以上にね”。」

その最後の一言はプレシアの怒りの炎に爆弾を投げ込む形になった。プレシアは言葉を発する前に先ほどの紫色の稲妻をフイーアに放った。しかし、フイーアはそれを正面に右手をかざし、己の魔法で弾く。魔法を防がれたことにも構わずプレシアは怒りを露わにする。

「あなたが“私より”…私のアリシアの気持치가解るですって…？よくもそんな戯言を…、よっぽど私に殺されたいのかしら…？」

さっき以上の魔力を込め始めるプレシア。もはや自分の体など関係ない。今、目の前にいるこのふざけたことを抜かした男を殺せればもう、どうでもいい…。

「逆に訊きましょう、あなたに死人の気持치가解りますか…？」

「な…。」

そんなプレシアの憤りをフィーアは一言で霧散させた。しかも、彼は止まらない。

「この世に残された人たちの幸せを願い、死んでいった人の気持ちが解りますか？」

「ア、アリシアはまだ十歳にも満たなかったのよ!? まだ、そんな想いを抱きは…。」

「自分が愛した人が、自分が死んだせいで狂い、堕ちていったと知った人の気持ちが解りますか!？」

「っ!？」

彼は…フィーアは自分とアリシアのことを言っているようにプレシアは感じた。同時に、フィーアが今語っているのは、ただの想像ではないということも感じていた…。

そして、何かを抑えきれなくなったかのように、フィーアが感情を爆発させた。

「僕はこんなこと望んでなかったのに……“彼女”は僕のために叫び続け、狂っていった……狂ってしまったんだ……！……なんで“無関係な人間を殺した”……！？……なんで“僕の弟まで殺した”……！？……なんで“君自身まで殺した”……！？……なんでそうまでして……！……！？」

——僕を生き返らせた？

その独白にプレシアの表情は驚愕に染まる。

自分の求めたもの、死者蘇生の結果が目の前にいる：、にも関わらずプレシアに歓喜や高揚などの感情は芽生えなかった。何故なら、彼を蘇えらしたのであろう人物の取った手段と、自分自身がやろうと

したことは同じに思えたのだ。そして…

（もし、最初に考えた方法を使ったら……アリシアの心は…。）

最初に考えたジュエルシードの暴走による方法は、この世界の人間すべてを犠牲にすることになる。自分はアリシアが生き返ればどうでもいいとさえ思っていた。アリシアが人を傷つける行いを嫌っていたにも関わらず…。

“あなたのため”と言いつつ、結局自分のエゴを満たすだけの結果に行き着いていた。

（私は間違っていたの…！？アリシアを、“彼”のように悲しませようとしていたの…！？）

彼、フィーアは完全に取り乱し始めていた。プレシアはすでに視界に入っていないようである。焦点の定まっていない瞳で天井を見上げ、泣き叫ぶように、吼えるように、答えが返ってくることの無い問いかけを続ける。

「僕はどうすればよかったんだ！！こうなると分かっていたれば、愛されたくなかった！！憎まれたかった！！怨まれたかった！！君に殺されるほど嫌われればよかった！！…いっそ、生まれてこなければよかった！！」

「あ、あなたは…いったい……。」

――どんな過去を経験したの？

そう問いかけようとしたその時、フィーアがまるで糸の切れた操り人形のように倒れた。

《死なないでくださいよ!?!?》

「…わりい、心配かけたが…少し眠るだけで済みそうだ……。」

完全に発狂する前にリリアが鎮静剤を打ち込んだようである。お陰で大惨事は免れそうだ…。

「フィーアッ!!」

薄れ行く意識の中でフェイトの声が聴こえたような気がしたが、確かめる前にフィーアは意識を手放した…。

——そして、彼の意識は遡る。忌まわしき過去へと…。



## 第二十七話 過去（後書き）

次回過去巡り

回想第一章 14年前 前編（前書き）

短くして分割

## 回想第一章 14年前 前編

??.? side

（14年前（民暦42年）、ベルフイーア連邦のとある町で…）

「とうっ!」

――ボカアアン!!

「ウボオアアアアアッ!」

ファンタジーとSFがごちゃ混ぜになった世界、『ベルフイーア』。この世界が『連邦』という一つの組織にまとまるまで、長い長い二大勢力による戦争の時代が続いた。その名残故か、村にも街にもかつての兵士、傭兵、騎士、戦闘兵器が闊歩している。そのほとんどが連邦の正規兵になったが、一部の者たちは傭兵稼業を続けたり、賞金稼ぎへと鞍替えした。

そのような職業に就いた身とはいえ、己は戦士。自分の腕前に絶対

の自信と誇りを持つ。故に、それを誇示するために行われる決闘は、この世界では日常茶飯事である……もつとも…。

「勝ったー！！ちゃんと見てたかりーマス？」

「うん！！兄ちゃんすげえー！！」

「……（返事が無い、ただの屍のようだ）。」

この辺りでは名の知れた傭兵を圧倒する“八歳児”は流石に珍しい光景である…。傭兵を倒した少年に、彼の弟がはしやぎながら駆け寄っていった。さらにそこへ…、

「相変わらず強えな、フイー坊…。」

「あ、行商のおじさん。こんにちわ。」

野次馬達が倒されて気絶した傭兵（負け犬）に集まり始めたとき、顔馴染の行商人がフイーアに声をかけた。

「ご褒美だ。あっちに行った時に手に入ったい品だぞ？」

「本当！？ありがとう！！」

そう言って受け取ったのは『コーヒー豆』である。もう一度言おう、フィーアは今“八歳”である。

「兄ちゃんよく飲めるよね、そんな苦いの…。俺はココアの方がいいや。」

「まったくだ、リー坊。しかもフィー坊はバリバリのブラック派ときやがった…。こいつは将来が楽しみなような不安なような…。」

「ひどいよ二人とも…。父さんが無理やり飲ませたのがキツカケだったけど、本当においしいんだもん…。」

ちなみに父さんこと『トーラス・レイガード』はその時、調子に乗って酒も飲ませようとしたが…。妻、『ベルノア』に見つかり、半殺しにされたそう…。(ベルフィーアに飲酒の法的年齢制限は無いが、未成年に飲ますのは体に悪いことにかわりないので各自の家族が責任を持って管理している。)

「ところで、リー坊の方は最近どうなんだ？兄貴に追いつけそうかい？」

「まだまだ無理だよ。俺、兄ちゃんほど魔法使えないし。」

「そう言うけど、リーマスは僕より剣の扱いがうまいじゃないか。」

フィーアもリーマスも、戦士としてかなりの領域にいる。二人ともある程度のことはこなすが、フィーアは特に魔法、リーマスは剣の扱いがうまかった。リーマスは5歳の時に初めて剣を握ったのだが、才能があつたようで1年経った今では『天才剣子』の異名を持っていた。

「はっはっはっ、頼もしくも末恐ろしい小僧共だな。これなら二人とも夢を叶えられるんじゃないか？」

一一二人で軍に入り、父と祖父のような英雄になる。

「うん、絶対に叶えてみせる!! な、リーマス。」

「うん、兄ちゃん!! …あ、そういえば今何時かな？」

「え…?」

そう言って広場の時計台を見て時間を確認するレイガード兄弟。そして、二人は顔を青ざめさせた…。

「しまったあああ!!」

「……またエミリアの嬢ちゃんとの約束を忘れて、道草くってたのか…。」

行商のおじさんは呆れたように呟く。彼にとっては見慣れた光景のようである。

「な、なんで時間のこと言わなかったんだよりーマス!？」

「兄ちゃんが『僕の戦う所をちゃんと見てろ』って言ったんじゃない?!」

「バカ、そんなの優先しなくていいよ!! “アクマリア” に会いたいのか!？」

「『アクマリア』って何よ…。」

「怒って、暴走して、残虐な悪魔みたいになったエミリアのこと……って、あれ？」

フィーアは気づいた。今の会話にリーマス以外の誰かが加わったことを……行商のおじさんが逃げるように去ったことを……リーマスが顔をさらに青くさせていることを……そして……

「へえ、知らなかったな、フィーアが私のこと、そんな風に言ってたなんて……ね？」

フィーアは声のした方へと恐る恐る振り返る。するとそこには……

「約束すっぱかしかったことと、今の言葉の説明……してもらおうわよ……？」

フィーアとリーマスの幼馴染であるエミリアが、笑顔で青筋を浮かべながら立っていた……。



**回想第二章 14年前 後編（前書き）**

次回からついに暗くなります。

## 回想第二章 14年前 後編

フイアー side

「…痛い。(泣)」

「兄ちゃん、頭がすごいことになってるよ…?」

特大のたんこぶを頭に作らされたフイアーは蹲っていた。そんな彼に拳骨をくらわせた少女は、長い黒髪をなびかせながら、紫色の瞳でフイアーを見下ろしていた。

「フンッ!! 私との約束忘れかけた上に、余計なこと言うからよ。」

レイガード兄弟の幼馴染、『エミリア・クロムウェル』は辛辣な言葉を投げかける。

「だって、しょうがないじゃないか…、腕試しは僕たちの趣味だもん。」

「兄ちゃん、俺はそんなに好きじゃないんだけど？」

その言葉に弟を肘で小突くフィーア。そんな二人に白い目線をやり、エミリアは溜息をつく。

「ハア…、もういいわ。早く行きましょ？」

「はいはい。」

「ほーい。」

そして三人は歩き出した。目的地はエミリアの自宅である。そこで新しい魔法を“創って”遊ぶ予定だったのだ。自称魔法が苦手のトーラスは大抵実験台にされるのだが、天才の兄とそれに匹敵する才能を持ったエミリアの試作魔法のほとんどは一発で成功するので、そんなに嫌がってない。

「今日はどうする？」

「新しい治療魔法でも作らない？」

「え…、もしかして俺に今すぐ怪我しろとか言わないよね？」

「「言わない（わ）よ。」」

身に余る才能故に、三人には同年代の友達がほとんどいなかった。そのため、三人は互いの絆をととても大切にしていた。滅多に表に出さないが、フィーアにいたっては特別な感情をエミリアに抱いていた。

「ところで、エミリア…。」

「なによ?」

「さっきはゴメンね…。」

フィーアの謝罪にエミリアはムスツとした表情を見せて返す。

「どっちのことかしら?」

「え?」

「遅刻の方? “アクマリア”の方?」

「…両方。」

素直に認めると、エミリアはすんなりと表情を優しいものへと変えた。その表情に、フィーアはホッとした。同時に、少しドキッとした。

「いいわよ、許してあげる！さ、早く行きましょ？」

「うん!!」

「…俺、帰っていい？」

三人は自分たちの夢と未来のために歩き続けていた。周囲から尊敬されようが、恐れられようが、三人が一緒なら何も気にならなかった。何でも成し遂げれそうな気がした。不可能なんて無いと感じた。

一人は、英雄になるために。

一人は、尊敬する兄を追いかけるために。

一人は、自分の才能で誰かを救うために。

自分たち三人は、いつまでも一緒に居て、笑いあい、泣きあい、喜び合い、共に生きると信じて疑わなかった。ずっとこの楽しい日々が続くと信じて疑わなかった。

――この2年後、フィーアが死ぬまでは。

**回想第三章 12年前（前書き）**

フイーア・10歳

エミリア・10歳

リーマス・8歳

## 回想第三章 12年前

トーラス side

ここは連邦軍お抱えの最先端医療施設。魔道科学を用いた医療技術は『治せぬ者は死者のみ』と豪語するだけの実力と実績があった。にも関わらず、今日ばかりは病院の一室に暗い雰囲気が漂っていた。

フィーアが10歳を過ぎて少し経ったころ、異変は突如起きた。唐突にフィーアが倒れたのである。すぐさま精密検査を受けたフィーアだったが、彼とその家族たちは絶望するしかなかった。

――連邦のあらゆる医療技術を持っても治療不可能。余命は長くて一ヶ月。

それがフィーアに与えられた現実だった。厳密に言うと、フィーアの症状は怪我や病気では無かった。フィーアの人体にある魔力源（結構違う部分があるが、リンカーコアみたいな存在）が出す自身の膨大な魔力に、自分の体が耐えていなかったのだ。この症状自体は珍しくないで、魔力源そのものを抜き取り、魔法が使えなくなる代わりに命を取り留めるという治療法が存在した。しかし、無情にもフィーアにはこの手段すら使えなかった。何故なら：



「魔力源がファイアの魂そのものとはどういうことだ!？」

彼の父親、トールスが医者に詰め寄る。いや、もはや怒号だけで殺しかねない勢いだった。その怒気に若干震え上がりながらも、医者は懸命に説明する。

「こ、言葉のとおりです。検査の結果、お子様の魔力源は独立した器官ではなく、彼自身の魂と一体化しているのです。」

通常魔力源は、実体を持っているわけでは無いが一種の内臓器官として存在しており、それが無くなっても命まで失うことは無い。魔法と科学の両方を使いこなす連邦の技術を持ってすれば、簡単に取り外せるし、取り付けることもできる。

しかし、連邦の魔道科学を持っても解明できないものがあつた。『靈魂』である。魔法を理解してるが故その存在は認められたが、その存在そのモノの謎は解明できていない。判っているのは恐ろしくデリケートであり、それが無くなった生き物は死ぬということぐらいである。

「つまり、このまま放置したら死ぬが、死ぬ原因を切り離してもファイアは死ぬというのか…?」

「残念ながら…。」

「魂から魔力源を切り離すというのは無理なのか？」

「今の連邦の技術ではとても無理です。魂は肉体から一定時間離れると自動的に消滅してしまいます。ただでさえ魂の構造が判らないというのに、ぶっつけ本番で彼の魂を解剖したら治療どころではありません……」

まさに八方塞がり。敵を屠るしか能の無い自分の無力感に、連邦の英雄は絶望した。

## ファイア side

ファイアは、世間的に見たら短くも充実していた自分の人生に思いを馳せていた。不思議と自分の命のタイムリミットが近づいていることに恐怖を感じなかった。それは実感が湧かないだけなのか、自分が異常なのかは分からなかった。

今、ファイアは病室のベッドでおとなしくしていた。リーマスと母親は自分の傍で眠っている。さっきまで母は『ファイアの病は自分のせい』だと泣き続けていたのだ。確かに自分の魔法の才能は母親譲りと自負していた。しかし、仮にこの病の原因が本当に母親の才能のせいであっても、彼は母親を恨む気にはならなかった。むしろ

感謝したかった。何故なら…。

「こんにちは、フィーア。お見舞いに来たわよ。」

「ありがとう、エミリア。」

彼女と仲良くなる機会をくれたのだから。出会って4年経った今、フィーアはエミリアのことが好きであることを自覚していた。まだ、本人にそのことは教えてないが…。

「退院はいつになりそうなの？」

「僕にも分からないや。でも、いつか元気になってまた3人で遊ぼう？」

「……うん…。」

そして、自分の余命が一月も無いことも教えていない。これはフィーアが家族に自らお願いしたことである。『エレノアに僕のことには教えないで』と。彼女に泣かれたくないから、と家族にそう頼んだ。

「…ねえ、フィーア。」

「なに？」

「……私は諦めないわよ…。」

「え…？ なんだって？」

「ッ！？…なんでもないわ。とにかく、あなたが元気になるの、リ  
ーマスと待ってるからね！！！」

「うん、ありがとう！！！」

この時、フィーアがエミリアの呟いた言葉を聴いていたら、あるいは自分の運命とそれに対する想いを彼女に打ち明けていたら、未来は変わっていたかもしれない。

――そしてこの2週間と3日後、『フィーア・レイガード』は十年という短い生涯を終わらせた…筈だった…。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0721x/>

---

漂流者はハイブリッドな現役将校～オヒトヨシナシニゾコナイ～

2011年11月9日16時06分発行